

昭和58年度

唐古・鍵遺跡

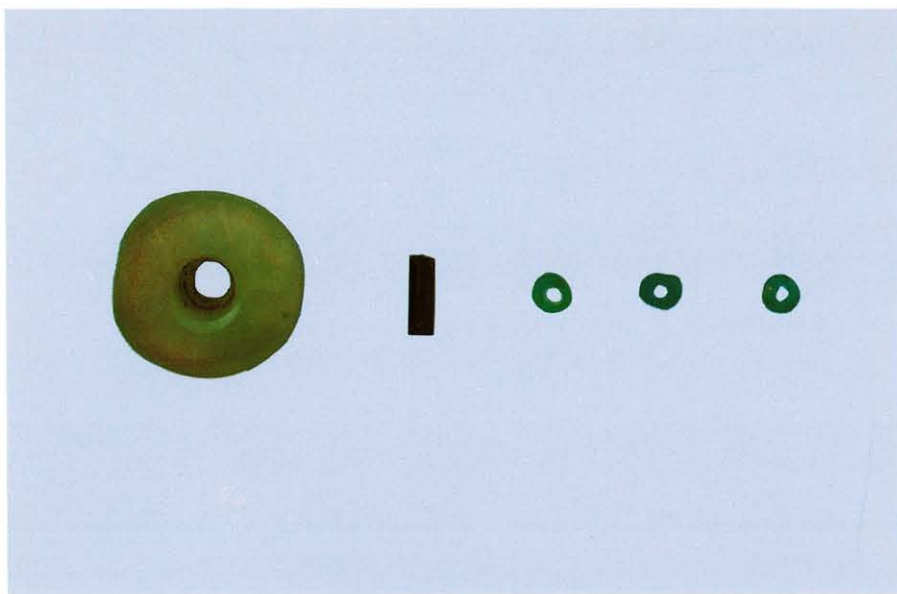
第16・18・19次発掘調査概報

黒田大塚古墳

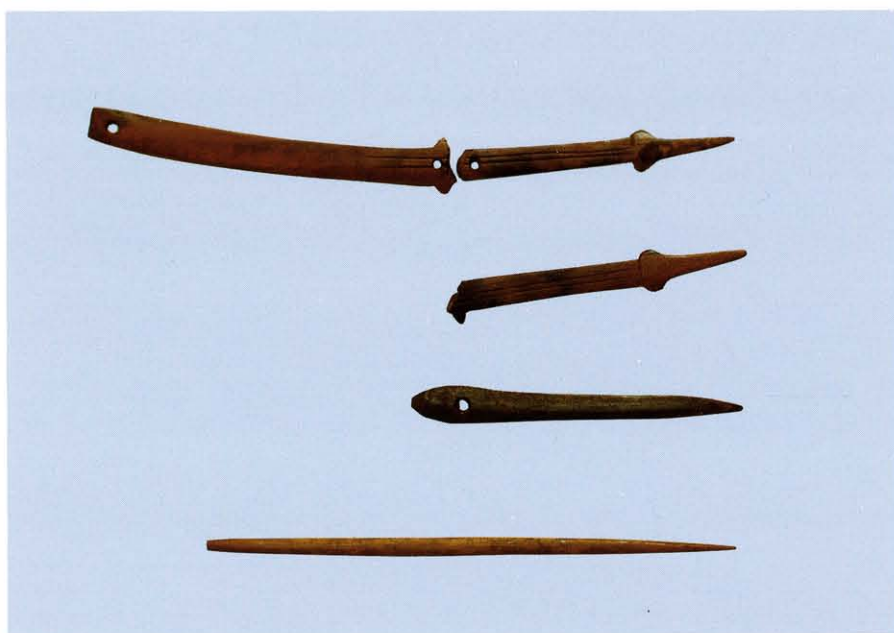
第1次発掘調査概報

1984

田原本町教育委員会



第19次調査出土玉類 (1/2)
(左から硬玉製玉、碧玉製管玉、ガラス小玉)



第19次調査出土骨製品 (1/2)

序

このたび、昭和58年度におこないました唐古・鍵遺跡と黒田大塚古墳の発掘調査概報を発刊することになりました。

田原本町は青垣山をめぐる奈良盆地の中央部にあって、沖積層からなる肥沃な穀倉地帯で、数多くの埋蔵文化財が包蔵されています。なかでも、唐古・鍵遺跡は弥生時代の大集落跡として著名であります。

唐古・鍵遺跡の調査も関係各位のご協力を得、継続調査として第19次をむかえることとなりました。調査の積み重ねは除々にはありますが往時のムラの様子を明らかにしてきています。

また、黒田大塚古墳は盆地有数の前方後円墳で、昭和58年には県史跡に指定されました。これを機に、田原本町では本墳の保存・整備をおこなうこととし、発掘では数多くの整備資料を得、多大な成果をあげることができました。

本書に示した調査の成果が、幾分なりと利用、活用いただければ、幸いに存じます。しかしながら、まだまだ不備、不足な点があるかと思えます。御批判、御教示を賜われれば幸甚です。

今後も唐古・鍵遺跡については調査を実施していく予定であり、あわせて本遺跡の史跡指定にむけ準備を進めているところであります。どうか、関係各位の御協力とご指導をお願いする次第であります。

田原本町教育委員会教育長 岩 井 光 男

昭和58年度

唐古・鍵遺跡

第16・18・19次発掘調査概要

例 言

1. 本書は田原本町教育委員会が昭和58年度国庫補助事業として実施した奈良県磯城郡田原本町唐古・鍵遺跡の第16・18・19次発掘調査概報である。
2. 発掘調査は橿原考古学研究所の指導を得、現地調査は田原本町教育委員会がおこなった。
3. 調査に際しては土地所有者をはじめ、唐古、鍵在住の方々に御理解と御協力を賜った。記して感謝します。

また、調査補助ならびに整理、概報作製にあたっては、豊岡卓之、岡部裕俊、塚田良道、福島 撰、水ノ江和同(同志社大学)、藤田至希子、加田隆志、清石洋子(奈良大学OB、奈良大学)、桑原久男、高 善雄(京都大学)、松田祥子(大谷大学OB)の諸氏に協力して戴いた。

4. 調査及び概報作製にあたっては下記の方々より御教示、御協力を賜った。記して感謝します。同志社大学森浩一、橿原考古学研究所石野博信、寺沢薫、松本洋明、大阪府教育委員会宮崎泰史、山口大学中村友博、愛知県清洲貝殻山貝塚資料館高橋信明、愛知県教育サービスセンター石黒立人、京都府埋蔵文化財調査研究センター田代弘の諸氏。また、出土獣骨の鑑定には早稲田大学金子浩昌先生、出土石器の石材鑑定および砂礫の分析には刑部小学校教諭・橿原考古学研究所研究員奥田尚氏に依頼し、奥田氏には一部、執筆して戴いた。
5. 本概報の執筆は目次に一部明記したが、それ以外については藤田三郎が執筆、最終的に編集をおこなった。

本文目次

はじめに	1
I. 第16次発掘調査の概要	
1. 調査の全容	3
2. 遺構	
(1). 層序	3
(2). 弥生時代前期の遺構	3
SD-104、SD-105、SD-106、SX-102、SX-103	
(3). 弥生時代中期の遺構	7
SD-101、SD-102、SD-103、SX-101	
(4). 中世の遺構	8
中世大溝、中世素掘溝	
3. 出土遺物	
(1). 土器	(加田隆志・藤田) 9
(2). 木製品	13
(3). 石器	(塚田良道) 14
(4). 土製品・石製品	19
4. まとめ	20
II. 第18次発掘調査の概要	
1. 調査の全容	21
2. 遺構と遺物	
(1). 層序	21
(2). 遺構	21
(3). 遺物	23
3. 砂礫の分析	(奥田 尚) 23
4. まとめ	26
III. 第19次発掘調査の概要	
1. 調査の全容	28
2. 遺構	
(1). 層序	28
(2). 弥生時代前期の遺構	30
SD-203・SD-1203、SK-1101、SK-1102、SK-1103	
(3). 弥生時代中期の遺構	32
SD-204、SD-103、SD-202・SD-205、SK-114、SK-1104、SX-202(藤田)	
SK-105(桑原久男)、SK-102(豊岡卓之)、SK-101(藤田)	
(4). 弥生時代後期の遺構	39
SD-102	

(5). 古墳時代の遺構	39
S D-201、S X-101	
(6). 中世の遺構	40
中世大溝 I、中世大溝 II	
3. 出土遺物	40
(1). 土器	40
S X-202(藤田)、S K-105出土土器(桑原)、S D-204出土土器(豊岡、藤田)、搬入土器、 絵画土器(藤田)	
(2). 木製品	60
(3). 石器	61
(4). 土製品・石製品	63
(5). 骨製品・獣骨	65
4. まとめ	
(1). 遺構	67
(2). 遺物	68
IV. 第16・18・19次調査出土石器石材について	(奥田) 70

はじめに

本年度の唐古・鍵遺跡の調査は計4件（3件は国庫補助金によるもの、他の1件は業者負担によるもの）である。昭和58年度の調査も昨年度に引きつづき、国道24号線沿線のものが3件もあり、いずれも開発行為によるものである(第1表)。唐古・鍵遺跡の継続調査も7年目をむかえたが、調査原因別にその推移をみるならば、民間による開発行為がここ2年に集中していることが

第1表 昭和58年度唐古・鍵遺跡発掘調査一覧表(国庫補助対象分)

調査次数	所在地	原因	地目	土地所有者	調査期間	調査面積
第16次	鍵 ²⁸⁰⁻¹ ₂₈₂₋₂ 番地	造成工事	休耕地	金水辰雄	1983.4.18~6.24	約155㎡
第18次	唐古池	老朽ため池工事	池	唐古大字	1983.11.28~12.3	63㎡
第19次	唐古 ⁵⁷⁻² ₅₉ 番地	造成工事	休耕地	植田正明	1984.2.6~5.2	約315㎡

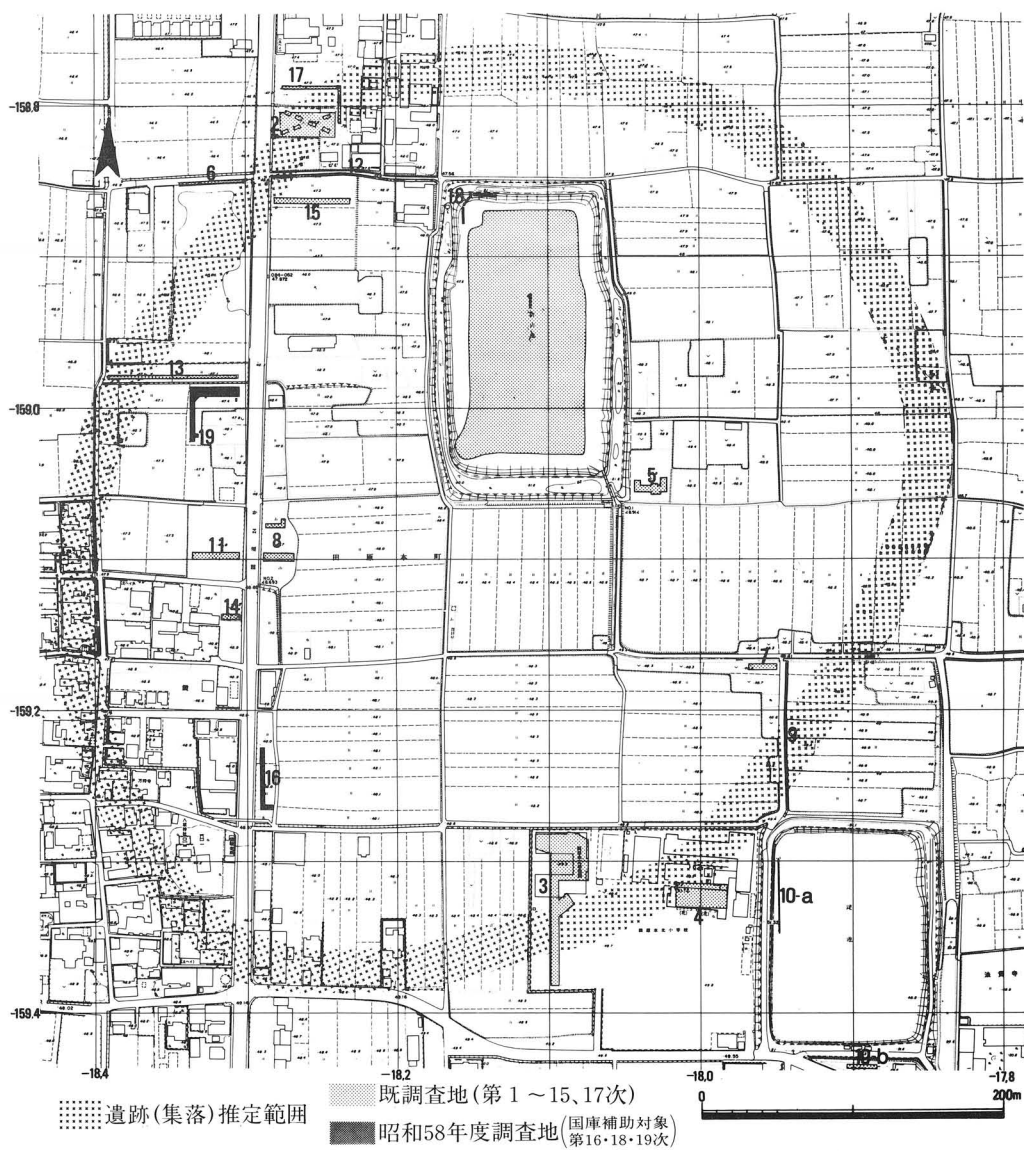
明白である(第2表)。徐々にではあるが、本遺跡の調査内容も変容期をむかえはじめた。幸いにも、それぞれの調査では調査関係者や土地所有者、唐古・鍵大字の協力を得、調査体制としては整いつつあり、また、調査成果も各調査ごとに新しい成果をあげることができてきた。しかしながら、今後も予想される遺跡地への開発に対し、万全な保護処置を講ずる段階にさしかかってきているようである。

第2表 唐古・鍵遺跡における発掘調査の原因一覧表

年 度 (昭和)		11	42	52	53	54	55	56	57	58	計
開 発	公共事業	1 (1)	0	1 (3)	1 (4)	2 (6.9)	1 (10)	1 (12)	0	1 (18)	8
	民間	0	0	0	0	0	0	0	3 (13.14.15)	3 (16.17.19)	6
範囲確認		0	1 (2)	0	1 (5)	2 (7.8)	1 (11)	0	0	0	5
計		1	1	1	2	4	2	1	3	4	19

() の数字は発掘調査次数を表わす

さて、本概報に掲載する調査は昭和58年度におこなった第16次、第18次、第19次調査分である。第16次調査は遺跡の南西部、第18次調査は遺跡の北部、第19次調査は遺跡の西部にあたる。これらの調査では弥生ムラの変遷と様相を把握する上で重要な遺構・遺物の発見があり、大きな成果をあげることができた。



第1図 唐古・鍵遺跡の範囲と調査地点

I. 第16次発掘調査の概要

1. 調査の全容

本調査地は遺跡の南西部にあたり、第3次調査地の西方約200m地点である。また、弥生前期の土坑の集中した第8次・11次・14次調査地の南方約150m地点でもある。調査はL字形のトレンチで、43m×3.2mの南北に長いトレンチとその南端に長さ5mの東西トレンチを設定した。水田耕土層以下第3層まで機械によって除去し、その後は人力による発掘作業を進めた。その結果、中世の諸遺構と弥生時代前期から中期に至る大溝等を検出した。トレンチ南端において弥生時代中期の大溝と思われるものを検出したが、その規模を確認するため、幅1m、長さ2.5mさらに南へトレンチを延長した。この調査では予想もしていなかった大溝群の検出によってムラの構成と変遷を考える上で重要な調査となった。

2. 遺構

(1). 層序

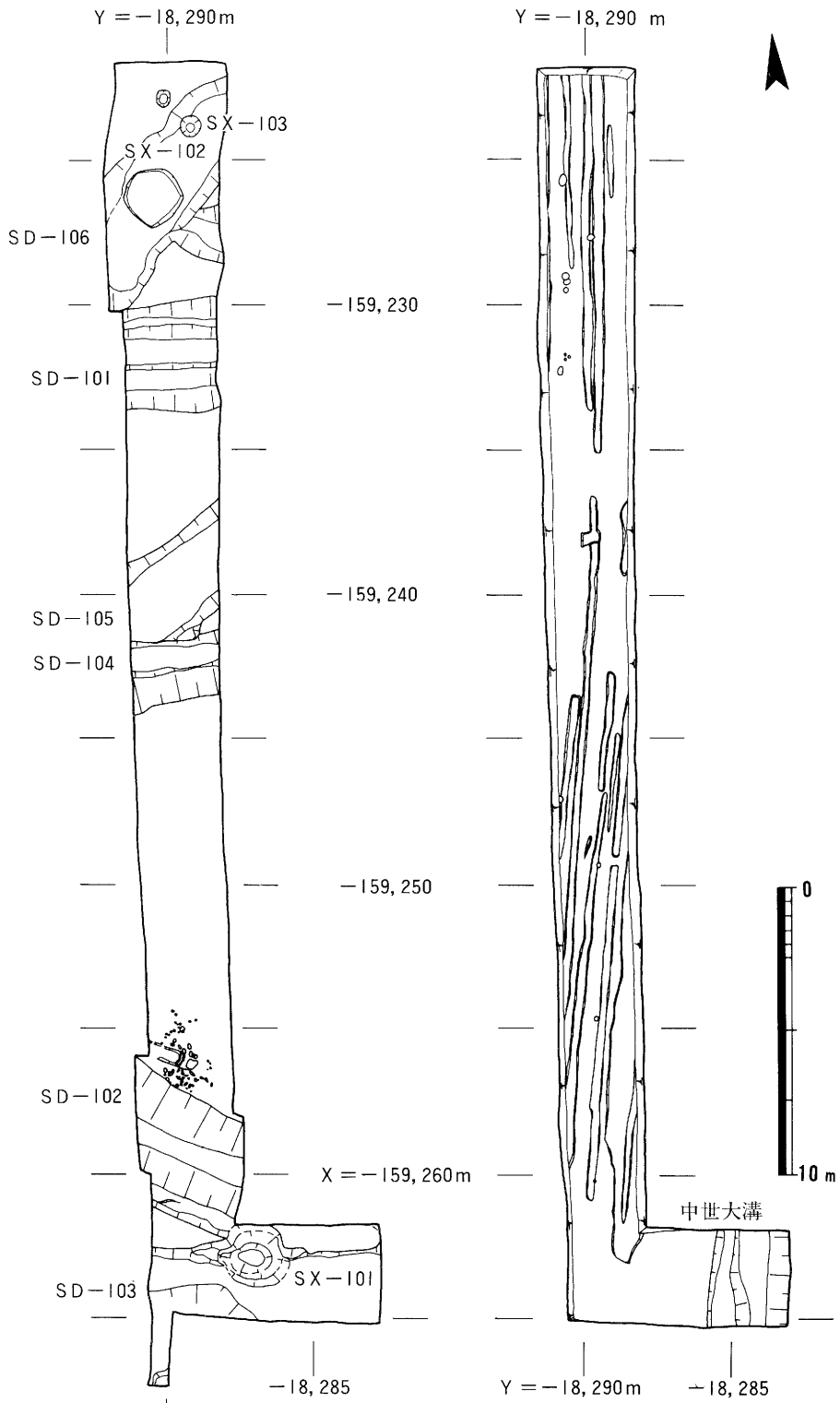
トレンチが45mにおよぶため、調査地全体は均一な層で構成されていない。したがって基本土層においても若干の質的变化や色調、さらには層の厚さも異なっている。しかし、そのような状況の中で調査地の基本土層を抽出すれば、第1層・第2層は水田耕土で第1層は部分的にみられるものである。第3層水田床土、第4層暗茶褐色土層、第5層黄褐色微砂層、第6層青灰色微砂層第7層灰色粗砂層である。遺構を検出した土層としては第4層の上面で中世素掘溝、第4層の直下で中世大溝がある。また、第5層上面で弥生前期から中期の諸遺構を検出したが、従来の調査地と異なり、弥生後期の遺構面及び遺構は検出できず、同じムラ内部にあってもかなり立地状況が異なっていることが判明した。

(2). 弥生時代前期の遺構

弥生時代前期の遺構は大溝3条と土坑2基を検出した。大溝や土坑はトレンチの北半に集中しており、前期の遺構がこの調査区から北西に広がることを示している。

SD-104

トレンチ中央で検出した大溝である。本溝はほぼ東西方向に走る溝で、SD-105によって切られており、SD-104の北肩は失なわれている。現在、溝幅は約2.4mあるが、本来は推定約3mの幅をもっていたと思われる。深さは約1.1mで、溝の断面形態は逆台形を呈する。溝の堆積状況は本遺跡の大溝の一般的な堆積と異なり、砂質土による埋積がみられることから水の流れが比較的速く、短期間に埋没したようである。ベース砂層からの流れ込みが溝の肩部にみられ、約10~20cmの砂質土の互層によって肩部附近から溝は埋没している。また、溝中央部附近にわずかに黒色粘土の堆積がみられ、自然木が集中していた。遺物は土器や流紋岩の石材などで、量は比較的少ない。



第2遺構面(弥生前・中期)遺構平面図

第1遺構面(中世)遺構平面図

第2図 第16次調査遺構平面図

第3表 第16次調査溝一覧表

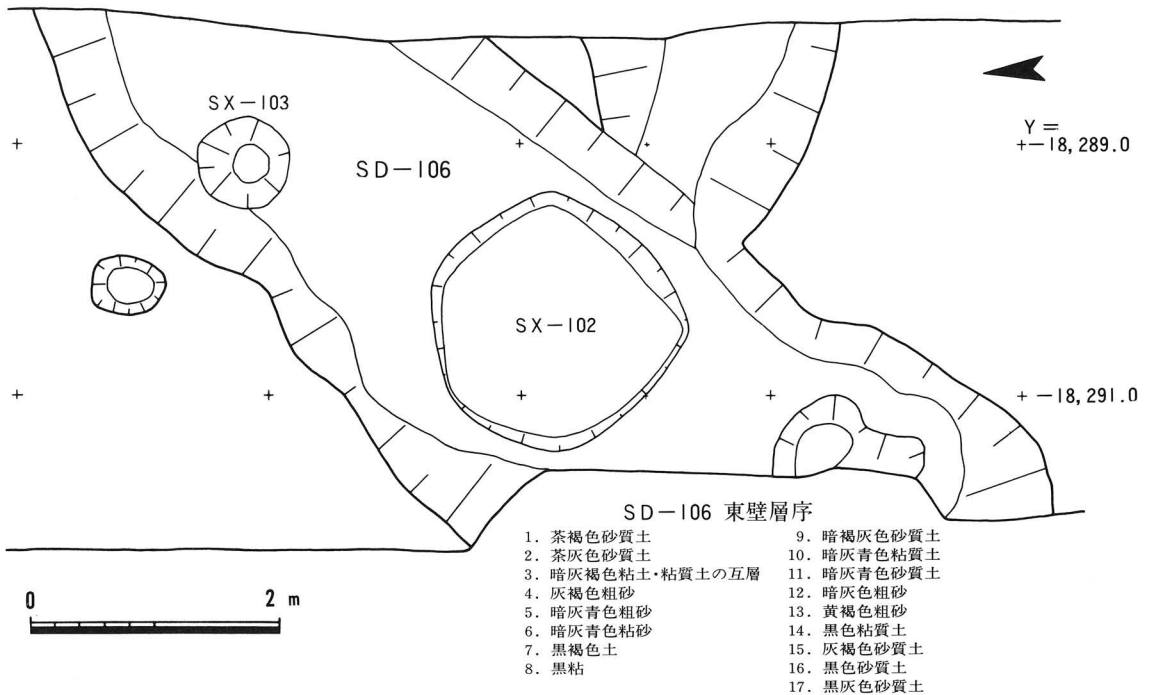
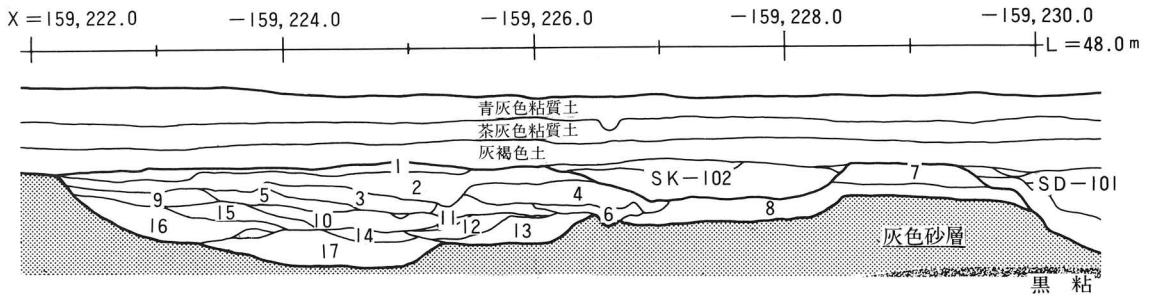
溝番号	規模(m)		溝底 標高	走行方向	継続時期(弥生)					主要遺物	備考
	幅	深度			I	II	III	IV	V		
SD-101	4	1.2	45.8	東 - 西		←	→				区画溝
SD-102	4	1.2	45.9	東南東 - 西北西	←	→				手斧柄	区画溝
SD-103	5以上	0.6	46.5	東 - 西	←	→				建築部材	区画溝 SD-102と合流
SD-104	推定3	1.1	46.0	東 - 西	↔					流紋岩石材	
SD-105	推定3.2	0.6	46.4	北東 - 南西	↔					流紋岩石材	前期段階の環濠?
SD-106	3.3	0.7	46.2	北東 - 南西	↔					建築部材	前期段階の環濠?

SD-105

SD-104の北側で検出した大溝である。北東から南西方向に走向する溝であるが、弥生中期の自然流路と思われる砂層堆積によって北側の肩を失っている。推定溝幅約3.2m、深さ約0.6mを測る。溝の断面形態は逆台形を呈するが溝幅に比較して、浅い溝である。本溝の堆積状況も前述SD-104と同じく砂質土によって埋没しており、上層黄褐色砂質土、中層暗青灰色砂質土、下層灰黒色砂質土に大きく分層される。遺物は土器・木製品、流紋岩石材などが出土している。下層からは流紋岩石材が多量に出土し、石庖丁の製作過程を知る上で重要な未成品、破損品、剥片等があり注目される。

SD-106

トレンチの北端、前述SD-105の北約10mで検出した溝である。走行方向はSD-105と並行し、北東から南西方向に走る。溝幅約3.3m、深さ約0.7mを測る。溝の肩部及び溝底が灰色砂層のベースであるため、砂質土の互層堆積が激しく、10cm前後の砂質土層によって溝内堆積が形成されている。本溝埋没後にSX-102が溝中央部に掘削されたと考えられるが、調査当初、土坑の平面プランが明確に検出できず、土坑の埋土である黒色粘土は溝内の局所的な堆積として認定していた。しかし、遺物の出土状況及び黒色粘土の堆積のしかたよりSD-106を切って土坑が掘削されたと推定される。本溝の遺物としては第I様式新段階の土器や建築部材と考えられる木製品などがある。



第3図 SD-106 遺構平面図及び断面図 (S = 1/60)

SX-102

SD-106の大溝が埋没した段階に、溝中央部に掘削された土坑である。本土坑については、SD-106の項で記述したように平面プランを検出できなかったが、土坑下端から推察するに径約2.5mの不整円形の土坑と思われる。深さは約0.7mを測る。土坑埋土は黒色粘土層であるが上・下二層に分層できる。上層では多量の本製品・土器が出土したが、下層の遺物は少ない。上層では平鍬や杓子の未成品、板材、狭鍬、竪杵、匙などの木製品、壺、鉢など半完形の土器、流紋岩原礫(重量約9.5kg)が出土した。下層では木製高杯杯部が出土している。このような第I様式の大形土坑は第1次調査時に検出された土坑と遺物の構成が類似しており、また、今回このように溝中に掘削されていることから推定して貯蔵穴的な性格を有していた可能性が高い。

S X - 103

トレンチ北端で検出した土坑である。S D - 106 によって切られており、上面を欠失しているが、残存径約75cm、深さ約40cmを測る円形の土坑である。本土坑は粗砂層中に掘削されており、湧水による土坑周壁の崩壊を防ぐために大形壺胴部破片を据え置いていたと思われる。壺破片は残存最大径約62.5cmを測り、底部と胴部上半を打ち欠いて円筒状にしたものである。土坑の埋土は灰黒色砂質土である。以上のような検出状況より壺棺とは異なり、井戸的な集水施設としての性格があたえられるであろう。これと同様なものは第17次調査においても検出している。

(3). 弥生時代中期の遺構

弥生時代中期の遺構としては大溝3条、土坑1基、小ピット群などがある。トレンチのほぼ全面で検出したが、遺構では溝中心の地区と考えられよう。

S D - 101

トレンチ北端に位置し、S D - 106 の南側で検出した大溝である。本溝はほぼ東西に走向し、溝幅約4m、深さ約1.2mを測る。溝の断面形態は溝肩中位にテラスを有し、二段の逆台形を呈す。溝の堆積土は大きく5層に分層することができる。第1層は黒色土で溝上面を広く覆い、土器細片を大量に包含していた。土器はほとんど接合しない破片である。第2層は黒色粘土層で、この層も大量の土器を含んでおり、第1層より土器片はやや大きく、半完形品を含むようになる。また、タタキ板状の木製品や木片もわずかながら出土している。第3層も同じく黒色粘土層で溝の北側肩部に堆積している。着柄鋤、板材などの木製品などが出土している。第4層は溝南側肩部に堆積した土層である。ベースの粗砂層の流れ込みで形成されたと思われ、粘砂層・砂質土層の互層である。本層も着柄鋤、平斧柄などの木製品が中心に出土している。第5層は最下層の堆積で黒色粘土層である。遺物は少ない。本溝の埋没時期は出土土器より第4・5層が第Ⅱ・Ⅲ様式、第1～3層が第Ⅳ様式である。

このS D - 101 の南3mにおいて本溝と並行するように幅1m、深さ0.3mの小溝が走っており、半完形の土器を含んだ黒色粘土層で形成されていた。時期は第Ⅳ様式である。

S D - 102

トレンチ南端で検出した東南東から西北西方向に走向する溝である。溝幅約4m、深さ約1.2mを測り、断面形態は逆台形を呈する。本溝は黄褐色微砂ベース層より掘られているが、溝の中位から下位にかけてはベースの灰色粗砂層が溝肩面に露出している。このため、溝の堆積土は溝肩面のベース粗砂層の流入によって形成された砂質土層が大半である。砂質土は溝肩部両側に堆積し、中央に黒色粘土が堆積している。大きく砂質土→黒色粘土という形成のしかたが3回繰り返えされている。本溝より、手斧柄や土器が出土しているが遺物は少ない。本溝は土器より第Ⅱ～Ⅲ様式に開口していたと思われる。

本溝の北側で径10cm前後の小ピット群を検出したがその性格は不明である。

SD-103

SD-102の南側で検出した溝状の遺構である。ほぼ東西に走向するものでトレンチに平行して検出した。南側の肩は検出していないが、幅5m以上の規模を有する。深さは約0.6mを測り、比較的浅い。SD-102との切り合い関係は交差部がSX-101と中世大溝に切られており不明である。しかし、廃棄された土器よりほぼ第Ⅱ～Ⅲ様式にはどちらも開口しており、合流していたと考えられる。堆積土は大きく4層に分層され、上層黒色土層、中層黒色粘土層、下層は灰黒色砂質土層や黒色粘土層と灰色砂層の互層で形成された層、最下層は灰褐色砂質土層である。最下層は溝の北肩に堆積した層である。遺物は下層から建築部材と思われるものや製作途中と思われる木製品などが出土した。

本溝は他で検出している溝に比較して、溝幅が5m以上になるにもかかわらず、深度が約0.6mと浅く掘削されている。この原因については溝底のベースが粗砂層に達しているためか、また溝ではなく、人為的な大きな池状のものになるのか今後、周辺部の調査で明らかにしていく必要がある。

SX-101

SD-103埋没後に掘削された土坑である。径約2.2mの円形プランを呈するもので深さは約0.7mを測る。土坑中位にテラスをもち、二段掘りの形態を示す。土坑埋土は上層では灰黒色砂質土層で、下層では黒色粘質土など粘質土層で形成されている。下層では植物や炭化物層が集中してみられ、木片や土器片が比較的集中して出土した。また、約9.4kgにも及ぶ流紋岩原礫、未鑑定ではあるがつつ状の植物が束ねた状態で出土した。本土坑の時期は第Ⅱ・Ⅲ様式の土器が含まれており、SD-103埋没直後に掘削されたものと思われる。

(3) 中世の遺構

中世の遺構としては素掘溝と館の環濠になるとと思われる大溝を検出した。

中世大溝

本溝はL字形のトレンチの南東部で検出した大溝である。大溝は南北方向に走向し、溝幅は約2.6m、深さ0.5mを測る。本溝は第8次調査で検出した中世大溝につながるとと思われるが、溝の規模は縮小し、遺物量はごく少量である。溝の堆積土は粘土層で、上層では褐灰色土になる。

中世素掘溝

トレンチの全面において検出した小溝群である。これらの溝は幅30cm前後のもので深さは上面が削平されているため、10cm程しか残存していない。この小溝群はそれらの走向方向より大きく二群に分割でき、現在、区分されている水田の畦畔を境に北と南で異なる。北側の小溝群はほぼ真北に平行し、現水田地割と合致するのに対し、南側の小溝群では真北から約5度程東に軸をとっている。この原因については調査では明らかにしえなかった。これらの小溝群からは瓦器細片が出土している他遺物はみられず、決定的な時期はおさえられない。中世大溝との関係は掘削された層位より、中世大溝が古いことが判明した。

3. 出土遺物

(1). 土器

今回の調査において出土した土器の多くは溝資料であるが、若干の土坑資料もある。時期別では弥生前期から中期の土器が大半を占める。一括廃棄の様相を示すものとしてはSD-101の第1・2層出土の土器群（第Ⅳ様式）とSX-102上層（黒粘Ⅱ・黒粘Ⅲ）の土器群（第Ⅰ様式）があり注目される。ここではSX-102の黒粘Ⅱ、黒粘Ⅲの土器群を報告することとする。

SX-102 出土土器

SX-102の黒粘Ⅱは黒粘Ⅲより上位にある。この土器群では広口壺における長頸化やヘラ描沈線の多条化傾向、甕における口頸部の退化やヘラ描沈線の消滅傾向がみられる。黒粘Ⅱと黒粘Ⅲの土器群はこの様相をよく示している。

黒粘Ⅱ出土土器（第4・5図）

壺 1～4は広口壺である。1～3は筒状の頸部に多条のヘラ描沈線を施す。1は口縁部に二孔を穿つ。4は体部と頸部の境界部及び体部に各々3条と4条のヘラ描沈線を施す。二帯のヘラ描沈線間は幅広の削り出し突帯となっており、下端の削り出しはハケとミガキによるものである。

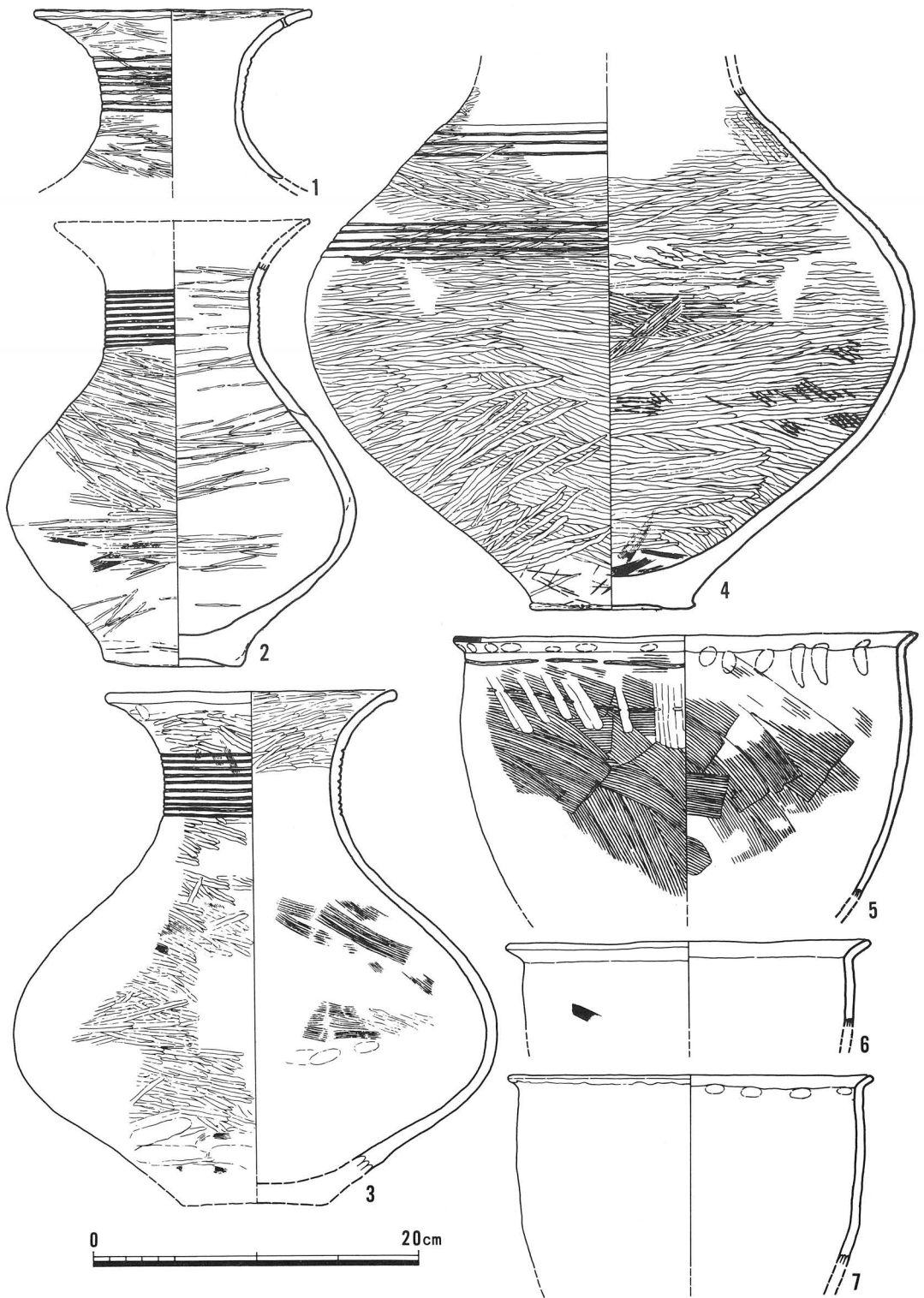
甕 甕にはヘラ描沈線をめぐらし体部が若干張るもの（5）と、ヘラ描沈線をめぐらさず体部が張らないもの（6～10）がある。5は口縁端部に局所的な刻目がみられる。ヘラ描沈線は二条施されるが、いずれも浅く粗雑なものである。下のヘラ描沈線はナデによって部分的に消されている。6～9の甕はいずれも口縁端部を丸くおさめる傾向にあり、口縁部は短かく、屈曲はゆるやかである。8と9は口縁端部に刻目を施す。8にはススの付着は認められない。

鉢 11は中形の鉢である。外面体部下半及び内面にミガキを施す。12は小形の鉢である。内外面ともにミガキを施す。

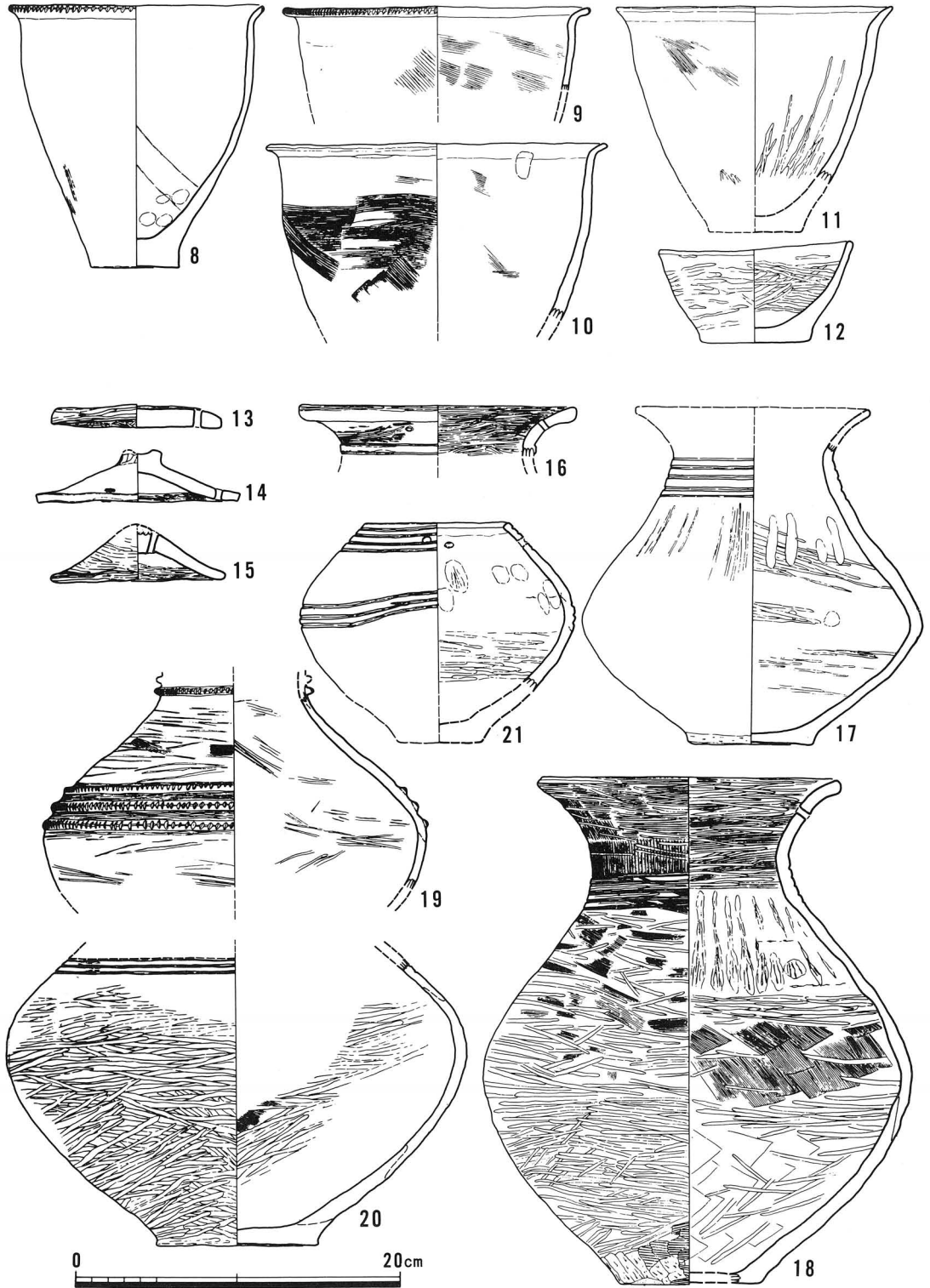
黒粘Ⅲ出土土器（第5・6図）

壺用蓋 13～15は各々形態の異なる壺用蓋である。13は円盤形で二孔、14は笠形につまみを有するもの、15は笠形で1孔を穿っている。これらはすべてミガキを施している。

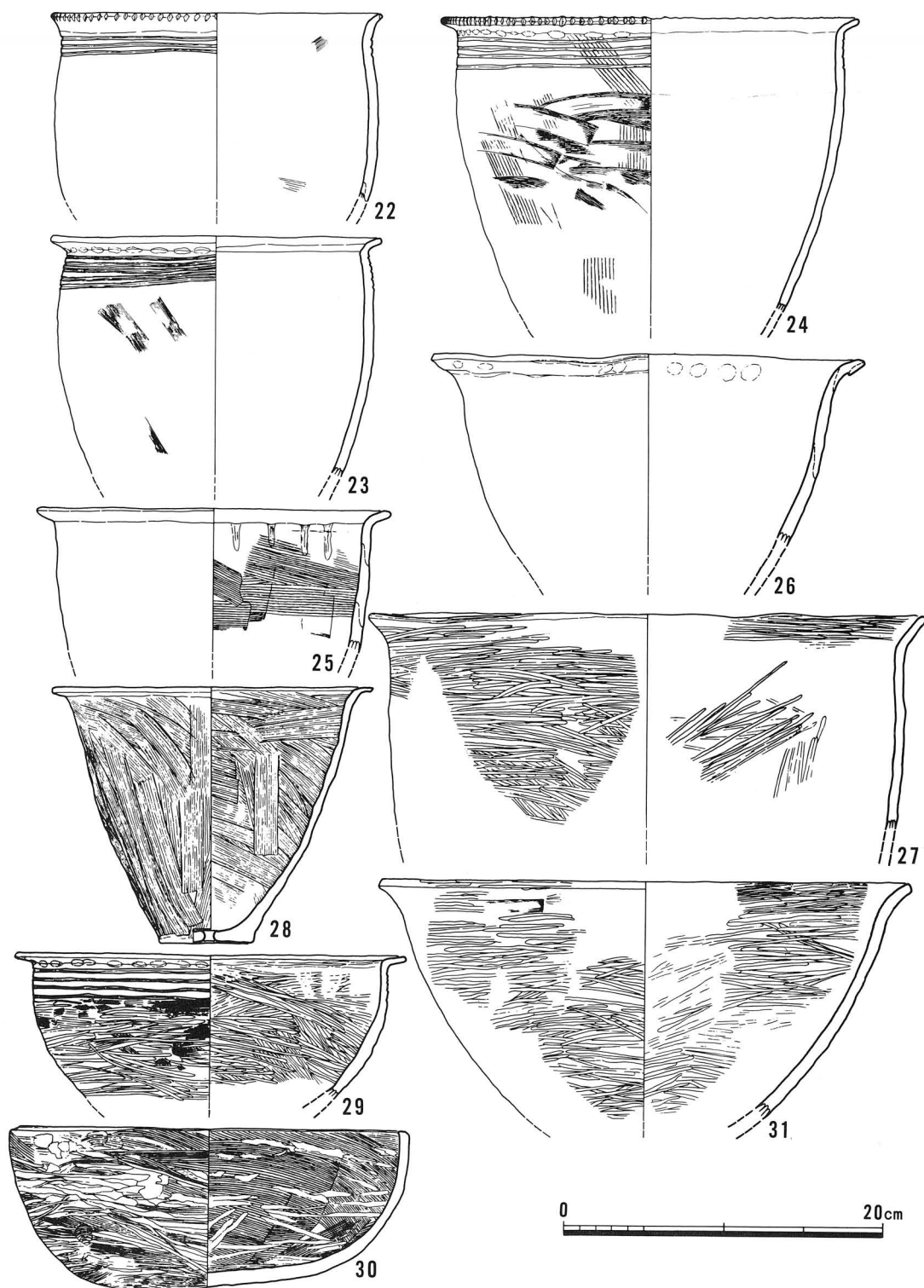
壺 16～20は広口壺である。16～18には削り出し突帯がみられる。17・18は突帯が不明瞭で、18の削り出しは上端のみでハケによってつくり出している。17は体部が鋭く張り出し、扁球形を呈する形態である。17・18ともに底部側辺部と裏面にケズリがみられる。19は頸部と体部に張り付け突帯を有するものである。突帯上にはヘラによる刻み目がみられる。細かいミガキが施されている。体部の貼り付け突帯の間や頸部との突帯の間には赤色塗彩が施されているが、剥落しており、文様はよみとれない。21は無頸壺である。口縁部と体部中位に4条・3条のヘラ描沈線をめぐらしている。胎土は生駒西麓産を示している。



第4图 SX-102出土土器1 (1~7: 黑粘II) ($S = \frac{1}{4}$)



第5图 SX-102出土土器2 (8~12:黑粘II、13~21:黑粘III) (S=1/4)



第6图 SX-102出土土器3 (22~31: 黑粘Ⅲ) ($S = \frac{1}{4}$)

甕 甕においては口縁端部に面をもちへら描沈線をめぐらすもの(22~24)と、口縁端部を丸くおさめ、沈線をめぐらさないもの(25・27)がある。27は大形甕で内外面にミガキを施しており、以上のものとは異なる。26は上記二種ともに異なるものである。形態は鉢に近く、口縁部の屈曲は、ゆるやかである。口縁部外側には粘土を平たく貼り付けている。口縁部はヨコナデ、体部はナデ調整である。外面には煤が厚く付着している。胎土は前期特有の砂粒を多く含むものであるが、焼成は良好で、他の土器とは異なっている。28は有孔甕である。口縁部は短く、外方へ水平にのびる。

鉢 29・30は中形鉢であるが形態が異なる。29は口縁部が外方へのび、4条のへら描沈線を施している。30は椀形のもので内外面ともに粗いハケがみられ、ハケ後にわずかなミガキを施している。31は大形鉢である。口縁部が外方へのびる形態であるが体部との境は不明瞭である。内外面ともにミガキを施している。

(2). 木製品

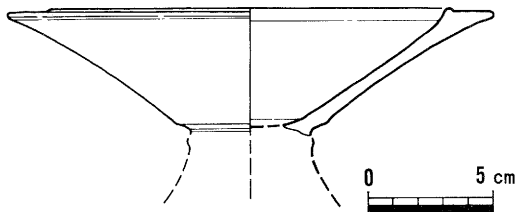
本調査において出土した木製品は多種にわたるが、時期的には前期から中期にかけてのものが多い。特に注目されるのはSX-102より出土した木製品の一群(図版12-1~4、図版14-1、2)で、未成品から製品を含んでいる。

匙・杓子(図版12-1、2、3)

1は製品、2・3は未成品である。1は全長18.8cm、身幅6.6cmを測る。身部はわずかに凹みを有する程度である。柄は身にほとんど水平に付けられている。2は匙の身部の破片である。全長12.5cm、身幅5cm、身厚3.3cmで身部はかなり厚くつくられている。身部はまだ割り込まれていない。3は杓子で全長29.7cm、身幅11.1cmを測る。本品もまだ、身部は割り込まれていない。1~3はSX-102の上層より出土している。

高杯・容器(第7図・図版12-4、5)

4は高杯杯部で径19.4cmを測る。杯部上面の内側にはわずかな突出がみられる。水平口縁である。脚部附近では一条の沈線がみられる。内外面ともに黒漆が塗布されていたようであるが、全体に剥落が激しい。5は現長26.8cmの容器



第7図 SX-102出土木製高杯実測図(S=1/3)

で立ち上がり部がわずかに2.4cm残っているにすぎないが、直立気味に立ちあがる。楕円形を呈する容器と思われる。しかし、外底面が丁寧な調整をしている為、蓋としての可能性も残る。

建築材(図版13-3、4、図版-4)

図版13-3・4はSD-103よりまとまって出土したものである。3は横幅10.3cm、縦長29.5cmで、側面に4つの小孔を穿つ。また、上辺には楕円形の孔が穿たれ、¹孔の内側には磨耗がみら

れる。4は横幅25.5cm、縦長8.2cmで上側辺に縦に長い孔を穿っている。本孔も内側に磨耗がみられる。図版14-4はSD-106出土で横幅58.0cm、縦長19.5cmである。中央部に径12.2cmの大きな円孔を、そして側辺に一辺4.2cm×3.5cmの方孔が穿たれている。孔部にはあまり磨耗の痕跡はない。裏面はやや風化している。

平鋏未成品 (図版14-1)

本品は全長76cm、幅20.8cmで、両端に舟形隆起をもつ平鋏の未成品である。舟形隆起部はやや高く作り出しており、舟形隆起から刃部方向にはわずかに稜線をもっている。一方の端部はやや斜めに切断されている。

(3). 石器

石庖丁 (第8~10図、図版16)

当調査において特筆すべき石器は弥生時代前期の石庖丁製作に関する資料である。これらの資料は完成品から未成品・剥片・石核・碎片・原礫までを含む多量なものであり、そのほとんどが溝出土である。ここでは器形調整段階の未成品を中心に一連の資料をとり上げ、石庖丁製作工程の概要を記す。

2・6・13はSD-101、7・15・16・17はSD-102、3~5・8~11・18はSD-105の灰黒色砂質土層(下層)、1・12・14はSD-106、原礫はSX-101(写真1-1)とSX-102(写真1-2)より出土した。石材はすべて板状節理の見られる黒雲母流紋岩及び流紋岩であり肌色もしくは淡緑色を呈す。1は石庖丁の折損品。両面を琢磨・穿孔した後、孔部および側端部

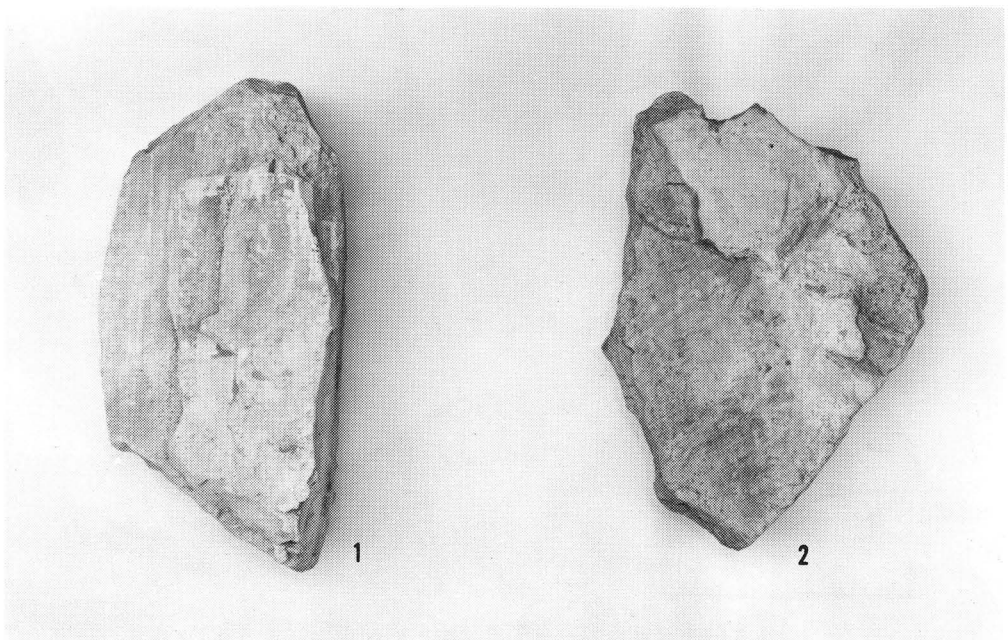
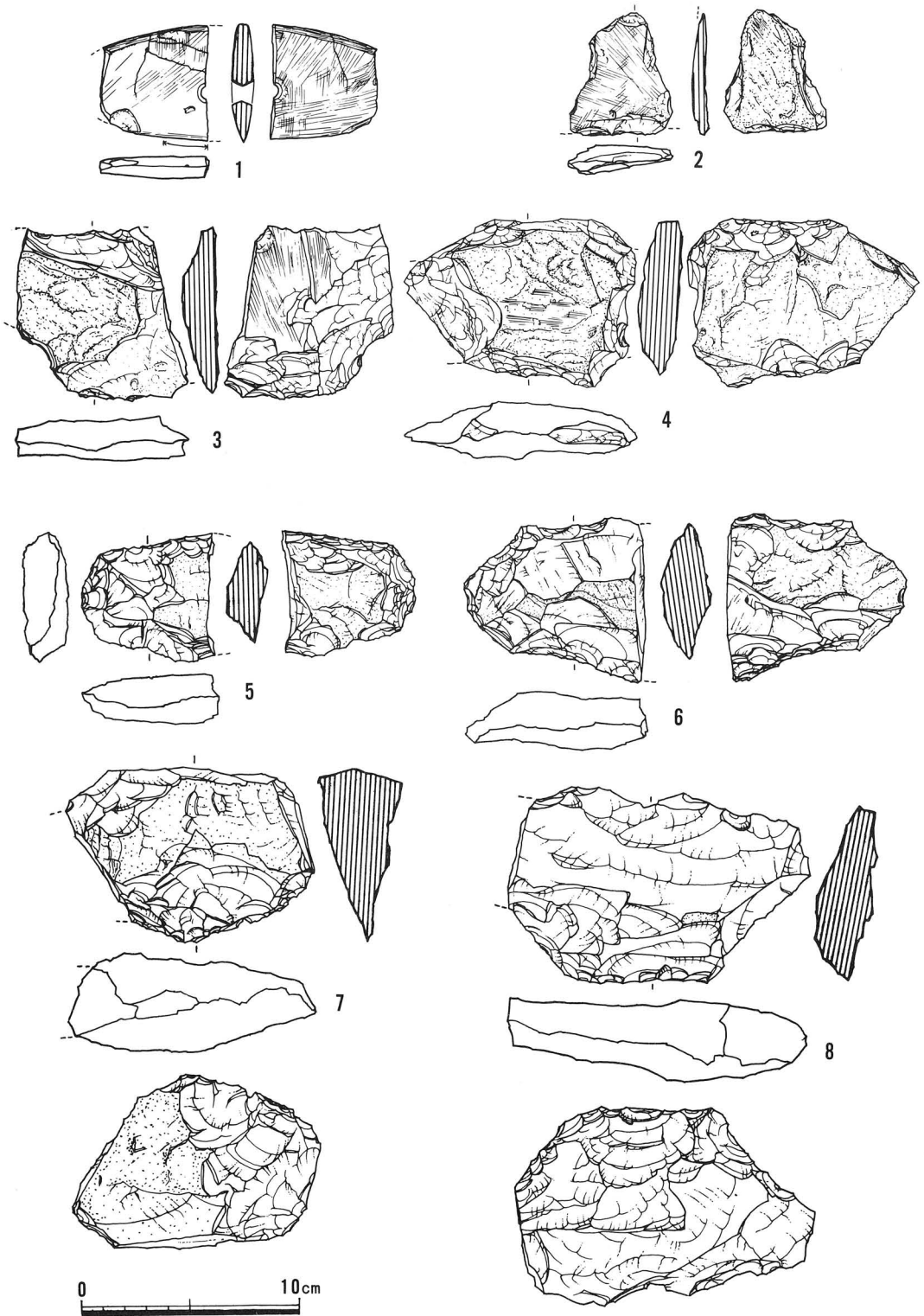
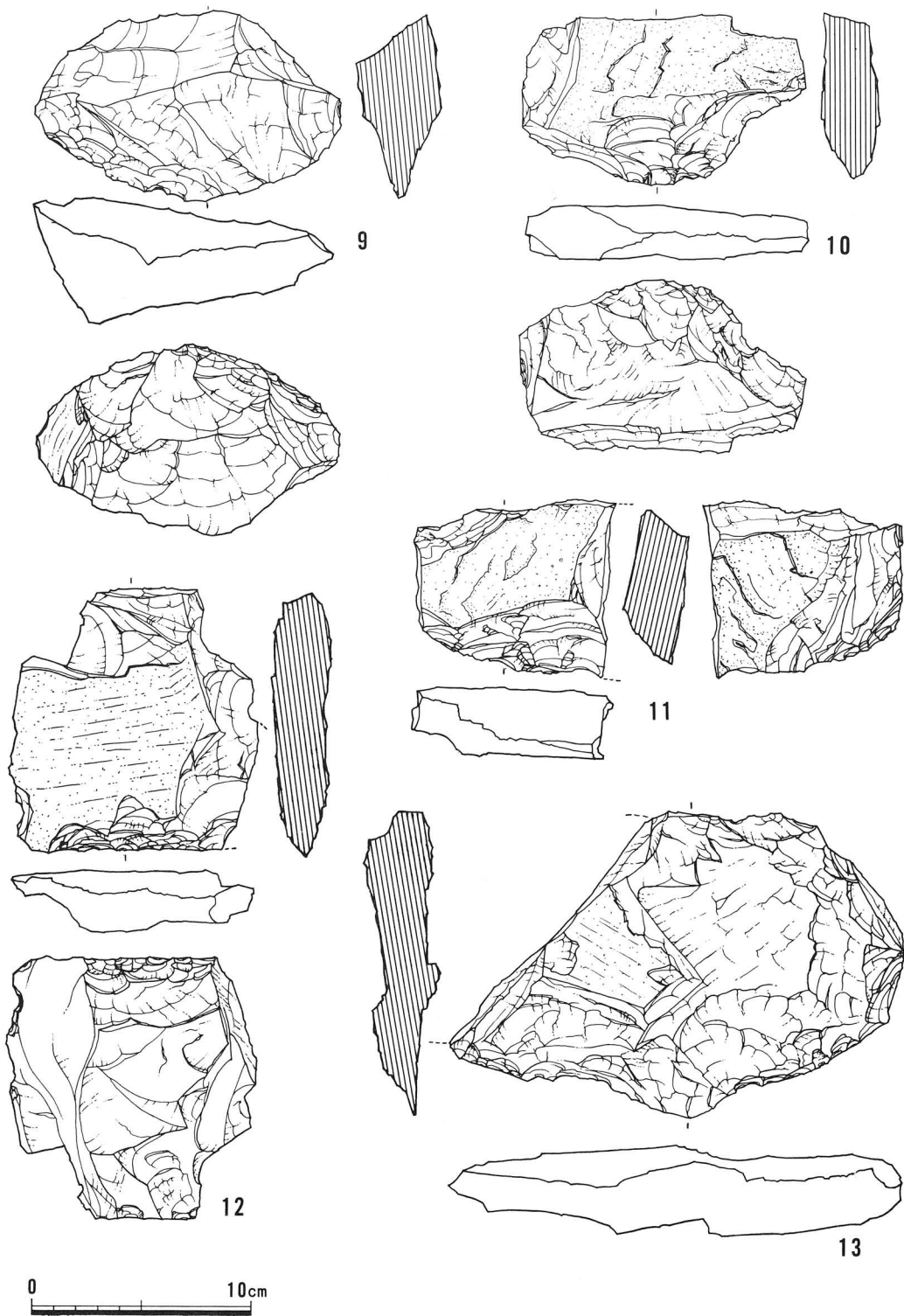


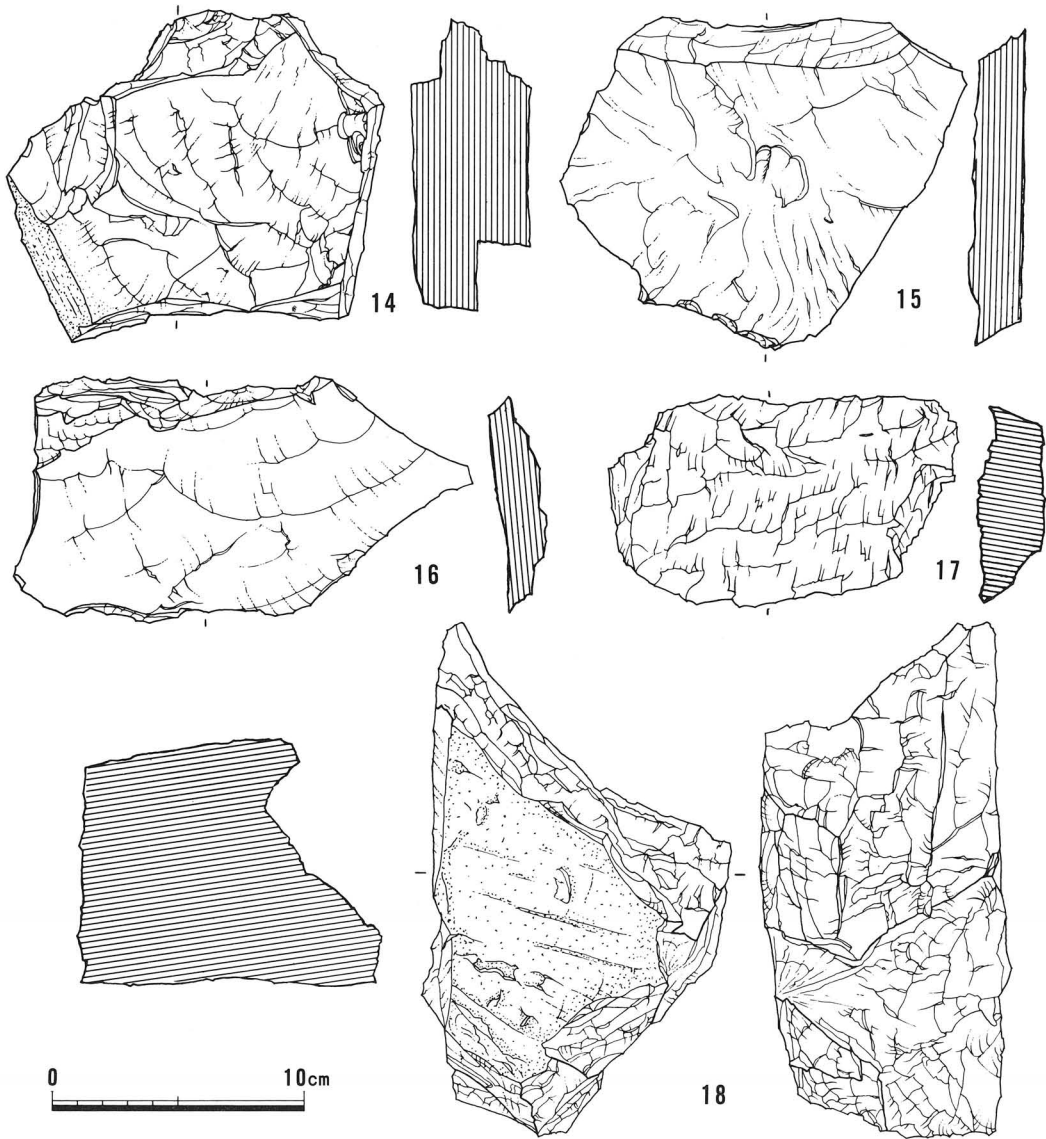
写真1 流紋岩原礫 1: SX-101, 2: SX-102 (S=1/6)



第 8 図 流紋岩製石庖丁及び同未成品実測図 1 (S = 1/3)



第9图 流纹岩製石庖丁未成品实测图2 (S=1/3)



第10図 流紋岩製石庖丁素材実測図3 (S=1/3)

で折れている。刃部は両刃であり、わずかに微細剝離痕が認められるがほとんど未使用と考えられる。当調査における唯一の完成段階を示す資料である。2は左面に入念な琢磨を施し凸状に作出した後、折損したものである。両側縁と上端部を折損しており、下縁には剝離痕が認められる。右面には節理面を残す。このような器面琢磨品はS D-101、105において数例検出されており、おそらく石庖丁の破損品と考えられる。3・4は両面加工品の片面に琢磨を施したものである。それぞれ折損しているため全容は不明だが、その幅・厚さ・節理の方向・琢磨の状況から石庖丁の製作を意図したものと推察される。ただし琢磨痕は1・2と比べるとやや粗い。3は上下両側

縁に薄い階段状の調整剥離を施し鋭くした後、右面に上下斜め方向の琢磨を施している。左面中央には自然面を残す。4も上下画側縁に調整剥離を施した後左面中央に左右方向の琢磨を若干施している。調整剥離により上側縁は鈍く下側縁は鋭く仕上げられている。また右面中央には節理に沿って剥離されたと思われる平坦な素材面を残す。5～13は琢磨を施す以前の器形調整段階の資料である。5は現存するほぼ全周縁に調整剥離が施されたものであり、両面中央には節理に沿う平坦な素材面が認められる。調整剥離痕は概して薄く魚鱗状を呈し階段状剥離である（このことは以下の資料においても同様である）。上側縁の一部はいわゆる“つぶれ”を呈し鈍くなっている。6は上下両側縁を調整により鋭く仕上げている。両面中央には素材面を残している。断面形状はレンズ状を呈す。7は主に一侧縁へ調整を施し若干外彎した刃部を作出している。平坦な素材面を両面に残し、断面形状は楔形を呈す。8も一侧縁を外彎させるように調整を施したものである。剥片を素材としており、下面下半部にポジティブな剥離面を残す。石質は粗い。9も調整は8と同様。石質が極めて粗いため剥離痕の観察が困難ではあるが、下面下半部にポジティブな素材主要剥離面が認められる。なお下面にのみ黒いすすが附着している。10は扁平な剥片の一侧縁に調整を施し、外彎する刃部を作出している。両面中央に素材面を残し、刃部と相対する側縁は素材面形成後に折損している。11も扁平な剥片の一侧縁に調整を施したものである。10と同様上側縁を折損している。12は剥片の一侧縁へ直線状に調整剥離を施したものである。上面中央には節理面、下面中央にはポジティブな素材主要剥離面を残す。13は大型の両面加工石器である。石質が粗く剥離痕は不明瞭であるが、折損部を除くほぼ全周に調整剥離が施されている。特に下側縁は鋭く作出されている。その大きさから大型石庖丁の未成品とも考えられるが、同種の石材の大型石庖丁は現在のところ知られていない。したがって一般的な石庖丁、もしくは他の器種を意図したものかもしれない。14～16は節理に沿って剥離された大形扁平剥片である。その大きさ・厚さ・節理の方向および未成品に見られる素材面から察して、調整加工を加えるための素材剥片と推察される。14・15は扁平な剥片であるが、16は若干ポジティブな主要剥離面をもつ剥片である。また15・16は裏側全面に自然面を残しているが、14では側縁に剥片剥離に前後する折損面が認められる。17は今までの資料と異なり、節理の方向に対して逆目に剥離した剥片である。剥離面は凹凸が激しくアンデュレーションを見せている。このような資料はSD-102の他、SD-105・101においても出土しており、次に示す18のような分割石片を作る際に剥離されたものであろう。18は分割石片。表裏両面に節理面を残し、側面は剥離面である。剥離は節理の方向に対し逆目であるため凹凸が激しい。この分割石片は扁平な素材剥片を獲得するに十分な大きさと節理の条件を備えている。

さて、これまで完成段階から未成段階へと辿りながら説明を加えてきたわけであるが、ここでこれらの資料を逆に追ひ、弥生時代前期における石庖丁の製作工程について簡単なまとめをした。第一段階は素材獲得段階である。母岩が大きな場合、節理に対して逆目に加撃して分割し（^{注②}17）、手頃な分割石片を作る（18）。しかる後、節理に沿う扁平な素材剥片（14）を剥離する。ただし分割した痕跡を示さない素材剥片もあるため（15・16）、母岩の状態等によりバリエーションが

考えられよう。続く第二段階は素材剥片に調整剥離を施し器形を整える器形調整段階である。まず素材の側縁に魚鱗状を呈する階段状剥離を施し、直線もしくは外彎状の鋭い刃部を作出する(8・9・12)。相対する側縁は折損して平坦な面を呈している例もある(10・11)が、徐々に調整剥離を進行させ器形を整えていくことが考えられる(5・6)。第三段階は琢磨(付刃・穿孔)を施す完成段階である(1・3・4)。当調査においてこの段階の資料は極めて少なく、折損品が少数存在するのみである。とりわけ穿孔の痕跡を残すものに至っては、完成品である1を除いては皆無である。このことは製作工程復元にとっては今後の課題となるが、さらに遺跡内における作業内容や弥生時代前期における石庖丁の生産体制に関わる問題でもあろう。

以上、弥生時代前期の石庖丁については、ほぼ一連の製作工程を示す資料の存在により、原礫を入手し唐古・鍵遺跡内において自己生産していたことが窺われる。

注① この種の岩石は耳成山で産出する。石材鑑定は奥田 尚氏によるもので、その一部は第IV章に報告されている。

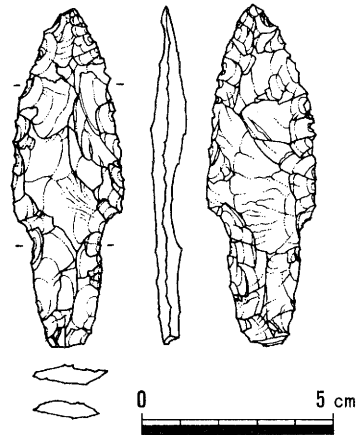
注② 製作工程の段階設定については次の文献を参考にした。

中山平次郎 1934年「石庖丁製造所址—筑前飯塚市大字立岩字焼ノ正遺蹟—」(『考古学』第五巻第5号)

下条信行 1977年「石器」(『立岩遺蹟』)

尖頭器 (11図・図版15-10)

SD-102 第8層(灰黒色砂質土)より出土した。サヌカイト製で黒色を呈す。舌状の突起を身の下部に作出している。調整剥離は周縁部は階段状剥離であり、器面中央に及ぶものはフェザエンドである。なお右面中央の大剥離面はネガティブである。



第11図 SD-102 出土石器実測図 (S = 1/2)

(4). 土製品・石製品

杓子 (図版15-12)

手づくねの杓子である。身の部分は球形で上部に径 1.1 cm、深さ 1.9 cm の受部をこしらえている。柄は欠損している。身幅 3 cm のミニチュア品である。SD-101 第1層より出土している。

土錘 (図版15-13)

全長 5.4 cm、幅 3.8 cm、厚さ 2.3 cm を測る長方形の粘土の固まりに溝をめぐらしたものである。溝は幅 3 ~ 7 mm のもので縦に一周させている。重さ 50 g である。胎土は砂粒をほとんど含んでいない。SD-105 下層から出土している。

石製投弾 (図版15-14)

径 3.2 cm の球形を呈している。石質は斑岩で初瀬川の礫の可能性が。一部に磨いている痕跡がみられる。重さ 47 g を測る。SD-101 第1層出土である。

4. まとめ

- (1). 弥生前期の大溝のうち、SD-105、SD-106は走向方向を同じくし、継続時期も同時期である。この二つの溝を別々に性格づけるのではなく、ムラ全体から考える必要がある。弥生前期の土坑を検出している地区は現鍵集落からその北方で、微高地形のところである(第8・11・14調査地)。もう一つは唐古池の南半である(第1次調査地)。このことから、この2条の溝の走向方向を考えると、現鍵集落からその北方地区をめぐる環濠としての性格があたえられよう。このように考えるならば、弥生前期の段階にはこの地区と唐古池の地区の最低二つの地区の集団より成り立っていたと考えられよう。それが前期末で環濠は埋没し、より大きなムラが形成されたと思われるが、発掘地区が少なく推定の域をはず、今後の課題としておきたい。
 - (2). 弥生中期の大溝は3条検出したが、SD-101は第3次調査で検出したSD-07と同一のものと思われる。また、SD-102とSD-103は合流し、SD-101と同様の方向に並走すると考えられる。SD-101は第IV様式まで、SD-102・103は第III様式まで溝の機能を有していたと思われる。本遺跡の環濠の場合、中期の溝は後期に再掘削されているのが一般的であり、今回検出したものはこれらとは異なるようで、また、溝の方向から推定するとムラを区切る溝としての機能があたえられよう。この溝はムラの南端の一部を区画するが、この区画された内部がどのような地区であったのか、今後、検証していく必要がある。
 - (3). 本調査で検出した弥生時代の遺構は前期から中期に至る溝や土坑で、後期から古墳時代の遺構は検出していない。これまでの唐古・鍵遺跡の調査において、遺構を検出した地域では例外なく弥生後期の遺構を含んでおり、この地区においては環濠内部にあっても後期段階には居住区から離れていたと考えられる。しかし、この地区が後期段階にどのような性格を有していたかについては今後、全体的視野の上で検討されていくであろう。
 - (4). 土器を利用した弥生前期の集水施設は本遺跡では初めてのもので全国的にも類例の少ない遺構といえよう。本遺跡では、弥生前期の井戸的な土坑は未検出であり、この段階では自然河道の湧水を利用することがかなりおこなわれていた可能性もでてきた。
 - (5). 弥生前期の大溝等から多量に流紋岩が出土した。これまでの調査においても出土していたが、今回の調査では量・種類において目をみはるものがある。大溝に一括廃棄された様相を呈し、時的には弥生時代前期の一時期におさえられることは重要で、他から出土している流紋岩剥片・製品を含めて考えても中期の初頭までしか、この石材は当遺跡では使っていないようである。また、産地を限定できたことは本遺跡を含め、流紋岩石材の流通を考える上で重要な問題となろう。
- さらに、今回の石材資料においては原石から石庖丁製品までの過程を示す剥片が出土しており、加工工程ならびに生産地の一端がおさえられたことは注目すべき事柄であろう。

II. 第18次発掘調査の概要

1. 調査の全容

本調査地は唐古池内の北西コーナー部分に当たり、昭和11・12年の第1次調査地の隣接地である。池堤防の擁壁工事部分の3ヵ所にトレンチを設定した。第1トレンチは堤北側で17m×1.2mの東西に長いトレンチ、第2トレンチは堤コーナー部で8m×1.4mのトレンチ、第3トレンチは堤西側で13m×1.2mの南北に長いトレンチである。これらのトレンチでは池内に水が貯えられていた状態であったため、湧水が激しく、また、トレンチの最深部が2m近くなり壁崩壊の危険もあり、遺構検出の状態にとどまった。しかしながら、第1次調査で検出された北方砂層を追認したことや弥生以降の当地の変遷、特に池築造に関する新たな知見を見いだせたことは重要な成果となった。

2. 遺構と遺物

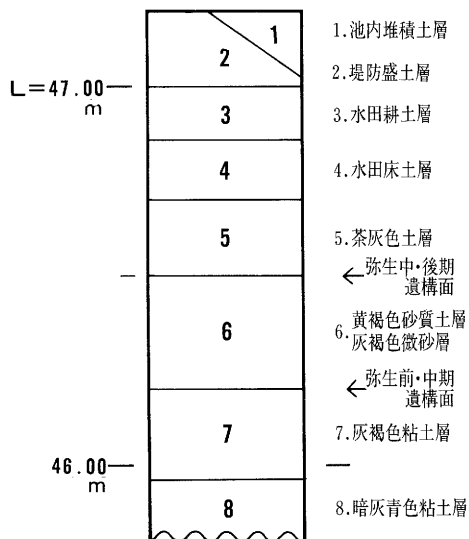
(1). 層序

3つのトレンチのうち、最も基本的な土層堆積を示しているのが第1トレンチである。第2トレンチの南半及び第3トレンチでは北方砂層によって弥生期のベースはおさえられていない。したがって、第1トレンチで基本土層を説明すると、第1層は淡灰褐色土層で池の堆積土と思われる。局部的にみられる第2層は黒褐色土層で堤防の盛土であろう。この層はかなりの土器片を含んでおり、明らかに池築造時に水田を掘り下げた土である。また、この層には弥生土器とともに近世磁器片も含まれていた。第3層・4層は灰褐色土層で各々旧水田の耕土・床土に対応するもの

と思われる。第5層は茶灰色土層で須恵器等を含み本遺跡における中世遺構検出面に相應するものである。第6層は黄褐色砂質土層あるいは灰褐色微砂層で弥生後期の遺構面に相應するものである。第7層の灰褐色粘土層は弥生前・中期の遺構面に対応するものである。第8層は暗灰青色粘土層で本遺跡における青灰色シルト層に対応するものである。

(2). 遺構

第1トレンチにおいては第7層上面で局所的な砂層堆積がみられるほか、遺構は検出していない。この砂層堆積が第1次調査時の中央砂層にあたるのかどうかは不明である。

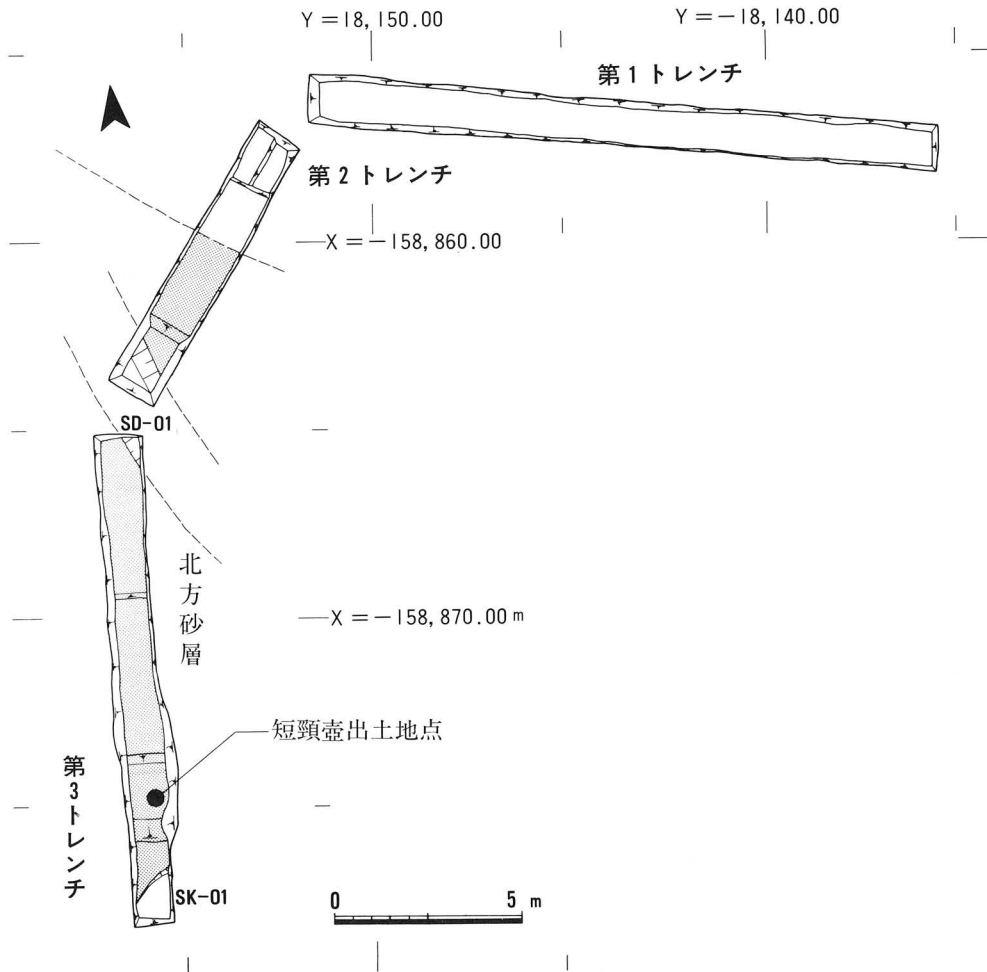


第12図 第18次調査地基本土層柱状図

第2トレンチから第3トレンチにかけては北方砂層と考えられる砂層堆積とその堆積層の上面で溝1条と土坑一基を検出した。

北方砂層

第2トレンチから第3トレンチにかけて検出した自然河道である。河道の北側は樋門によって検出できなかったが、川幅16m以上、深さ1.7m以上であることが確認された。河道内は全て粗



第13図 第18次調査遺構平面図 (S = 1/200)

砂層であるが、部分的には細砂層になるところもある。遺物は少ないが第3トレンチの南端で第IV様式の短頸壺を検出した。これは河道上面より約1m下の淡灰色粗砂層内より横転した状態で出土した。この土器以外はやや磨耗した土器片などわずかながら出土しているのみである。この短頸壺は胴部下端に円孔を穿っており、自然河道内に投げ込まれたものと思われる。

SD-01

第2トレンチから第3トレンチにかけて検出した弥生時代後期の溝である。本溝は南南東から北北西方向に走向する溝で、溝幅約1.6m、深さ1mを測る。溝内の堆積は大きく3層に分層され、上層灰黒色粘土層、中層黒色粘土層、下層は黒灰色砂質土層や灰黒色粗砂層で溝肩部の流入土である。遺物はわずかで中層より弥生後期初頭～中葉の土器を検出している。

SK-01

第3トレンチ南端で検出した土坑である。規模及び平面プランについては調査範囲外なので不明である。北方砂層内に掘られた土坑のため、土坑の周壁が湧水のため崩壊し、袋状を呈す断面形態となっている。深さ0.8mを測る。土坑の堆積土は粘土と粗砂の互層となっている。遺物は土器がわずかに出土したのみである。

(3). 遺物

出土遺物は土器・石器等であるが、大半は第1トレンチで検出した堤防盛土層内より出土したもので遺構に伴うものは少ない。

土器

図版21-1、2、4は北方砂層内より出土したものである。1は器高54.4cm、胴径36.5cmを計る短頸壺の完形品である。底部付近には穿孔が施されている。残存状況のよい土器である。2は大形鉢で外面には凹線の上に櫛による円形文を描いている。口縁端面には扇形文がみられる。4は短頸壺の頸部から胴部の破片である。胴部には二条の線刻がみれるが意味不明の絵画である。

石器

図版21-5は第1トレンチの堤防盛土層内より出土した大型蛤刃形石斧である。全長12.6cm、幅6.0cmを測る。片面は破損しているがほぼ全体の形を知り得るものである。刃部は使用による刃こぼれが一部みられる。石質は玄武岩である。

3. 砂礫の分析

今回の発掘調査においては二条の自然河道を検出したが、これらの砂礫の分析をおこなった。資料は第1トレンチで検出した中央砂層と思われる暗灰褐色粗砂層と第2・第3トレンチで検出した北方砂層の粗砂層4資料の計5資料である。北方砂層は大規模な砂層堆積の為、地点・レベルの異なる層位から採集したものである。以下5資料について分析を報告する。

砂礫の組織

砂礫の粗度組成を調べるため、 $\frac{1}{16}$ mm、2mm、4mm、8mmの篩を使用して、試料を水中で篩別した。篩別後、天日で乾燥させ、台ばかりで重量を測定した。各粒径毎の構成砂礫種を調べる時、 $\frac{1}{16}$ mm以上8mm未満の試料は、3トレ淡灰色粗砂の組成で代表させ、8mm以上の試料については各

試料を礫種毎に調べた。砂礫種の観察は裸眼で行なった。

(1). 砂礫の粒度

全ての試料に礫径 8 mm 以上の礫が含まれるが、砂の成分 ($\frac{1}{16}\text{mm} \leq < 2\text{mm}$) が約 3 割～7 割を占める。砂の成分が多くても、礫径には大きなものが含まれることから、ほぼ同じような堆積条件の場に堆積したと推定される (第 4 表参照)。

第 4 表 砂礫の粒度分布

試料記号	$\frac{1}{16} \leq < 2$		$2 \leq < 4$		$4 \leq < 8$		$8 \leq$		合 計 重 量(g)
	重量(g)	百分率(%)	重量(g)	百分率(%)	重量(g)	百分率(%)	重量(g)	百分率(%)	
1 トレ暗灰褐色粗砂	160	27.1	120	20.3	240	40.7	70	11.9	590
2 トレ東端の粗砂	250	48.0	120	23.1	110	21.2	40	7.7	520
3 トレ暗灰黒色粗砂	1410	47.2	960	32.1	560	18.7	60	2.0	2990
3 トレ淡灰褐色粗砂	1360	68.7	390	19.7	200	10.1	30	1.5	1980
3 トレ淡灰色粗砂	940	66.7	280	19.9	160	11.3	30	2.1	1410

(2). 構成砂礫種

篩別した試料の細粒のものから順に、構成砂礫種について述べる。

A) $\frac{1}{16}\text{mm} \leq < 2\text{mm}$ の砂粒種

構成砂粒種は、岩石片として、黒雲母花崗岩、チャートで、鉱物片として、石英、長石、黒雲母、角閃石である。黒雲母花崗岩粒は灰白色、角礫状で、僅かである。チャートは赤褐色、茶褐色、亜円礫状で、ごく僅かである。石英は無色透明、角礫状で、多い。長石は灰白色、角礫状で、中程度である。黒雲母は黒色板状で、僅かである。角閃石は黒色粒状で、角礫状で、僅かである。

B) $2\text{mm} \leq < 4\text{mm}$ の礫種

構成礫種は、岩石片として、黒雲母花崗岩、アプライト、斑岩、流紋岩、チャート、変輝緑岩、鉱物片として、石英、長石である。黒雲母花崗岩は灰白色、角礫で、中程度である。アプライトは灰白色、角礫で、中程度である。斑岩は灰緑色、亜角礫で、僅かである。流紋岩は淡茶灰色、亜円礫で、ごく僅かである。チャートは赤褐色、灰色、黒色で、亜円礫、円礫で、ごく僅かである。変輝緑岩は暗灰色、亜角礫で、ごく僅かである。石英は無色透明、角礫で、僅かである。長石は白色、無色透明で、角礫で、僅かである。

C) $4\text{mm} \leq < 8\text{mm}$ の礫種

構成礫種は岩石片として、黒雲母花崗岩、柘榴石黒雲母花崗岩、アプライト、閃緑岩、斑岩、流紋岩質溶結凝灰岩、チャート、変輝緑岩、鉱物片として、石英、長石である。黒雲母花崗岩は灰白色、角礫で、多い。柘榴石黒雲母花崗岩は灰白色、角礫で、僅かである。アプライトは灰白色、

角礫で、中程度である。閃緑岩は淡灰緑色、角礫で、僅かである。斑柘岩は暗緑色、亜角礫で、僅かである。流紋岩質溶結凝灰岩は茶灰色、亜円礫で、ごくごく僅かである。この岩相は室生火山岩の岩相の一部に相当する。チャートは黒色、亜円礫で、ごく僅かである。変輝緑岩は淡緑灰色、亜角礫、亜円礫で、僅かである。石英は無色透明、角礫で、僅かである。長石は白色、無色透明、角礫で、ごく僅かである。

D) $8\text{ mm} \leq$ の礫種

構成礫種は、岩石片として、黒雲母花崗岩、白雲母花崗岩、柘榴石黒雲母花崗岩、アプライト、チャート、変輝緑岩、鉱物片として、石英、長石である。主として黒雲母花崗岩で、他は僅かである（第5表参照）。

第5表 礫径8mm以上の礫種

試料記号 個数・重量 礫種	1トレ暗灰褐色粗砂		2トレ東端の粗砂		3トレ淡灰褐色粗砂		3トレ淡灰色粗砂		3トレ暗灰黒色粗砂	
	個数(個)	重量(g)	個数(個)	重量(g)	個数(個)	重量(g)	個数(個)	重量(g)	個数(個)	重量(g)
黒雲母花崗岩	44	50	21	23	26	27	14	15	44	40
白雲母花崗岩	1	—	2	7	1	—				
柘榴石黒雲母花崗岩									1	—
アプライト	9	10	1	—			3	5	10	10
チャート	1	—								
変輝緑岩	3	—							1	—
石英			2	5						
長石					1	—				

5g未満は測定せず

黒雲母花崗岩：色は灰白色で、礫形は角礫である。最大礫径は22mmである。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明で、粒径が1.5mm～7mmである。量は多い。長石は白色である。粒径は1mm～5mmであるが、稀に7mmに及ぶ。量は多い。黒雲母は黒色板状で、粒径が0.5mm～1.5mmである。量はごく僅かである。

白雲母花崗岩：色は灰白色で、礫形は亜円礫である。最大礫径は14mmである。造岩鉱物は、石英、長石、白雲母である。石英は無色透明粒状で、粒径が0.5mm～1mmである。量は僅かである。

白雲母花崗岩：色は灰白色で、礫形は亜円礫である。最大礫径は14mmである。造岩鉱物は、石英、長石、白雲母である。石英は無色透明粒状で、粒径が0.5mm～1mmである。量は僅かである。長石は白色粒状で、粒径が0.5mm～1mmである。量は非常に多い。白雲母は無色透明板状で、粒径が0.5mm～1mmである。量は僅かである。

柘榴石黒雲母花崗岩：色は灰白色で、礫形は角礫である。礫径は13mmである。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母、柘榴石である。石英は無色透明で、粒径が1.5mm～4mmである。量は多い。長石

は白色で、粒径が3mm～5mmである。量は多い。黒雲母は黒色板状で、粒径が0.5mm以下である。量はごくごく僅かである。柘榴石は濃赤色で、偏菱二十四面体の自形である。粒径は1mm～1.5mmで、量が僅かである。

アプライト：色は灰白色で、礫形は角礫である。最大礫径は26mmである。造岩鉱物は、石英、長石である。石英は無色透明で、粒径が1.5mm～5mmである。量は多い。長石は白色で、粒径が1mm～5mmである。量は多い。

チャート：色は暗灰色で、角が僅かに円くなった角礫である。礫径は17mmである。

変輝緑岩：色は暗緑灰色で、礫形が亜角礫である。最大礫径は14mmである。造岩鉱物は、長石、角閃石である。長石は白色で、粒径が0.5mm～1mmである。量は多い。角閃石は暗緑色で、粒径が1mm～1.5mmである。量は多い。

石英：色は乳白色で、透明である。礫形は角礫で、最大礫径は16mmである。

長石：色は白色、無色透明である。礫形は角礫である。最大礫径は13mmである。

柘榴石黒雲母花崗岩、アプライトは黒雲母花崗岩の一部と同質であることから、これら3種の岩石は、同じ岩体の一部分的な差が、礫として砕かれた為に生じた結果であると推定される。

(3). 推定される河川

弥生時代も現在も河川が流出する砂礫については異なりがなかったと仮定して、発掘現場付近を中心にして、現在の近辺の河川で、試料と同じ礫種構成を示す河川を求める。

当附近の河川としては、初瀬川、寺川・飛鳥川、曾我川があげられる。初瀬川の流域には、第三紀層・室生火山岩の分布域があり、黒雲母が細粒のややアプライト質黒雲母花崗岩、僅かに斑斕岩が分布する。寺川・飛鳥川の流域には、角閃石黒雲母石英閃緑岩が広く分布し、僅かに、レンズ状・脈状に変輝緑岩が分布する。この流域には、チャートや室生火山岩が分布しない。曾我川の流域には第三紀～第四紀にかけての地層、圧砕岩、粒状の黒雲母が顕著な角閃石黒雲母石英閃緑岩が分布する。

5 試料はほぼ同じような砂礫種構成である。礫径8mm以上の礫では、黒雲母が細粒の黒雲母花崗岩を主とし、8mm未満の礫中にはごく僅かであるが、室生火山岩と推定される岩片、チャートが見られる。変輝緑岩、閃緑岩は僅かである。

以上のことから、これら試料の砂礫を流出させ、堆積させた河川は現在の初瀬川に相当する。

4. まとめ

今回の調査は小規模であったが、昭和11・12年の第1次調査時に検された北方砂層の延長部分を検出したことや弥生の諸遺構と池築造の関係を明らかにしえたことは重要である。

北方砂層は奥田氏の砂礫の分析によって初瀬川水系の自然河道であることが明らかにされた。この自然河道の堆積は全て砂礫層によるもので規模が大きいことに注目される。この河道は第IV

様式に形成されたと考えられるが、これはムラを一時期分断するように流れていたことを物語っており、今後、この北方砂層によるムラの変化を捉えていく必要があるだろう。

二つ目の成果としてあげられるのは池築造に関することである。今回の調査では中世の遺構面に相応する層や旧水田の耕土・床土層にあたる層を検出したことによって池築造が近世以降になることが考古学的に検証された。池堤盛土層に古伊万里の磁器片が含まれていたことは決定的な資料となろう。

Ⅲ．第19次発掘調査の概要

1．調査の全容

本調査地は唐古池の西方約 100mで第13次調査の南隣接地である。第13次調査では弥生時代の溝や土坑を検出し、今回の調査においても弥生時代の諸遺構が多数現われることが期待される地区であった。

調査は申請地がL字形を呈した休耕地であったため、これに沿う形でトレンチ調査をおこなった。トレンチはL字形で34m×6mの東西に長いトレンチ（第1トレンチ）と30m×3mの南北に長いトレンチ（第2トレンチ）を設定した。第1層から第3層までの水田耕土層などを機械力によって除去し、その後、人力による遺構検出作業を開始した。遺構はトレンチの全面で検出され、遺構の検出状況により随時、トレンチの一部を拡張したり、サブトレンチ（第3トレンチ）を設定し、遺構の性格を把握するように努めた。

調査の結果、中世の大溝二条と弥生時代の前期から後期に至る大溝や土坑などを検出し、唐古氏の館の構造や弥生時代のムラを復元する上で重要な調査となった。



写真2 第19次調査現地説明会風景

2．遺構

(1)．層序

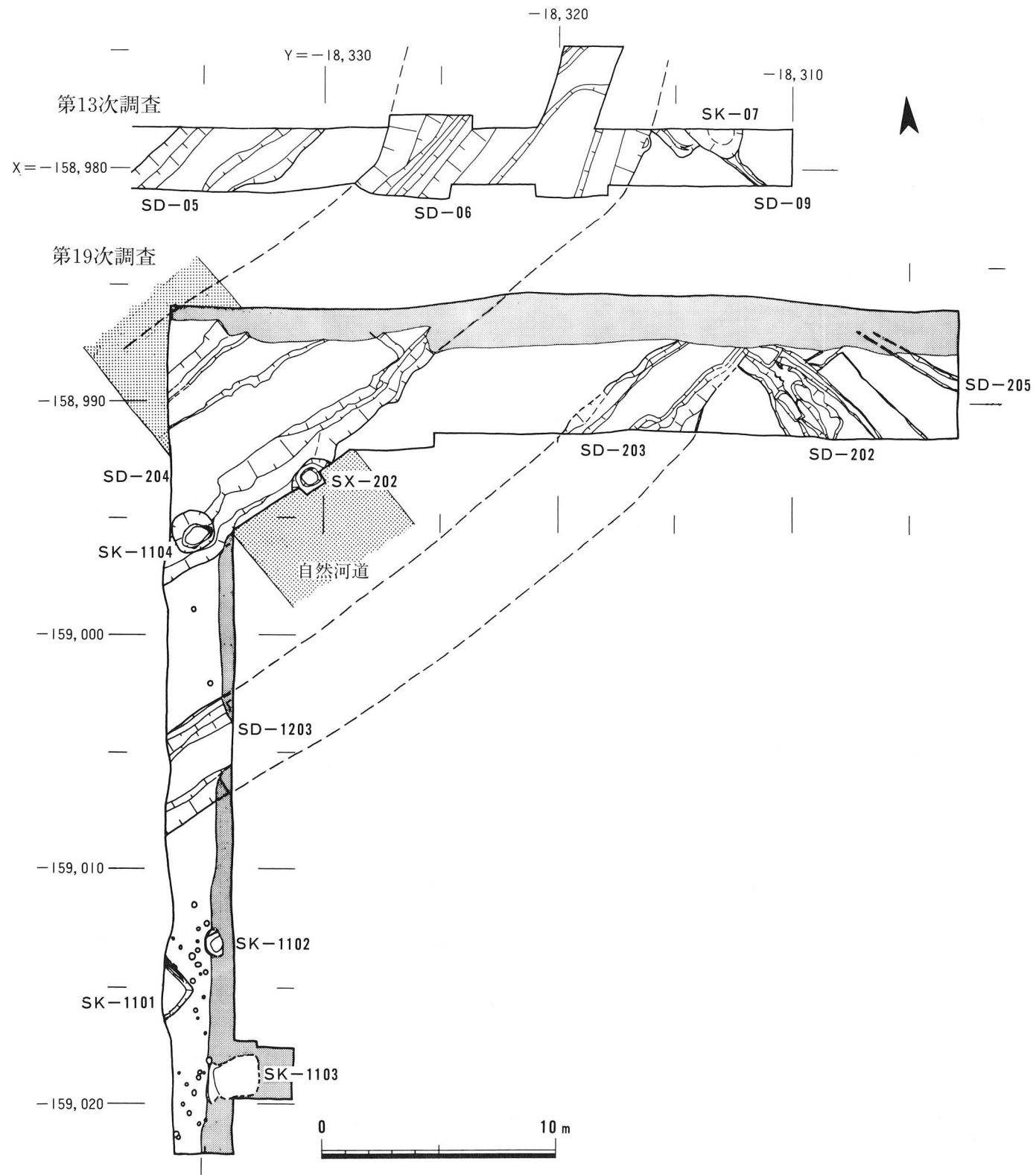
本地の層序は比較的安定しており、特に第2トレンチの南端にいくにつれて弥生前期のベース層も厚く堆積している。これは第8次・11次調査においても微高地であったことが確認されており、本調査地付近が微高地縁辺部になりそうである。基本層序は第1層暗灰褐色土層で集中豪雨による土砂流入層である。第2層は灰褐色土、第3層は暗茶灰色土層で各々水田耕土と床土である。第4層は灰褐色土層、第5層暗灰褐色土層、第6層暗黄褐色土層、第7層黄褐色微砂層、第8

第6表 第19次調査主要溝一覽表

溝番号	規模(m)		溝底標高	走行方向	継続時期(弥生)					主要遺物	備考
	幅	深度			I	II	III	IV	V		
SD-102	2.2	0.6	45.9	北東-南西					←→	完形土器群	第13次調査のSD-06後期溝。環濠
SD-103	2.4	0.8	45.8	北西-南東		←→					SD-204に合流区西溝
SD-202	4.0	0.7	45.8	西北西-東南東			←→			骨針、炭化米	SD-204に合流区西溝
SD-203	3.2	1.1	45.5	北東-南西	←→					尾張系土器 骨製品	SD-1203と同一溝
SD-1203	3.6	1.2	45.4	北東-南西	←→					尾張系甕, 半完形土器群	前期段階の環濠
SD-204	推定約8	1.4	45.0	北東-南西		←→				鐔形、イノシシ形土製品 硬玉製玉、吉備系土器	第13次調査のSD-06中期溝環濠
SD-205	0.6	0.4	46.0	西北西-東南東					←→		第13次調査のSD-09

第7表 第19次調査 主要土坑一覽表

土坑番号	平面形態	断面形態	床面形態	坑底土層	規模(m)			坑底標高	施設物	時期(弥生)	主要遺物
					長軸	短軸	深さ				
SK-101	不整形	ロート状に近い	平坦	青灰色シルト層	1.9	1.45	2.0	44.5	崩壊壁面に板材	IV末・V中	手網?
SK-102	楕円形	皿状・円筒状	平坦	粗砂層	3.3	2.3	1.9	44.5	なし	IV末	丸甕・平甕未成品、広口壺
SK-103	楕円形	逆台形	平坦	黄灰色微砂層	0.7	0.6	0.7	45.8	なし	III?	
SK-104	楕円形	逆台形	平坦	黄灰色微砂層	0.6	0.45	0.5	45.95	なし	III・IV	裏下半部
SK-105	長方形	逆台形	平坦	粗砂層	4以上	0.9	1.0	45.5	なし	III・VI	上層に土器群ヤス状骨製品
SK-113	円形	逆台形	皿状	粗砂層	径推定1.4	—	推定1.3	45.2	なし	III?	ミニチュア鉢
SK-114	楕円形	円筒状	皿状	青灰色微砂層	0.75	0.6	推定1.8	44.7	なし	III	水差し土器カエル二匹分の骨
SK-1101	方形	逆台形	平坦	青灰色シルト層	2以上	2以上	0.6	46.0	なし	I末	狭甕
SK-1102	円形	円筒状	平坦	青灰色シルト層	径1.2	—	0.6	45.9	なし	I末	平甕
SK-1103	方形	逆台形	平坦	粗砂層	2	1.6	推定1.3	45.3	なし	I	原材・平甕未成品、壺
SK-1104	円形	皿状・円筒状	平坦	粗砂層	径1.8	—	1.1	44.9	なし	IV	木庖丁、木製容器
SX-202	楕円形	二段の逆台形	平坦	粗砂層	2.0	推定1.5	0.7	45.65	甕・短頸壺を重ねる	IV	



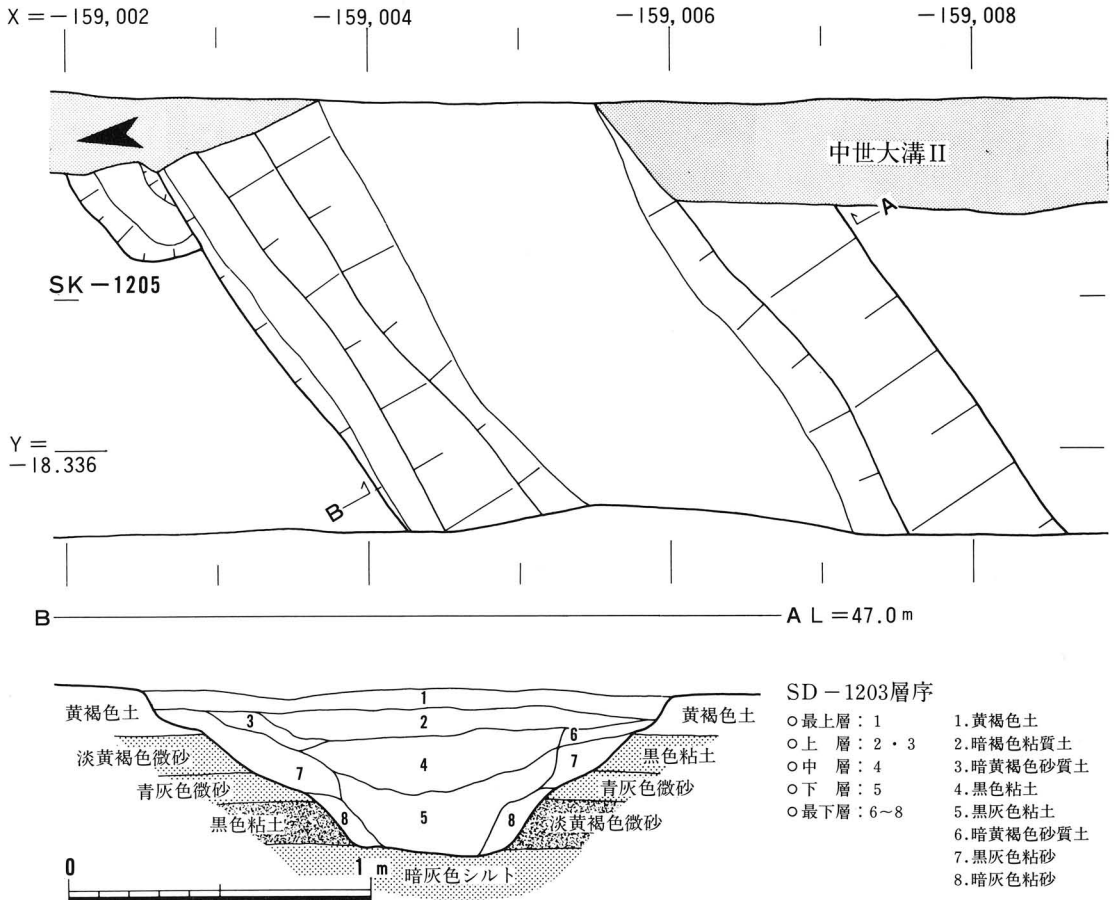
第14図 第13・19次調査 弥生時代前・中期の遺構平面図 (S = 1/240)

層青灰色シルト層、第9層黒色粘土層、第10層灰色粗砂層である。遺構を検出した土層と時期は次のとおりである。第4層上面で古墳時代初頭から中世までの遺構を、第5層上面では弥生中期から後期の溝や土坑を、第6層及び第7層で弥生前期から中期の土坑や溝を検出した。

(2). 弥生時代前期の遺構

SD-203・SD-1203

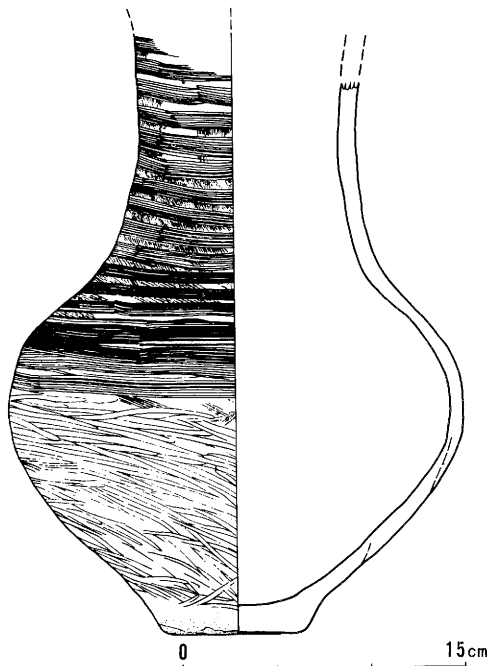
SD-203は第1トレンチ中央で、SD-1203は第2トレンチ中央で検出した溝で走向方向が等しく、その位置関係から同一の溝と思われる。溝の走向方向は北東から南西方向である。溝の規模や堆積状況が異なる為、各々説明することとする。SD-203では溝幅約3.2m、深さ1.1mを測り、溝の断面形態は逆台形を呈す。堆積土層は溝肩の一部に砂質土層が存在するが、その他は20cm前後の厚さの粘土・粘質土層によって堆積している。これらの土層を大きく分層するならば、上層は溝の埋土の黄褐色土でひょうにしまっている土である。中層は灰黒色の粘土・粘質土層で構成される層、下層は溝の肩に堆積した砂質土層である。最下層は灰黒色粘土層で植物を多く含んだ粘土層で形成されている。遺物は最下層より木製高杯脚部、木製容器、孔を穿ったイノシシ下顎骨(図版51-4)などで遺物は少ない。下層からは用途不明の骨製品(第42図-1、



第15図 SD-1203 遺構平面図及び断面図 (S=1/50)

2)、石庖丁未成品(図版49-1)が出土している。上層・中層からは伊勢湾沿岸地方の条痕文の厚口鉢(第38図-1、3)が出土している。本溝の遺物量は少ない。時期は第I様式新段階から第II様式と考えられよう。

S D-1203は溝幅約3.6m、深さ約1.2mを測り、溝の断面形態は溝中位にテラスをもつ二段の逆台形を呈す。溝の堆積土を大きく5つに分層すると最上層は溝埋土で黄褐色土層(第1層)、上層暗褐色粘質土層(第2層)、中層黒色粘土層(第4層)、下層黒灰色粘土層(第5層)、最下層は黒褐色粘砂層(第6・7・8層)で溝肩部に堆積した土層である。遺物は上層・中層より土器を多く検出したが、中層では半完形、完形がまとまって出土した。



第16図 S D-1203第3層出土土器実測図
($S = \frac{1}{4}$)

の北東1.5mで検出した土坑である。中世の大溝によって土坑上半は失なわれているが、径は約1.2m、深さ0.6mを測る円形の土坑である。土坑はほぼ円筒形を呈する断面形態で底面は平坦である。土坑の埋土は四分層され、上層黄褐色土層で土坑埋土、中層灰黒色粘土層、下層茶褐色植物層、最下層黒色粘土層である。遺物は最下層より平鋤や木片などが出土し、それを覆うように植物遺体が残存していた。本土坑もSK-1101と同様、平鋤を貯蔵した土坑であろう。

SK-1103

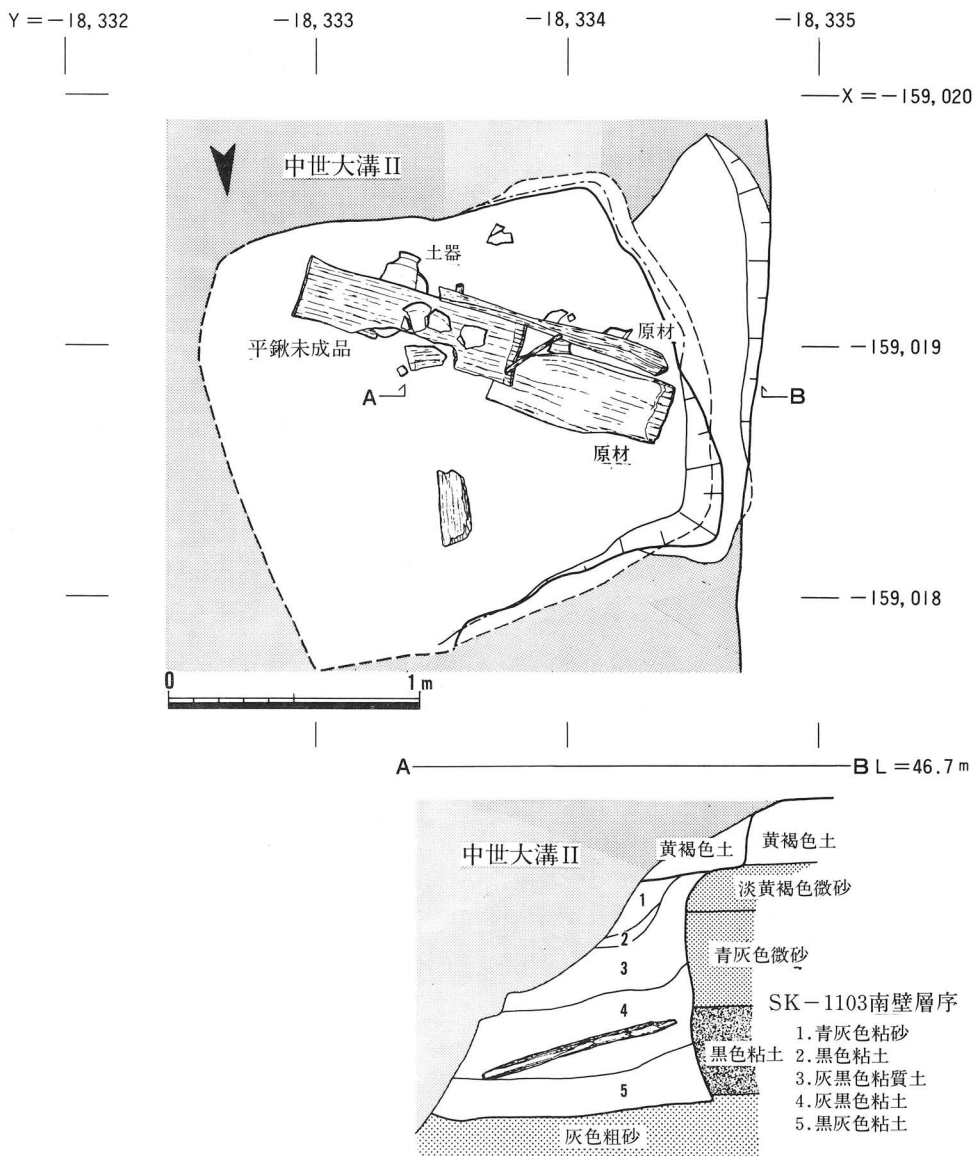
SK-1102の南5mで検出した土坑である。本土坑もSK-1102と同じく中世大溝によって切られており、平面プラン・規模を明確にしえないが、短辺1.6m、長辺約2mの方形の土坑と思われる。土坑の深さは上面を欠失しており、現長1mを測るが、堆定約1.3mの深さを有してい

SK-1101

第2トレンチ南端で検出した方形の土坑である。調査範囲外にも土坑がおよんでいる為平面プランや規模については明らかにしえないが、現長一辺2m以上、深さ0.6mを測る。土坑底面は平坦で堆積土もほぼ水平に堆積している。堆積土は四層で、第1層は土坑埋土で黄褐色土層、第2層暗灰褐色土層、第3層は灰黒色粘土層で炭化物を多く含んでいる。第4層暗青灰色粘土層で青灰色シルト層のベースが流入して形成されたものである。遺物は土坑の底面直上より狭鋤、獣骨1点が出土した。第4層上面から第3層にかけて半完形の土器がまとまって出土した。本土坑は狭鋤を貯蔵した土坑と思われる。

SK-1102

本土坑は第2トレンチの南端、SK-1101



第17図 SK-1103 遺構平面図及び断面図 (S = 1/30)

と思われる。土坑の堆積土は粘土・粘砂などの5層に分層される。遺物は第4層の灰黒色粘土層で集中して出土した。平鍬未成品(二个体連結)、カン材の板状や棒状の用途不明未成品、半完形土器などを検出した。本土坑は農耕具等の未成品を貯蔵するための土坑と思われる。

(3) 弥生時代中期の遺構

弥生時代中期の遺構の大半は第1トレンチで検出した。溝では環濠になると考えられる大溝や

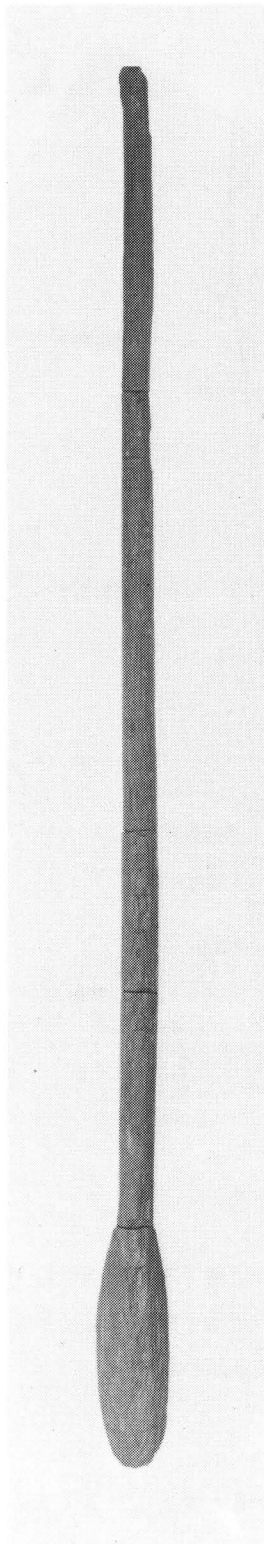
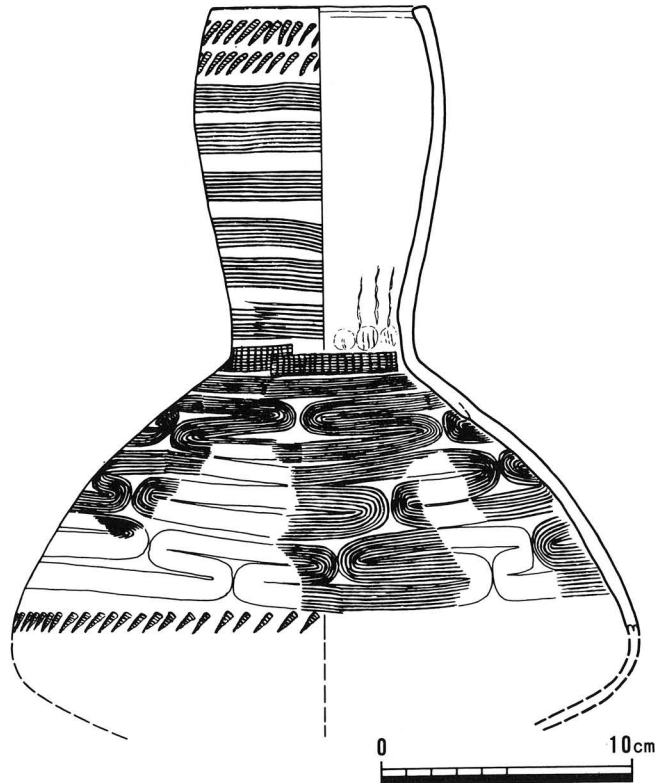


写真3 SD-204中層
出土櫛状木製品(S=1/6)

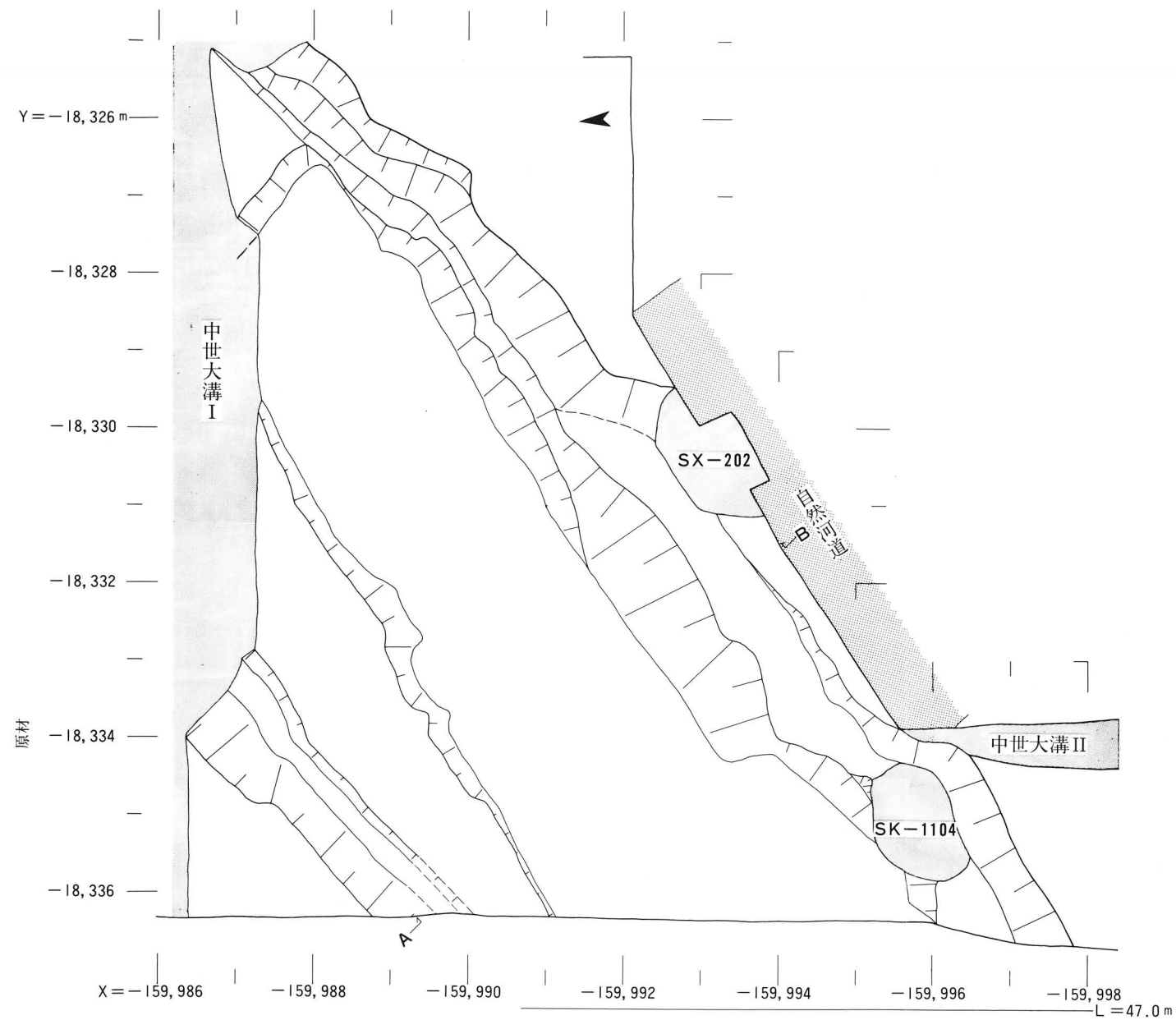
ムラ内部を区画する小溝などがある。また、土坑では井戸と思われる土坑が顕著であった。本調査地では遺構検出数、遺物出土量を最も多く数える。主要遺構についてその概略を報告することとする。

SD-204

第1トレンチ西端で検出した大溝である。北東から南西方向に走る溝で第13次調査で検出したSD-06中期溝と同一溝である。大溝の規模は溝の西側肩部が調査範囲外の為、明らかにしえないが、溝幅約8m、深さ1.4mを測る。溝の断面形態は二段の逆台形を呈する。溝の堆積土層は大きく四分層され、上層(第3~6層)は砂質土、中層(第7~17層)は砂層堆積、下層(第18~22層)・最下層(第23~24層)は粘土堆積層である。本溝で注目されるのは第13次調査でも検出したように中層における砂層堆積である。これは多量の土器を包含する第14層暗灰褐色粗砂層や灰褐色細砂など、砂を主体とする層で形成されており、溝の東から西側方向に流入した層である。この層が形成された後、溝は機能を失ない、黒色粘土の堆積と小規模な再掘削がおこなわれる。これが上層の堆積土層である。



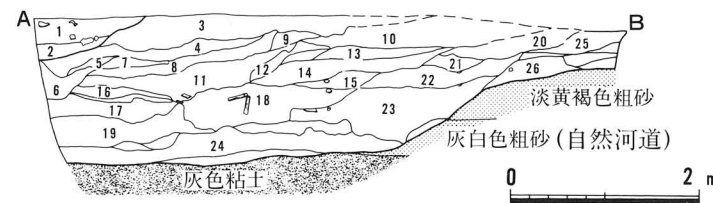
第19図 SD-204第15・18層出土流水文土器
(S=1/3)



SD-102・204北壁層序

1. 黒褐色土
2. 黒色粘土
3. 黄褐色土
4. 暗灰褐色砂質土
5. 黒灰色砂質土
6. 黒灰色砂質土
7. 黒粘と黒灰色砂質土ブロック
8. 黒粘(第IV層遺物取り上げ)
9. 灰黄色砂質土
10. 黄褐色土
11. 灰褐色細砂
12. 灰黒色砂質土
13. 黒灰色粘質土
14. 暗灰褐色粗砂(第V層遺物取り上げ)
15. 黒灰色砂質土(第VII層遺物取り上げ)
16. 青灰色シルト(流入土)
17. 黒粘と灰褐色細砂ブロック
18. 黒褐色粘土(上位は第VIII層、下位は第IX層遺物取り上げ)
19. 黒粘
20. 黒灰色粘質土
21. 灰黒色粘土
22. 黒粘
23. 黒粘
24. 黒粘
25. 灰黒色粘質土
26. 灰黒色砂質土

- SD-102 第1・2層：1
第3層：2
- SD-204 上層：3～6
中層：7～17
下層：18～22
最下層：23・24



第18図 SD-204 遺構平面図及び断面図 (S = 1/80)

本溝の出土遺物は今回の調査で最も遺物量が多い。特に中層出土の土器がその大半を占めている。最下層からは孔を穿ったイノシシ下顎骨、柱状片刃石斧、土製投弾など、中層からは多量の土器の他、木製高杯、木庖丁、木製紡錘車、硬玉製玉、鐸形土製品、投弾が出土している。粗砂層が形成された後、黒色粘土が堆積しているが、その一部には炭化した藁状の植物繊維がみられその中には縄の断片も含まれていた。時期は最下層・下層は第Ⅱ～Ⅲ様式で、わずかであるが第Ⅰ様式の土器も含んでいる。中層は第Ⅳ様式中葉から末にかけて、上層は第Ⅳ様式末から第Ⅴ様式初頭にかけての土器を含んでいる。

S D-103

本溝は第1トレンチ中央で検出し、北西から南東方向に走る溝である。この溝の方向からすれば北西側はS D-204に合流すると考えられる。本溝は溝幅約2.4m、深さ約0.8mを測る。溝の断面は逆台形を呈するが、溝底の中央から東側にかけて幅約0.3m、深さ約0.2mの小溝がつくられている。S D-203を切っている。溝は黒色粘土によって堆積しているが、上層には溝の埋土と思われる暗灰褐色土がみられる。

遺物は他の溝に比較して少なく、土器が主である。溝底の小溝から大形石庖丁(図版49-9)の破片が出土している。本溝は第Ⅲ様式の溝と考えられる。

S D-202・S D-205

S D-202は第1トレンチの東よりで、S D-103の東約5mで検出した溝である。北西から南東方向に走向する溝である。本溝は幅約4mを有し、最深部での深さは0.7mを測るが、溝の底面は凹凸が激しく、本遺跡で検出するような大溝とは性格が異なる。幅4mの浅い落ち込み状の中央に幅0.4mの掘方の安定した小溝が掘削されている。この小溝の西側は雑な掘方の小溝で所々が深み状になっている。これらの小溝がオーバーフローした時、幅4mの溝全体が機能したと思われ、全体に黒色粘土が堆積していた。

遺物は半完形を含む土器が溝中央やや西よりで多量に検出した。この土器群に混在して大型蛤刃石斧(図版49-18)、半磨製石剣、骨針、炭化米などを検出した。時期は第Ⅲ様式で、溝の方向からS D-103に並行しながら、S D-204に合流するものと思われる。

S D-205はS D-202の東1.6mで検出した小溝で西北西から東南東方向に走向する溝である。溝幅約0.6m、深さ0.4mを測る。遺物は少ない。第Ⅲ様式の土器が出土している。第13次調査で検出したS D-09と同一溝と思われる。

S K-114

第1トレンチ西方で検出した土坑である。中世大溝によってその上面を欠失しているため、平面プラン、規模は明らかにしえないが、長径0.75m、短径0.6mの楕円形の土坑である。深さは現在1.41mを測るが、弥生中期の遺構面からすれば、1.8mの深さになる。ほぼ円筒形に掘削されており、土坑底は青灰色微砂の湧水層に達しており、土坑の形態等から井戸と思われる。土坑は粘土堆積によって埋没しているが、土坑底より0.7m上の土坑中位にあたる所で水差形土器と自

然石1点を検出した。水差形土器の内部には蛙の骨が残存していた。時期は第Ⅲ様式である。

SK-1104

本土坑は第2トレンチ北端、SD-204の溝上に掘削された土坑である。径1.8m、深さ1.1mを測る円形プランの土坑であるが、土坑中位より下ではやや楕円形プランを呈する。土坑の断面形態は土坑上位部分は皿状で、下位部分は円筒形を呈する。土坑の堆積土は黒色粘土が充満しており、土坑中位には間層として植物腐植層があり、容器と思われる木製品が出土した。また、下層の黒色粘土上面において木庖丁の完形品(図版45-2)が出土している。土坑の遺物は比較的少ない。時期は第Ⅳ様式で、土坑はその形態や立地条件から井戸と考えられる。

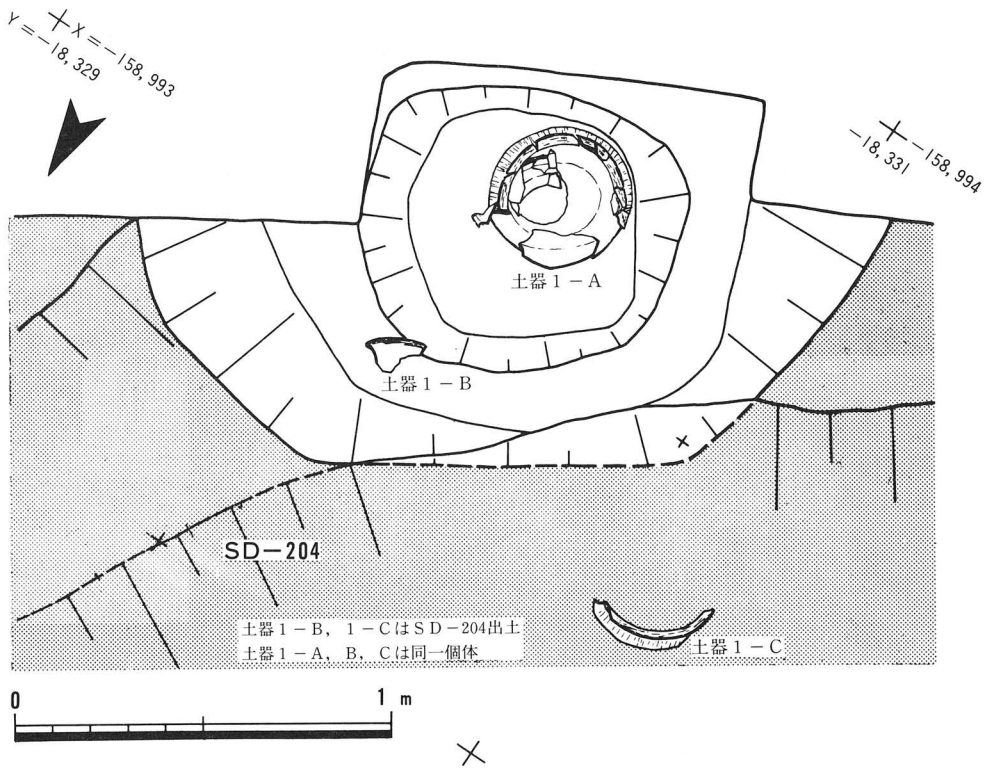
SX-202

本土坑は第1トレンチと第2トレンチの交差部(拡張区)で検出された土坑である。SD-204の東側肩部で、弥生時代以前の自然河道上に立地している。本土坑は長径2m、短径推定1.5mの楕円形で、土坑中位にテラスをもつ二段掘りの土坑である。深さは0.7mを測る。本土坑の中心部では底部を打ち欠いた短頸壺と甕が二段に重ねられた状態で出土した。土坑の埋土は粗砂層で、土坑を掘りあげた粗砂を埋土にしたものと思われる。土器は下に短頸壺を、上に大和型甕を重ねており、ほぼ垂直に立てられていた。短頸壺の受口状口縁部に、底部を打ち欠いた甕の下胴部が接する状態で検出した。壺内には暗灰色細砂、甕内には黒灰色粘砂が堆積していた。甕の口縁は上端から17cm前後のところの一部欠損しており、その欠けた口縁部はSD-204の溝内に落ち込んでいた。SD-204の溝が開口している時点で本土坑が掘削され、地上より17cm程甕の上半部が露出させた状態で使用されていたものと考えられる。

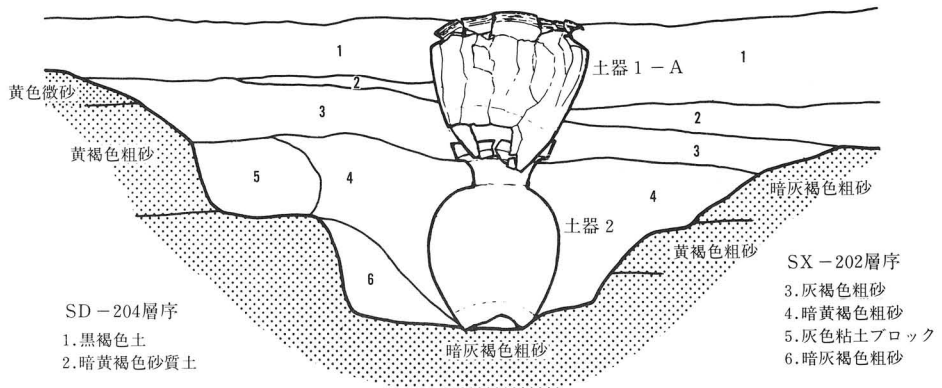
本土坑は粗砂層の自然河道上に掘削されていることや底部を打ち欠いた壺や甕が垂直に立てられていたことなどから、壺や甕は井戸枠の役割を果すもので、一種の集水施設と考えられる。



写真4 SX-202 検出状況



L = 46.7 m



第20図 SX-202 遺構平面図及び断面図 ($S = \frac{1}{20}$)

SK-105

第1トレンチの東半で検出された弥生時代中期の土坑である。前期溝SD-203を切って堀削されている。南東-北西方向を軸とする細長い矩形をなすと考えられるが、北端を中世大溝Iに切られている。土坑の規模は長軸4m以上、幅0.9m、深さ1.0mを測る。南端から同方向にの

びる幅 0.9m、深さ 0.4mの浅い溝があり、一連のものである可能性が高い。

土坑は暗灰褐色粗砂層の湧水層にまで達しており、機能中は滞水状態にあったと考えられる。埋土は大きく3層に分層できる。下層は木片や植物質を多く含む黒色粘土からなり、滞水状態中の自然埋没によって形成されたことがわかる。土器量は少なく、破片も少ない。中層は黒褐色粘質土で、やはり人為的な埋没ではない。上位でややまとまった土器の廃棄がみられた。この段階で土坑はその機能を完全に失なったと考えられる。上層は、炭・灰を多量に含む灰黒色粘質土で折り重なるようにして土器が出土した。半完形のものや大形の破片が多い。土坑がほぼ埋ったのちの皿状の窪地にまとめて廃棄されたものと思われる。

なお、注目すべき遺物としては、下層のヤス状骨製品、中層の播磨系と思われる高杯、尾張地方の壺などがある。

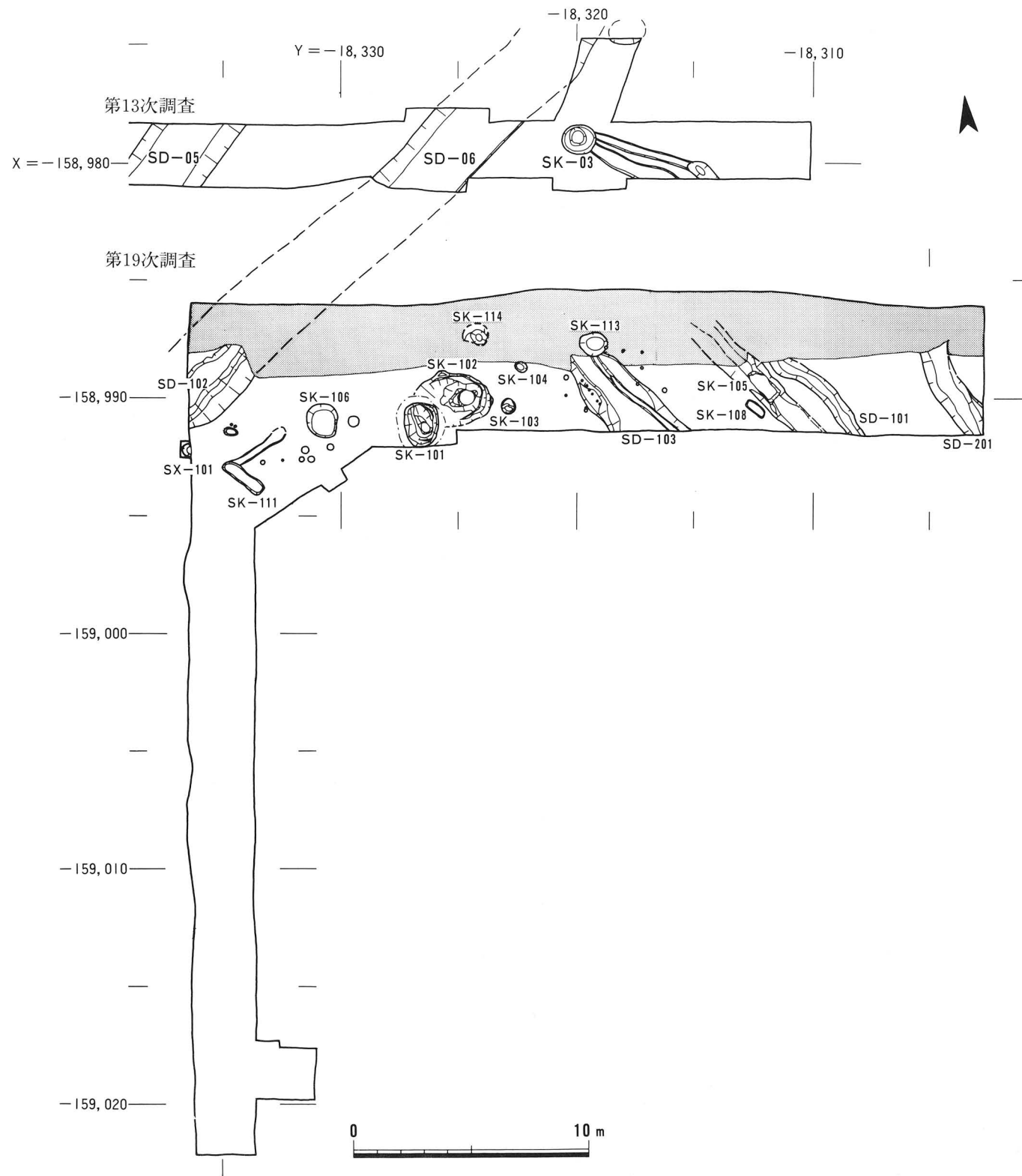
SK-102

本土坑は第1トレンチの西端で、SD-204に接して検出した。SK-101に南西端を切られている。土坑は二段に掘削されており、上半は東西に長軸をとる楕円形を呈する。東西 3.3m 南北 2.3m、深さ 1m を測る。東半は急な角度で掘り込まれているが、西半はゆるやかである。特に下半円筒部に接する西半部には、小さなテラスが作られている。下半の円筒部は、上半の楕円形の中心より東へずれたところから掘られている。径約 0.7m、深さ 0.9m を測る。円筒部下端は湧水層である灰色粗砂層に達し、側壁が倒壊して袋状を呈している。

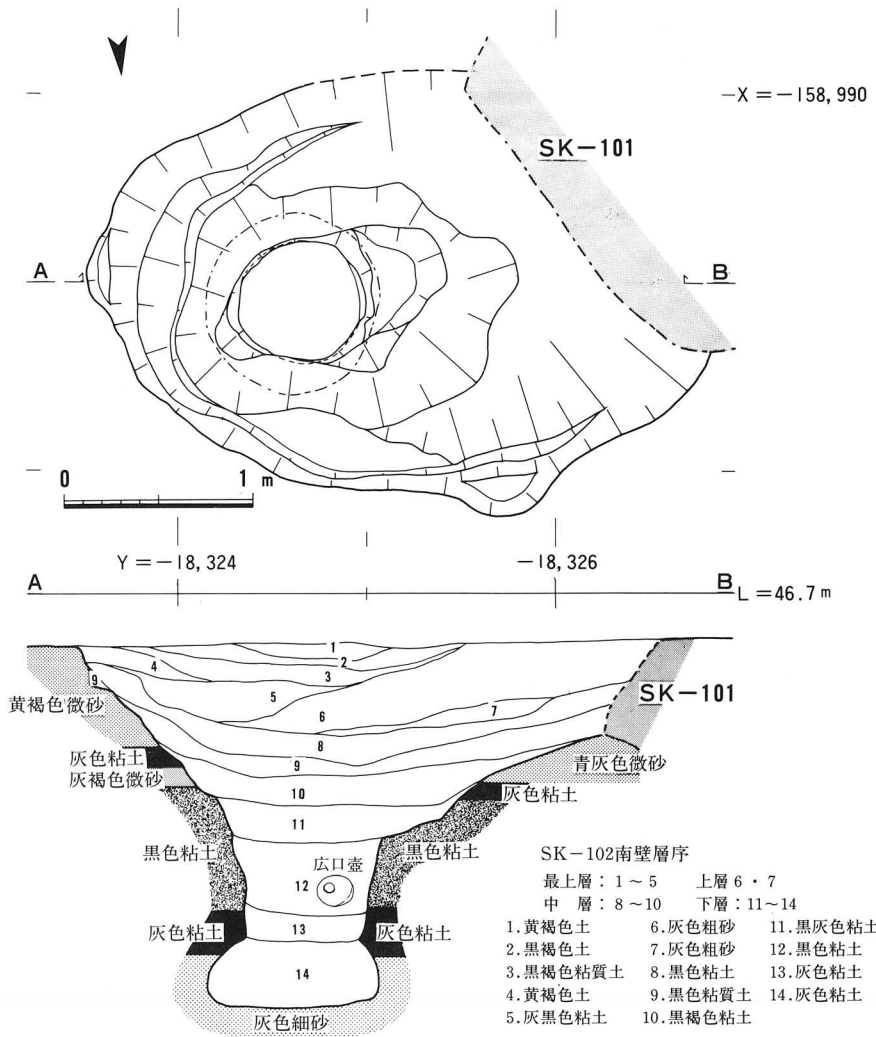
土坑内の土層堆積は、最上層、上層、中層、下層に四大別できる。下・中層は土坑内の自然堆積によるものである。上層は灰色粗砂層で流入によるものと考えられ、あるいは隣接遺構SD-204が砂層で埋没した際の再掘削による廃土かもしれない。最上層はSK-102が大かた埋没した際、上面にできた凹地に堆積したものである。土器は中層以上に多く、ことに最上層に集中している。ただし円筒部に堆積した下層上位からは完形広口壺1点を検出している。土坑下半の円筒部が埋没した後に堆積した中層からは、下位から丸鍬の半加工段階のもの1点、上位から平鍬の半加工段階のもの1点、丸鍬の穿孔を持つだけになった半完成品2点の農耕具未成品が検出されている。下層から最上層までの土器の示している時期は短く、中期末から後期初頭である。遺構の性格は本来、井戸であったと考えられるが、埋没していく過程で木器未成品の貯蔵施設に変化した可能性が指摘できる。

SK-101

本土坑は第1トレンチ西端で検出した土坑である。土坑は長軸 1.9m、短軸 1.45m、深さ 2m を測る。平面プランは楕円形を呈し、土坑の断面形態は頂点のない円錐形になると思われるが、土坑の上半が水の浸蝕による壁面の崩壊でオーバーハングしている。オーバーハングは大きいところで 0.5m にも及ぶ。土坑の底面中央はほぼ円形プランを呈するが、北側は不整形に大きく挟られており、井戸枠の抜き取り痕跡のようなプランを呈している。しかし、土坑の堆積状況は黒



第21図 第13・19次調査 弥生時代中期～古墳時代の遺構平面図 (S = 1/240)



第22図 SK-102 遺構平面図及び断面図 (S = 1/40)

色粘土や土坑壁面の青灰色シルトの崩壊土による自然堆積で抜き取り痕として判断できない。土坑の堆積を大きく三分層するならば、上層は粘質土、中層、下層は粘土で遺物は上層、中層で多量に出土した。上層では長頸壺など完形品が出土し、後期中葉の土器が占めているが中・下層では中期末から後期初頭の土器が出土した。本土坑は後期中葉頃まで凹み状に残存していたと思われる。中層では土坑のオーバーハング部分の三カ所に板材などが入り込んだ状態で検出された。これはオーバーハング部分が水の浸蝕によって崩壊するのを防ぐために、井戸杵状に簡易な施設

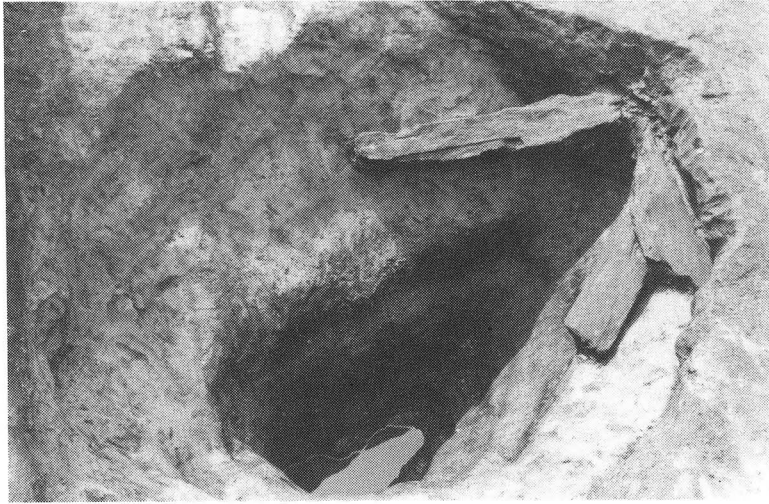


写真5 SK-101 板材組み方状況

を設けたものと考えられる。また、土坑の中心部では自然木が多く出土し、これらとともに土器や手網状木製品などが検出された。これらの自然木は土坑の上覆施設とも思われる。以上のようなことから本土坑の性格は井戸と考えられる。

(4). 弥生時代後期の遺構

SD-102

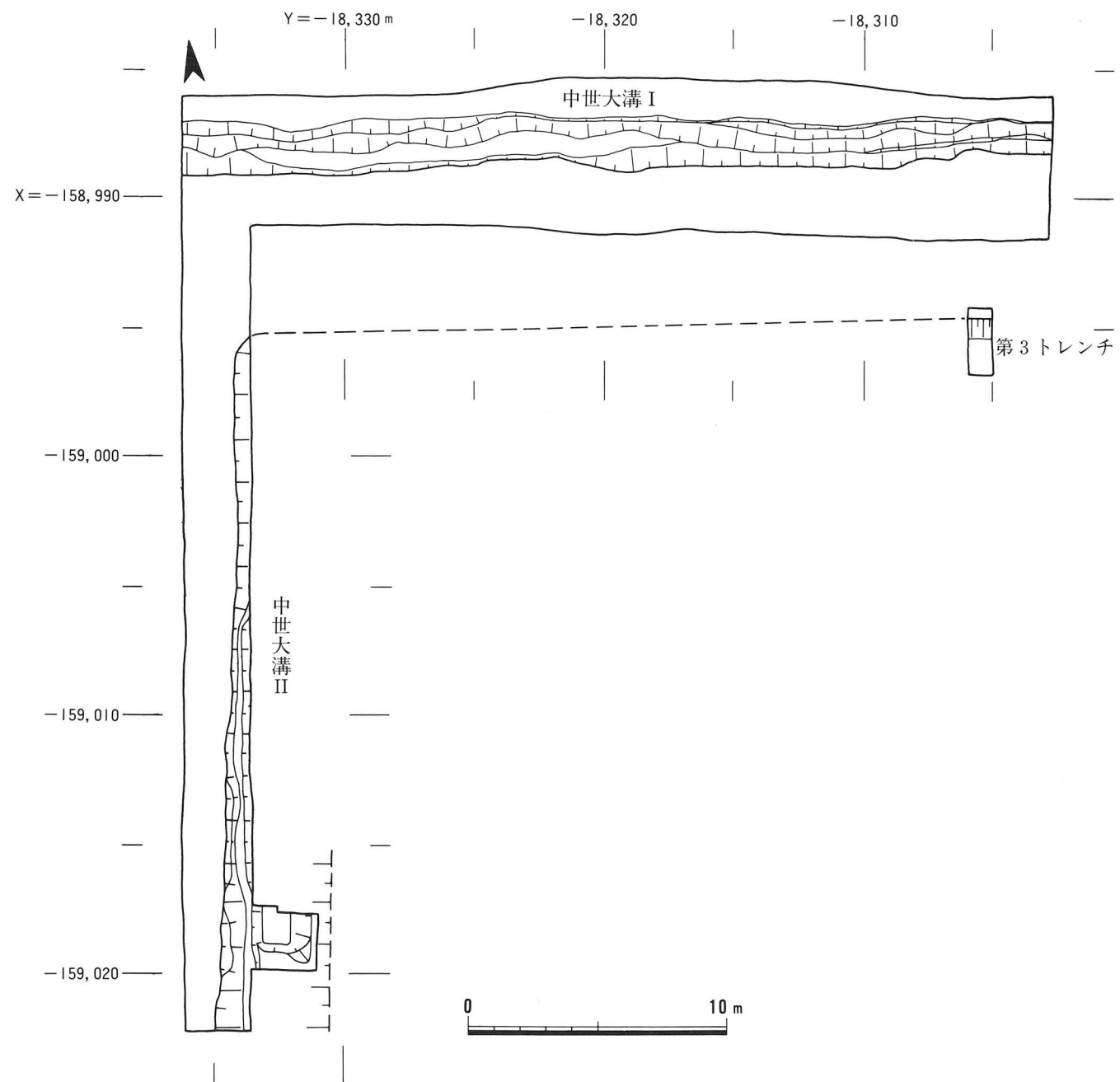
本溝は第1トレンチ西端で検出したものでSD-204の弥生中期の溝が埋没した後、掘削されたものである。SD-102は北東から南西方向に走向する溝で、溝幅2.2m、深さ0.6mを測る。本溝の埋土は3分層され、第1・2層は黒褐色土で多量の土器を含んでおり、第3層は黒色粘土層で遺物は少ない。時期は後期前葉（第3層）から後期後葉（第1・2層）の土器が出土している。本溝は第13次調査で検出したSD-06後期溝と同一溝と思われ、弥生後期段階の環濠になると思われる。

(5). 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は大きく前期と後期の遺構があり、前期には溝や壺棺墓、後期には溝などで遺物の大半は第1トレンチ東端に集中している。

SD-201

本溝は第1トレンチ東端で検出した溝で、北北西から南南東に走向する溝である。溝幅約2.2m、深さ0.5mを測る。溝の埋土は7層で形成されているが、第1層の暗茶褐色土層が埋土で、第2層以下は自然堆積の粘質土で堆積している。遺物は大半が弥生土器であるが、これらと混在して、纏向2～3式の古式土師器片が含まれていた。



第23図 第19次調査中世遺構平面図 (S = 1/240)

S X-101

第1トレンチ西端で検出した壺棺墓である。上面の一部は削平によって欠失している。径0.6m、深さ現高0.36mを測る土坑で、土坑内に壺胴部下半部と蓋に使用したと思われる土器片が残存していた。この土器片と壺との間にガラス小玉完形3点、破片3点（同一破片も存在すると思われる）、碧玉製管玉1点が残存していた。これらの副葬品の他、骨などは検出していない。この壺は纏向3式頃のものと思われる。

(6). 中世の遺構

中世大溝 I

本溝は第1トレンチの北半全面で検出した東西溝である。溝は調査範囲外にも及んでおり、規模は明確にできないが、推定幅6m、深さ1.1mを測る。本溝は延長34m検出し、ほぼ同じような溝の形態であるが、東側5m部分ではやや溝幅が縮少し、浅くなっている。堆積土は5層に分層され、第1・2層は約30cmの溝の埋土で、第3～5層は自然堆積で灰黒色粘質土層、黒色粘砂層、暗灰青色粘土層である。第4層が最も遺物が多く、牛骨などが出土している。時期は14世紀から15世紀頃で、館の環濠と考えられる。

中世大溝 II

第2トレンチの東半、第3トレンチで検出した大溝である。検出部分は大半が溝の肩の部分のため、規模は明らかにできないが、第2トレンチ南での拡張区から推定すると溝幅4.5m、深さ1.6mを測る。第2トレンチでは南北で22m検出し、北端部でL字状に曲がり東側に走る東西溝になると思われる。この東西溝と中世大溝Iの間隔は約5.6mである。堆積は第1層暗茶褐色土層で埋土、第2層から4層は粘土層で自然堆積である。遺物は少ない。

本溝はL字形の大溝で、中世大溝Iの内側にあり、L字形で囲まれた内部は現在畑地で一段高く、建物を囲む区画溝である可能性が高い。

3. 出土遺物

(1). 土器

第19次調査で出土した土器は膨大な量に達しており、全てについて触れることはできない。弥生前期から中世に至る各種土器が含まれているが、弥生中期（第IV様式）の土器が大半を占める。ここでは土器編年上、重要な位置をしめると思われるものを中心に報告することとする。

S X-202 出土土器（図版40-1、2）

1は短頸壺で、底部が打ち抜かれている。現高50.3cm、体部径36cm、口縁部径24.7cmを測る。外面にはハケ調整が全体にみられる。体部下半はケズリの後にミガキ調整をおこなっている。口縁部は受口状を呈しており、口縁部に二条の凹線文、口縁部下には一条の凹線文を施している。

口縁端部は面をもち、内方に肥厚する。内面は全体にハケ調整を施している。

2は大和型甕で短頸壺と同じく底部が打ち抜かれている。現高45.2cm、体部径39cm、口縁部径36cmを測る。口縁部は丸みをもち、わずかに下方に折り曲げている。頸部はゆるやかに屈曲している。外面には全体に縦方向の粗いハケ調整を施している。体部下半には煤が付着している。内面はナデ調整であるが、口頸部には横方向のハケ調整がみられる。口縁上にはハケ原体による刻目がめぐっている。内面の体部下半には炭化物の付着がみられる。

SK-105 出土土器

弥生時代中期の土坑SK-105から出土した土器について、上層の土器群はその概略を、また中層の土器群は搬入土器2点に限って説明する。上層・中層は明確に分層され、両者の間に接合関係はない。上層は土坑が中層の黒褐色粘質土で密封されたのちの人為的な埋土と考えられるもので、若干の時間的ヒアタスが想定されうる。

上層出土土器（第24～25図）

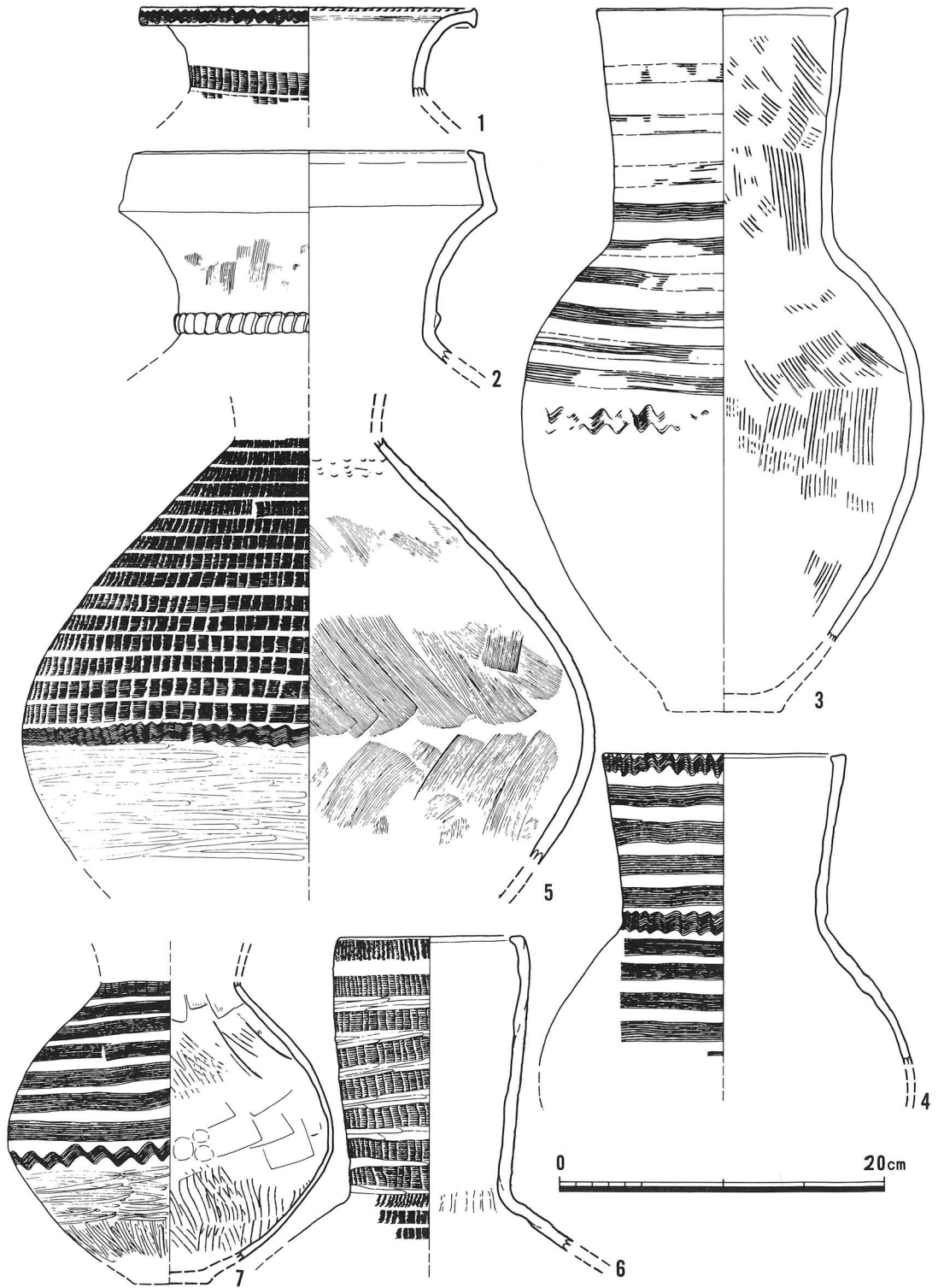
SK-105の上層（第1層・灰黒色粘質土、第2層・暗灰黒色粘質土）からは比較的多量の土器が出土している。出土状況からはきわめて短期間のまとまった廃棄が考えられる。器種は網羅的で、完形品は見られないが、半完形のものや大きな破片が多い。

壺 1は広口壺で口縁端部が上下に肥厚する。口縁端面に波状文、口縁内面に櫛描列点文、頸部には簾状文を施す。2は短頸壺で外反する頸部から更にやや内彎気味に口縁部が立ちあがる。口縁部は強いヨコナデが施され、端部が内側に拡張される。頸部には指圧による粘土紐帯がめぐる。3・4は直口壺である。頸部から体部の櫛描文は直線文を基調とし、波状文を折り混ぜている。3は他とは例外的に器表の保存状態がきわめて悪く、最上段の文様が不明である。4は口縁端部が内側へ肥厚する。5・6は細頸壺である。簾状文を繁縷に施し、最下端などに櫛描波状文、列点文をおく。6には文様間を埋めるかたちでミガキがみられる。7は頸部などを欠くが、水差の可能性が高い。直線文を連ね、最下端に波状文をおく。体部下半は丁寧に磨くが、器表の薄さから先にケズリをおこなっていることも考えられる。

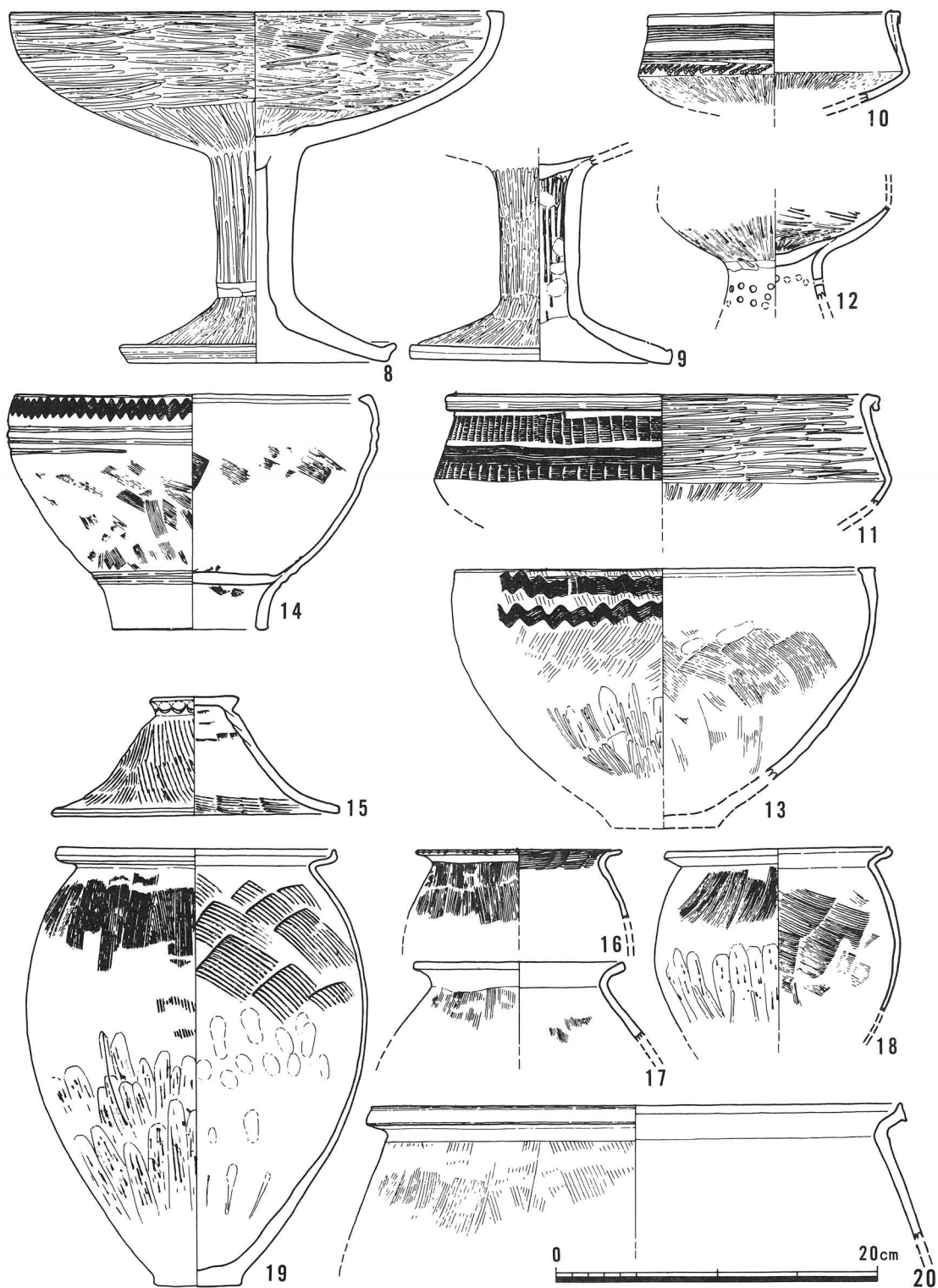
高杯 8・9は柱状の脚部をもつ高杯で、円板充填法で成形されている。いずれも脚内面のケズリはなく、また外面や杯部内面には丁寧なミガキが施されている。

鉢 10～12は脚付の鉢である。10・11は鉢部の破片で、体部は弱い稜をもっている。端部は下方に折り曲げて成形しており、上面はなだらかな面をなしている。12は外面に顕著なケズリがみられるが、脚内面にはない。13は口縁直下に2条の波状文を描く。体部下半は削ったのちミガキを施す。14の底部は面積の広い円板を充填して成形している。口縁直下に波状文、体部上半・下半にそれぞれ2条の凹線をヘラあるいは棒状工具で入れているが、上半のものは若干の重複部分がみられる。全体にハケののち、弱いナデで仕上げている。脚台部には透孔はみられず、口縁部の紐孔の有無は定かでない。13・14は口縁端部に内方への肥厚ないし拡張がある。

甕用蓋 15はほぼ完形に近い。外面は縦位の、口縁内面は横位の粗いハケを施している。



第24图 SK-105 上層出土土器 (S=1/4)



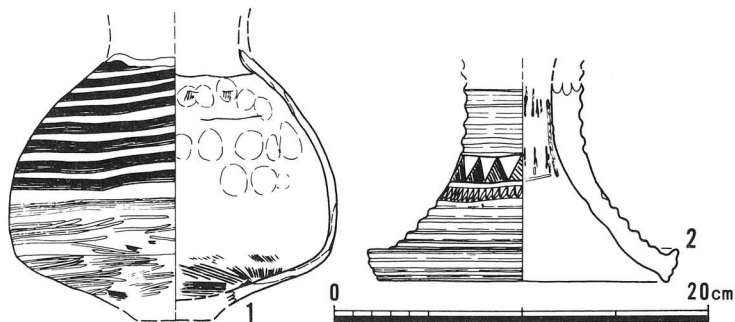
第25图 SK-105 上层出土土器 2 (S = 1/4)

甕 甕には大・中・小の大きさのものがあり、形態はバラエティに富んでいる。16~18は小形の甕である。16は大和型と呼ばれる甕であり、体部外面に縦位の、口縁内面は横位のハケを施している。口縁部はハケの一部を消すかたちで強いヨコナデを施して、端部には弱く刻み目を入れている。18の口縁部はハネ上げ口縁化している。体部はハケを施したのち、下半を削って仕上げる。19は中形の甕で、18と同様の器形・調整をもつ。20は大形の甕で、口縁端部を上方に大きく下方に小さく拡張して端面をかたちづくっている。体部はハケののちナデを施す。他に甕の破片には、20に類似する器形をもち、体部上半にナデを施してはいるが、その下にやや右上りの平行タタキがみられる小片がある。タタキ原体の刻みの間隔は粗い。

この土器群を全体的に眺めるならば、色調・焼成に関しては、暗赤褐色あるいは黄褐色を呈するものが優位を占めつつも、必ずしも一様とは言いきれない。しかし、文様構成・形態・調整などの諸特徴では、口縁端部の比較的せまい部分に施すヨコナデ手法、直立する口縁の端部を内方にのみ弱く肥厚ないし拡張させて上方に平らな面を形成すること、文様最下端などに波状文を配置するあり方、など器種を超えた強い共通性を認めることができる。以上のことから、この資料は出土状況、遺物自体の双方の検討において一括性の強いものであると言ってよいであろう。その一方、大和型の小形甕を含む点、高杯などの脚内面にケズリが見られない点、タタキの残る甕の破片が一片しかない点、のちに幅広い凹線文に発展する初現的な凹線を持つ点など、古い要素と新しい要素が入り混っているのは示唆的であり、大和地方における凹線文出現期の土器の様相を考える上での重要な資料となるものであろう。

中層出土土器 (第26図)

中層(第3層・暗黒褐色土、第4層・暗黒褐色粘質土)の土器は上層のものよりもやや古い様相を示し、簾状文が発達せず、直線文が卓越している。くびれ部に断面三角形の張り付け突帯文を持つ頸部の長い広口壺を含んでいるのが特徴的である。第Ⅲ様式の古い段階に属すると言ってよいであろう。ここでは注目すべき搬入品2点を取りあげる。1は伊勢湾沿岸地方の貝田町式と考えられる壺である。体部上半に5条1単位の不明瞭な櫛描直線文をめぐらす。体部の屈曲部および頸部との接合部には明確な擬口縁が観察できる。器壁がうすく、色調は黒褐色を呈している。



第26図 SK-105 中層出土土器 (S = 1/4)

2は播磨系と考えられる高杯の脚部である。強いヨコナデによって多数条の凹線を施している。裾部上方の凹線文帯間には、斜線で埋める線刻の鋸歯文と削り抜きによる面違いの鋸歯文が施されている。これらの表現にはいずれも鋭い金属状の工具が用いられているようである。脚内面にケズリは見られず、ヨコナデによる仕上げである。色調は灰褐色を呈する。

SD-204 出土土器

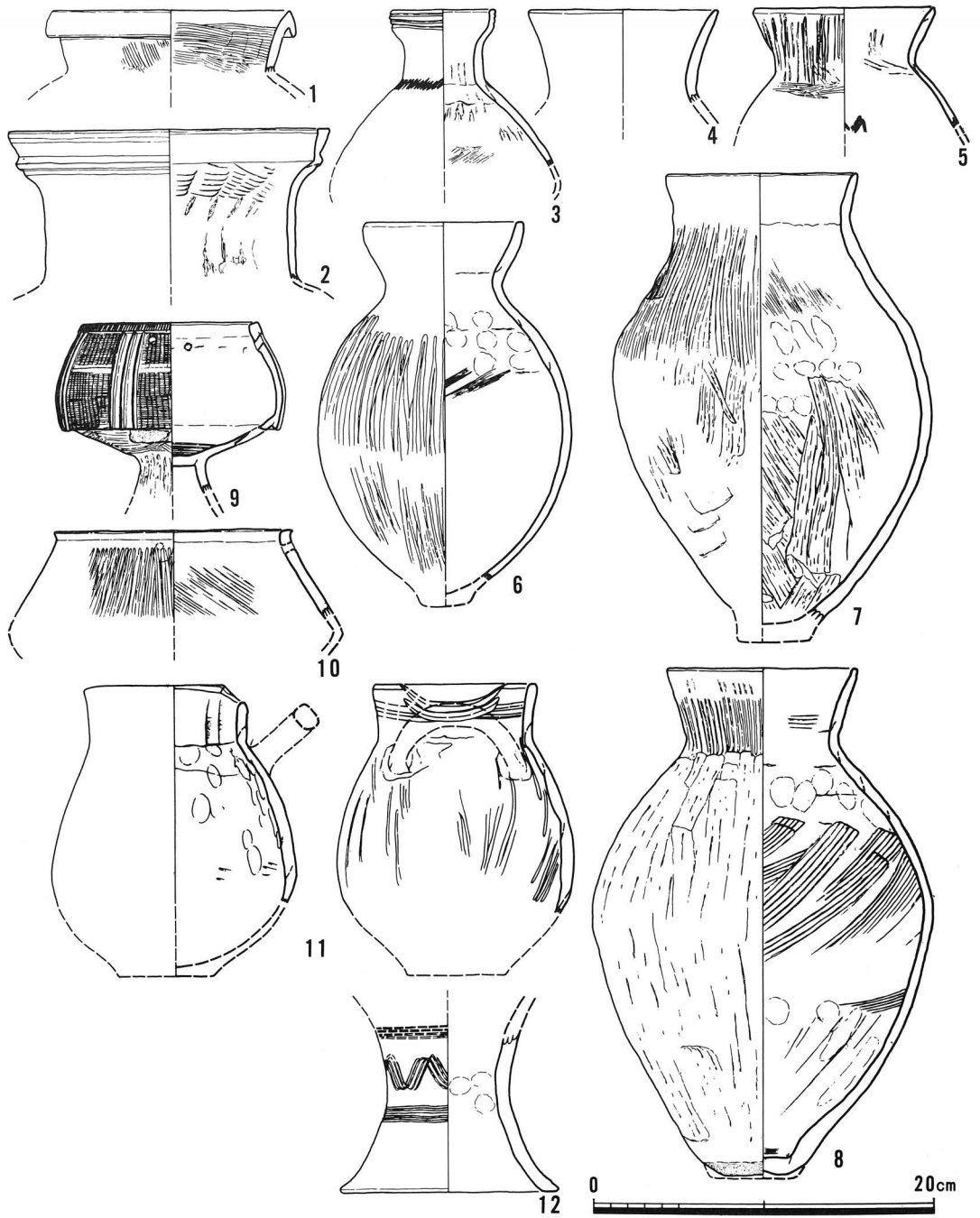
弥生時代中期の大溝であるSD-204からは多量の土器が出土した。その中でも良好な遺物包含状態を示したのが第8層（黒粘層）と第14層（暗灰褐色粗砂層）である。第14層が洪水層、第8層が洪水後に形成された粘土層として本遺跡で広く確認できる鍵層である。この二層の土器群は土層の形成とあいまって、弥生時代中期末から後期初頭にかけての様相を知る上で貴重な資料を提供した。

第8層出土土器（第27～30図）

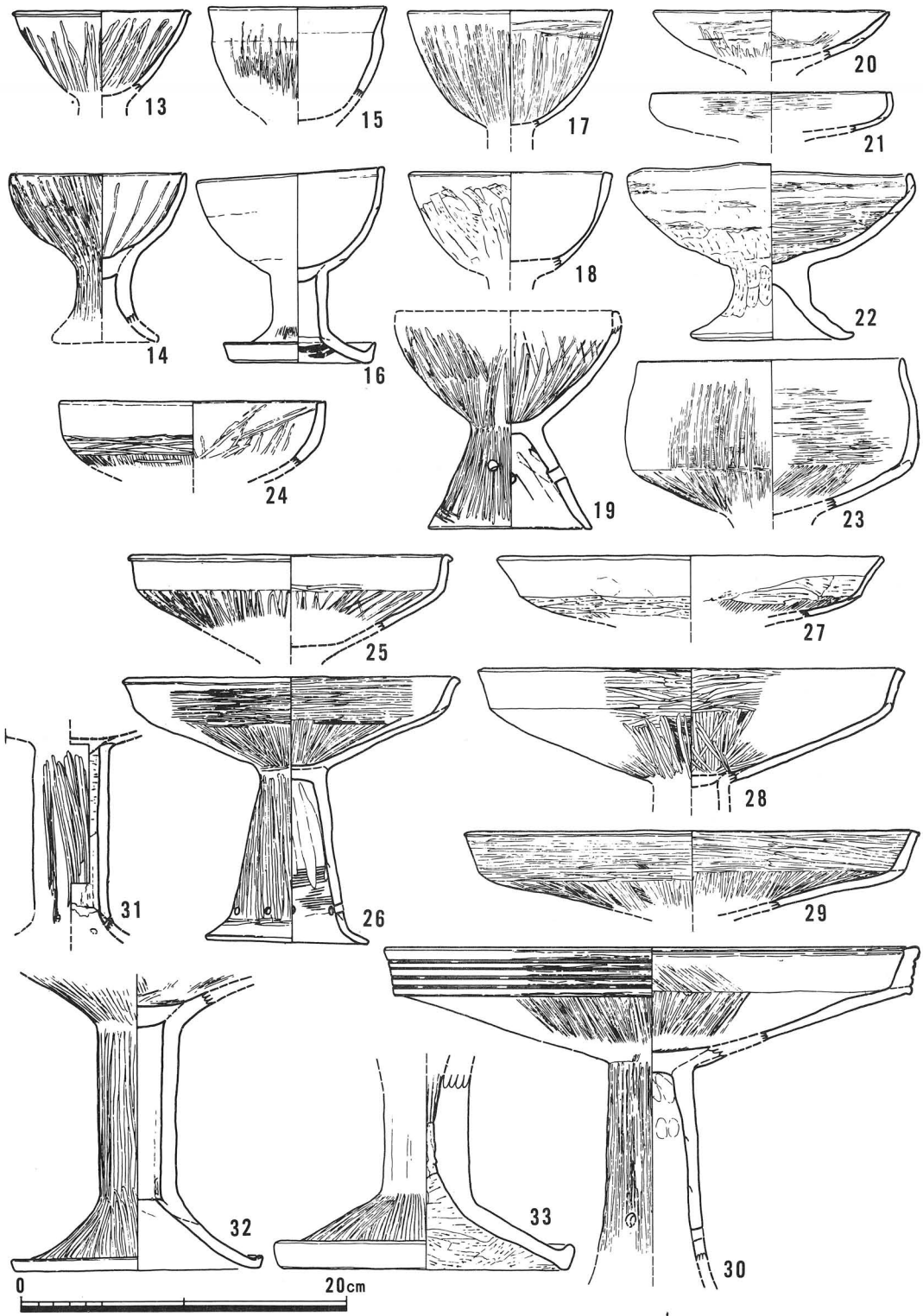
壺 1、2は広口壺である。1は頸部が短く、口縁部は鋭く垂下している。外面の頸部下端にはミガキのヘラ圧痕が残っており、体部はミガキを施していたことがうかがえる。2は直立する頸部に受口状口縁を付加したものである。口縁部にはわずかな凹線文がみられる。頸部はナデ調整をおこなっている。3は細頸壺で、頸部は短く受口状を呈している。口縁部には3条のヘラ描沈線がめぐっている。頸部と体部の境には櫛描列点を施している。全体にナデ調整を施している。4～8は短頸壺である。4・5・8は同形態のものである。この体部外面はケズリがみられる。底部は使用による磨滅で丸くなっている。6は頸部が内湾気味に立ち上がるものである。7は頸部と体部の境が不明瞭なもので、土器自体がかなり歪になっている。外面はハケ調整で、体部中央には粘土掻き取り痕がみられる。内面も底部から体部中位にかけて掻き取り痕がみられる。器壁は全体に厚い。9・10は無頸壺である。9は体部に簾状文を施した後に、3条（6ヶ所）と2条（2ヶ所）の棒状浮文を貼り付けている。体部下半には弧状のミガキが施され、1ヶ所穿孔されている。脚台はケズリの後、ミガキを施している。10は体部に全く丸みをもたず、直線的に伸びるものである。11は水差形土器である。頸部は短く、体部との境は不明瞭である。頸部には2条の浅い凹線がめぐっている。把手は差し込みになっている。外面は粗いミガキが施されている。胎土はいわゆる中・南河内産のものに類似している。

器台 12は小形の器台である。体部中央には櫛描の直線文と波状文が施されている。裾部はヨコナデがおこなわれ、全体に丁寧な仕上げになっている。

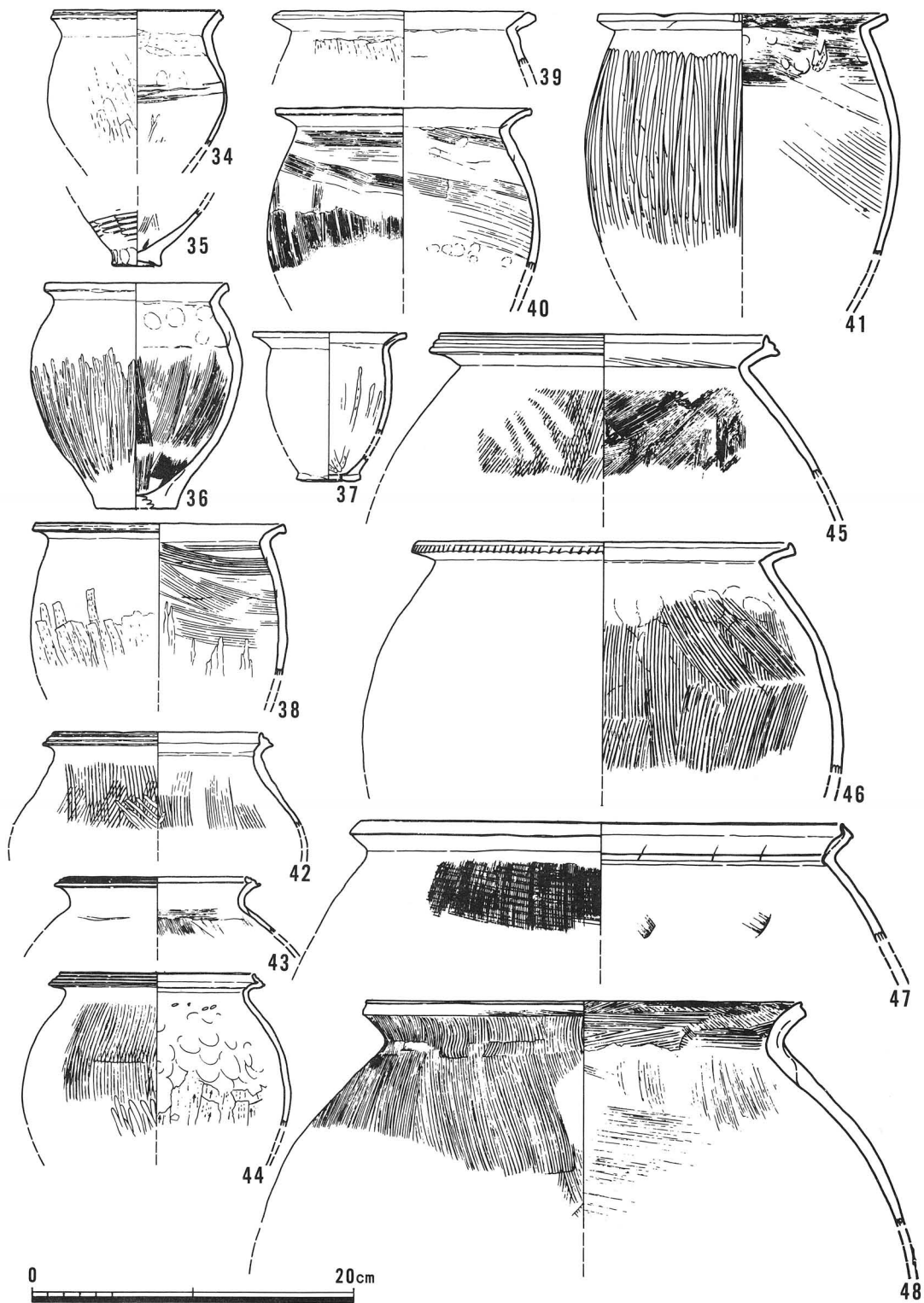
高杯 13～19は椀形の杯部を有するものである。杯部の形態は各々若干異なっている。15は口縁部下でわずかな屈曲を有する。口縁部では面をもつもの（13・16・18）と丸くおさめるもの（14・15・17）の二種がある。脚部においても柱状のものや円錐形に広がるものなどがある。調整ではミガキが一般的であるが、ナデ手法（16）や弱いケズリ手法（18）のものもある。20～23の



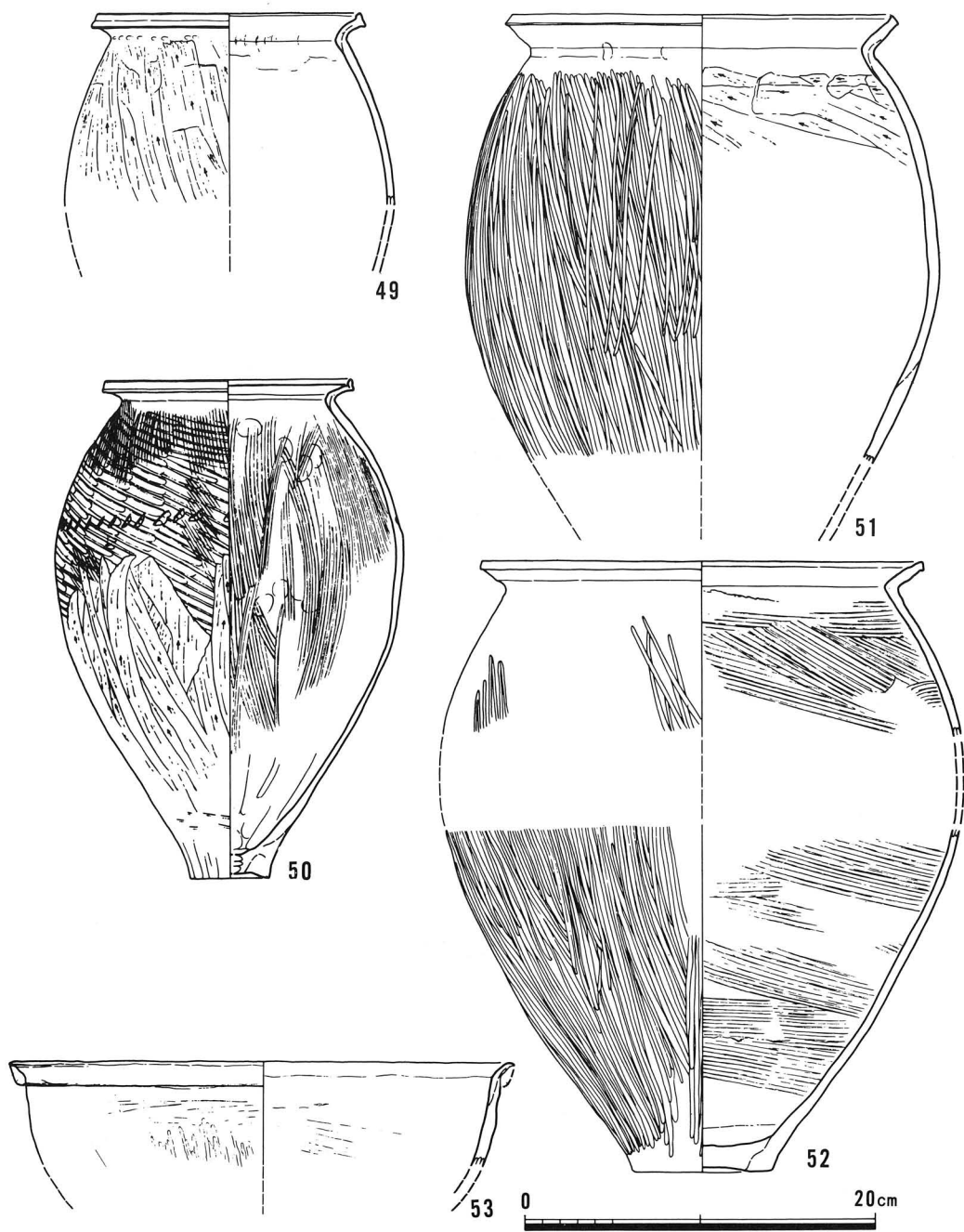
第27图 SD-204 第8层出土土器1 (S=1/4)



第28图 SD-204 第8层出土土器 2. (S = 1/4)



第29圖 SD-204 第8層出土土器3 (S=1/4)



第30图 SD-204 第8層出土土器4 (S=1/4)

高杯は異形の杯部を有している。23は粗雑な成形・調整で、全体に歪である。外面にはケズリがみられる。23は無頸壺に近い形態である。内外面ともにミガキ調整がおこなわれ、全体に丁寧な仕上げをおこなっている。24～30は皿形の杯部を有するものである。24は受部との境が不明瞭なものである。25の口縁部の折り返しは13のもの近い。27は皿部をタテ方向のケズリをおこなった後、横位のケズリを施し、受部と皿部の稜線をつくりだすようにしている。これは内面にもみられる。30は大形の高杯で丁寧に仕上げをおこなっている。受部には棒状工具による沈線が4条めぐっている。口縁部は内側に肥厚している。脚部は柱状を呈する。31～33は高杯脚部である。31は局所的なミガキが施されている。33は内面にケズリがみられるが、器壁はなお厚い。

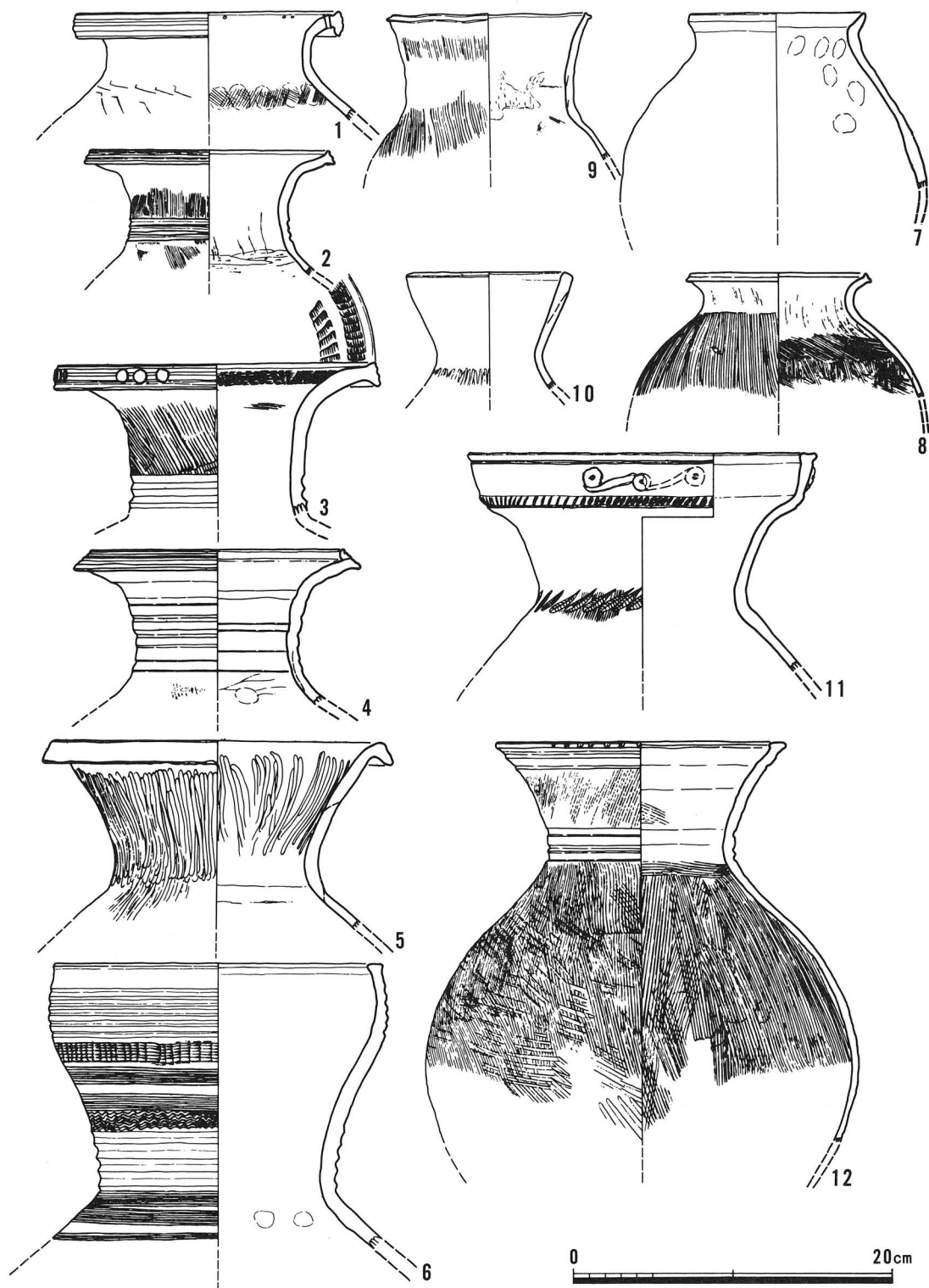
甕 34～37は小形甕である。35には右上がりのタタキがみられる。34は外面と頸部内面に弱いケズリがみられる他、体部中位の内面には横位の粘土掻き取り痕がみられる。この手法は37の内面にもみられる。36の甕外面はケズリの後ミガキを施している。38～44、49・50は中形甕である。口縁形態では端部が面をもつもの（38～41）と鋭く内方に折り返すもの（42～44）、上方へ肥厚するもの（49・50）がある。ケズリは外面に多くみられ、縦位方向のものである。41はケズリの後ミガキを施している。42～44は吉備地方にその系譜が求められるものであろう。50は粗い左上がりのタタキの後、体部下半を削っている。体部の中位には櫛描列点がめぐらされている。45～48・51・52は大形甕である。45～47の口縁部は上方に肥厚している。46は口縁部下にヘラ描列点が施されている。47の甕は左上がりのタタキの後にハケによってタタキを消している。48は頸部の屈曲が不明瞭なもので、内外面のハケ調整が目立っている。口縁部内面は横位のハケを施しており大和型甕の系譜でとらえられるものかも知れない。51・52の外面はミガキ調整を施している。51の内面は弱いケズリがみられる。

鉢 53は中形の鉢である。口縁部は折り返しているが剥落している。外面はミガキ、内面にはハケ後のナデ調整がみられる。

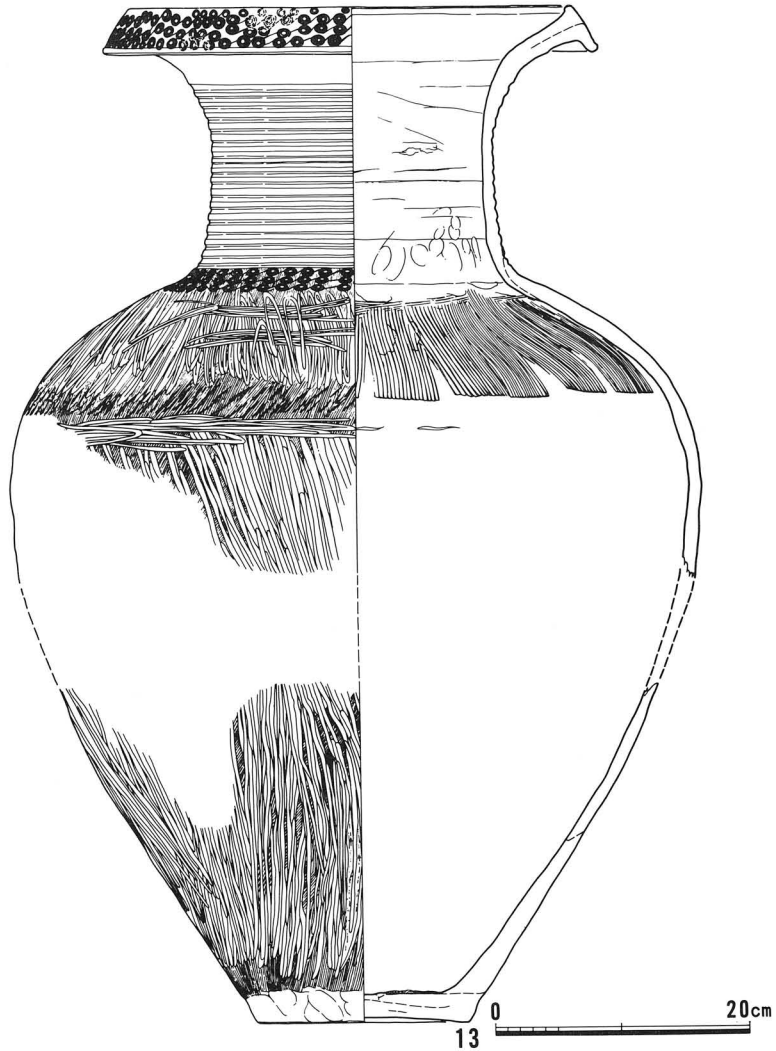
第14層出土土器（第31～37図）

第14層は洪水層であり、したがって洪水層形成期以前の土器も若干包含している。これは第14層とその直下の層の土器間で接合するものがみられることから知られ、洪水層の形成のあり方の問題として別の視点から考えなければならない。ここでは層間接合のみみられるものを、個別注記するにとどめる。

壺 1～13は広口壺である。2～4は口縁部外面及び頸部に凹線文をもつ。5は中、南河内地域に形態的類品をみるものであり、まったく無文化している点で注目される。13は口縁外面及び体部上端に数段の連続渦文を施す。連続渦文は三重の竹管文をヘラ描き斜線で結んだもので、右上がりの斜線による連続が一般的であるが一部左上がりの斜線による連続の部分もある。4～13ともに形態的類品を吉備南部地域に求められる。ことに4は岡山県上東平野地域の鬼川市O式期の土器に近似している。6・7・9～12は短頸壺である。7は器壁が厚く、粗いナデ調整によって仕

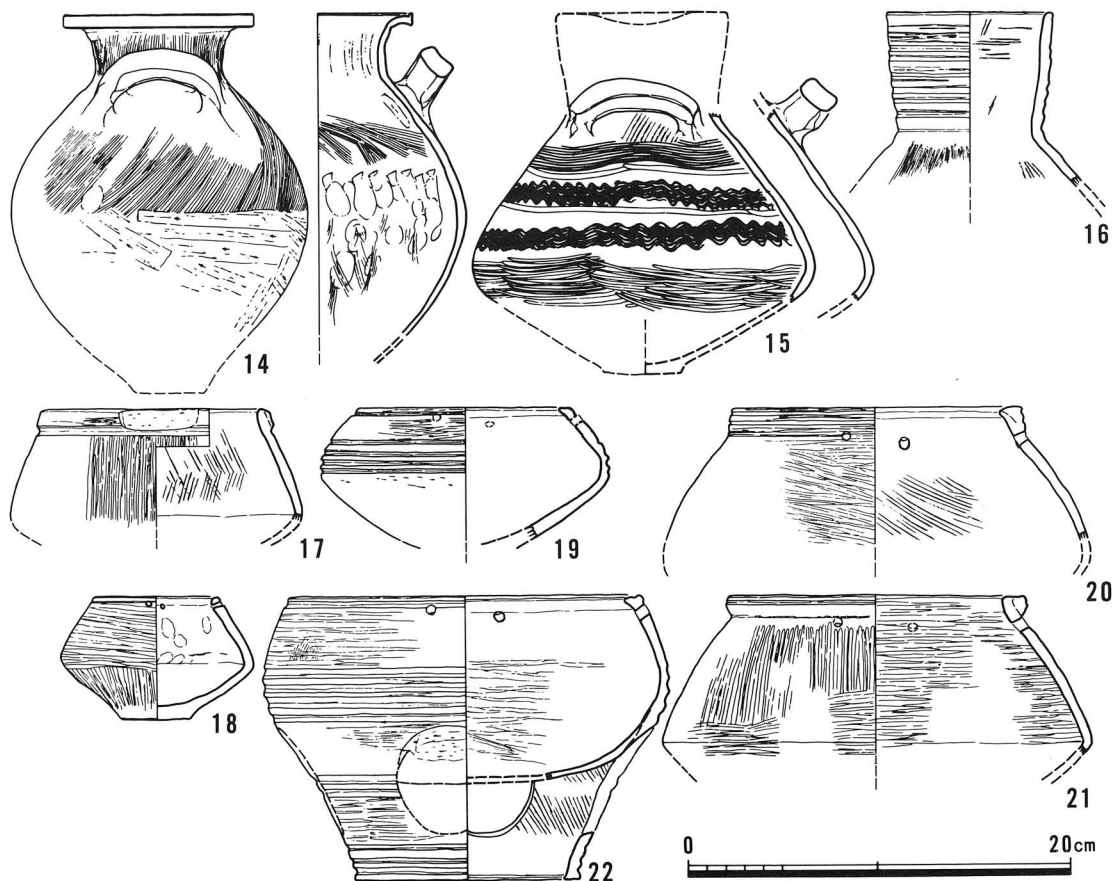


第31图 SD-204 第14层出土土器1 (S=1/4)



第32図 SD-204 第14層出土土器2 (S=1/6)

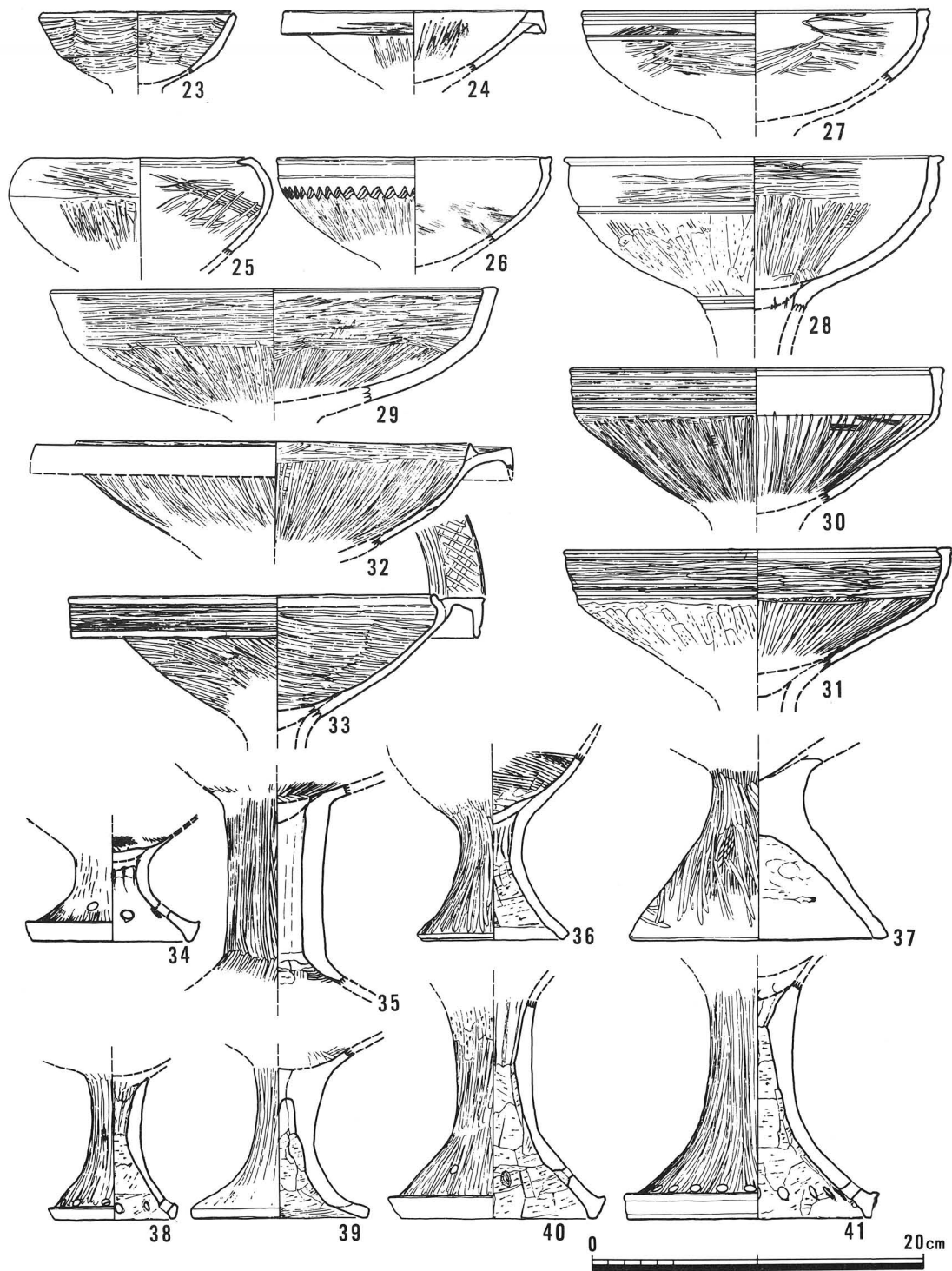
上げられている。11は口縁部外面の一端に円形浮文及び棒状浮文によって連続渦文を局部的に施している。12は、なで肩の体部をもち、口縁端部の一部に刻み目を施している。第IV様式に典型的にみられる短頸壺のなかでは、後出的色彩が強い。14は広口壺に横形把手がつく例である。15は水差し形土器である。体部に施された櫛描き文の間に、暗文状のミガキが認められる。16は水差し形土器と考えられるが、短頸壺かもしれない。17~22は無頸壺である。17は口縁部の一端を削りこんでいるが、目的は不明である。脚台がつくと思われる。20・21は体部中位が張り、帯状に作った口縁部の外面に凹線文をもつ。外面はミガキによる丁寧な調整である。22は台付き無頸壺である。台部には五つの円孔が穿たれていると推定される。台部・体部中位、口縁部上・外面に凹線文が施されている。



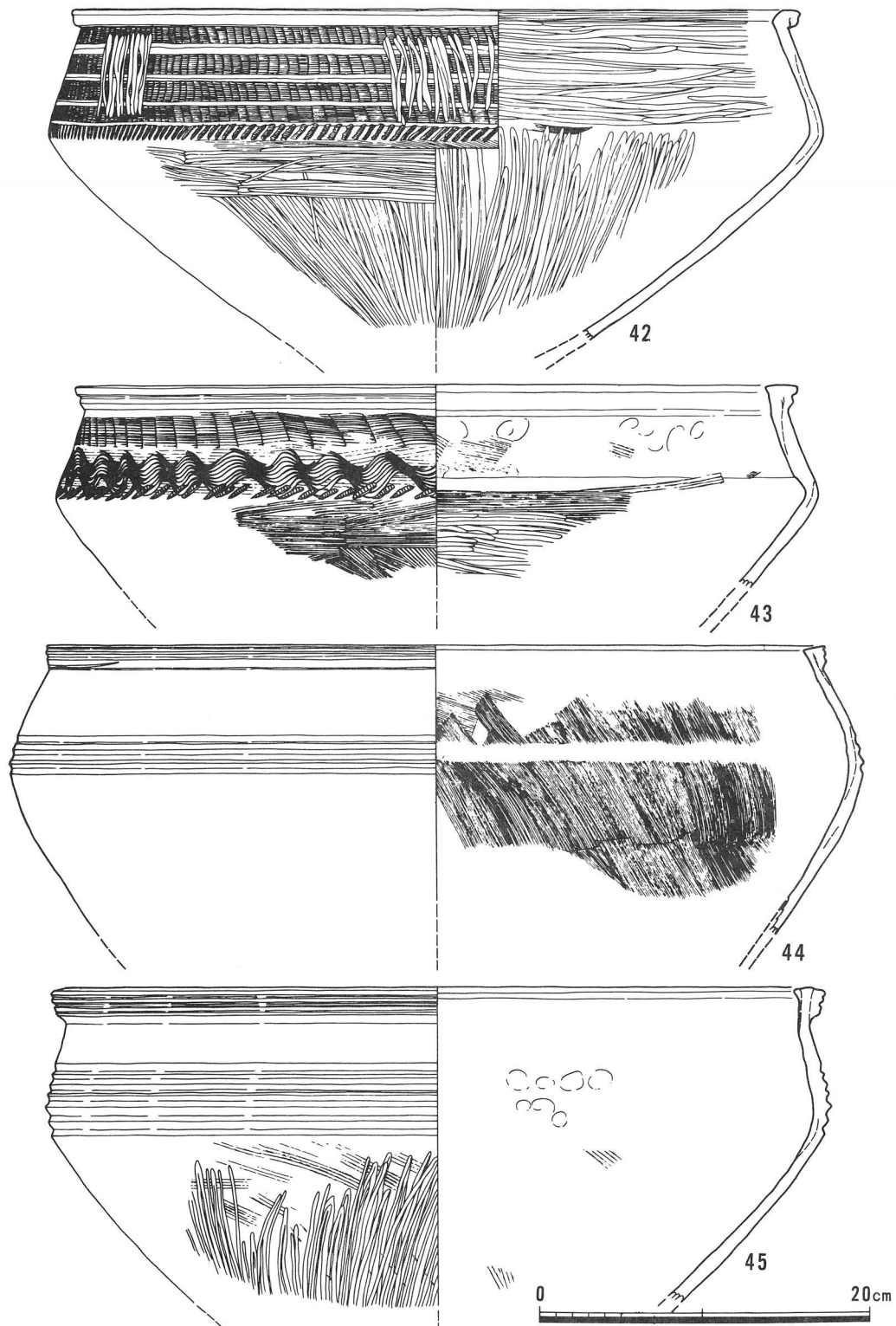
第33図 SD-204 第14層出土土器3 (S=1/4)

高杯 24・32・33は水平縁をもつものである。32は杯部内面に連弧状のミガキ、水平縁上面に斜格子状の暗文ミガキがみられる。水平縁高杯全体としては、杯部外面のケズリ手法が弱く器壁が厚くなり、口縁部の仕上げもあまく形態的に退化している。26～28は椀状の杯部を呈するものである。口縁部外面に凹線文を施し、口縁端部を外へややつまみだしている。29～31は口縁部が屈曲して立ちあがるものである。口縁部外面に凹線文を多用するものと、精緻なミガキによるものがある。34～41は脚である。脚部内面はケズリによる調整が支配的であるが、35の柱状脚の内面には棒状工具痕が認められ、脚部成形法として注目される。

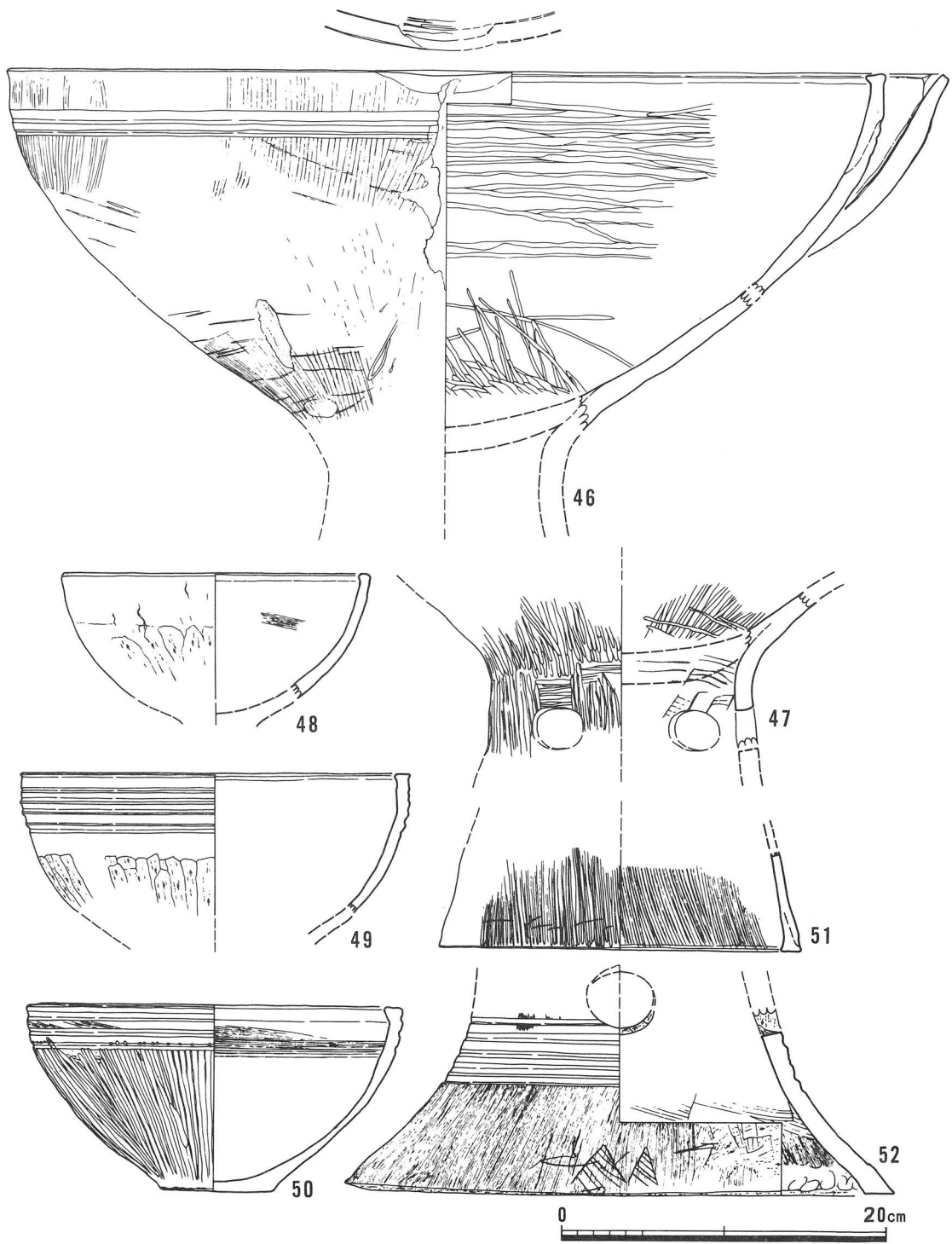
鉢 42～47は大形鉢である。42は内外面とも精緻なミガキで仕上げられている。体部上半外面には数段にわたって櫛描き簾状文等が施されており、櫛描き文様間及びその上の数ヶ所に、ミガキによる暗文が認められる。本土器の破片は第14・18層より出土している。43はハケ調整によって仕上げられた土器で、全体に粗雑な感じがする。櫛描き文の原体は調整に用いたハケ原体と近似している。44・45は体部屈曲部上位と、带状に作った口縁部外面に数条の凹線文を施す。44の



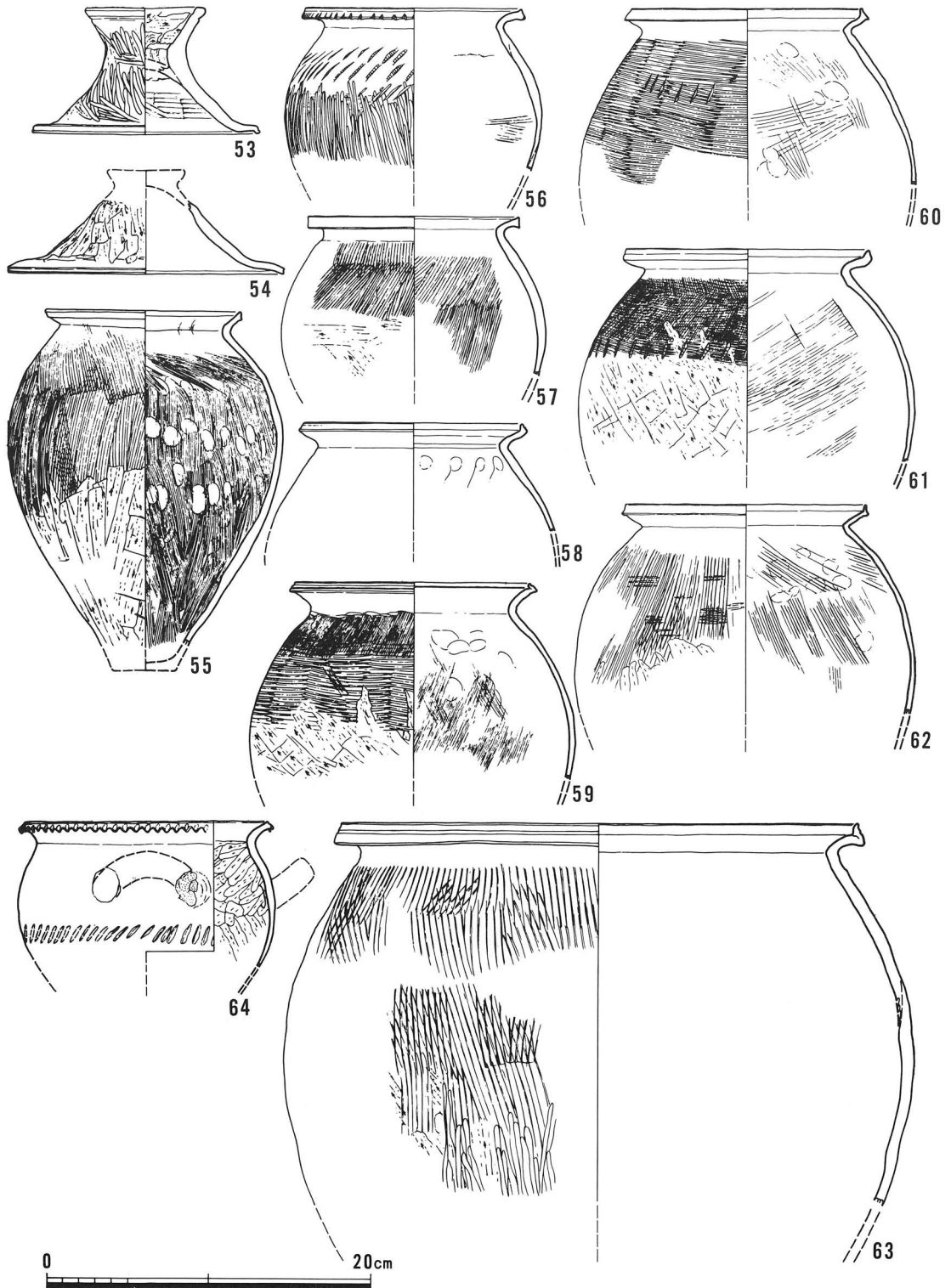
第34图 SD-204 第14层出土土器4 (S=1/4)



第35图 SD-204 第14层出土土器5 (S=1/4)



第36图 SD-204 第14層出土土器 6 (S = 1/4)



第37图 SD-204 第14层出土土器7 (S=1/4)

土器片は第14・18層から、45の土器片は第14・18層よりそれぞれ出土している。46・47は台付鉢である。46は体部外面が粗いハケ及びナデで、体部内面がナデ及びミガキで調整されている。体部上位には2条の凹線文が施されている。口縁部の一端には、粘土をつまみ出し内側をハケ工具で削って片口が作りだされている。この片口を作る際に縦に切裂が入ったらしく、補修痕が認められる。49・50は口縁部直下に凹線文を数条施している。

器台 51は台形土器とも考えられるが不明である。52は湾曲した裾端部をケズリによって補正している。体部中位には四個の円孔を穿ち、その下に凹線文を施している。裾部外面にはヘラ状工具によって左から、不明の文様→2個の鋸歯文→不明の文様が施されているが、何らかの意図のもとに右端の文様が削りとられている。弥生時代の文様の組み合わせを考える上で重要な資料と考えられる。

甕蓋 53は高杯の成形法を用いて作られている点で注目される。54は外面を丁寧削っている。

甕 55は体部外面を丁寧にハケ調整したのち、体部下半を削っている。非常に精緻な作りがなされており、8の壺と調整具及び仕上げのしかたの点で近似している。59～62では細条のタタキが観察される。59のように口縁部外面に凹線文を施すものもある。63は粗いタテハケののち体部下半外面を削っている。64は甕に横形把手がつく例として特異である。甕全体では59のように口縁部成形に際して折り返し手法を用いるものや、64のように体部内面上端まで削るもの、また56・60・61・64のように体部外面中位に列点文を施すものがあり注目される。

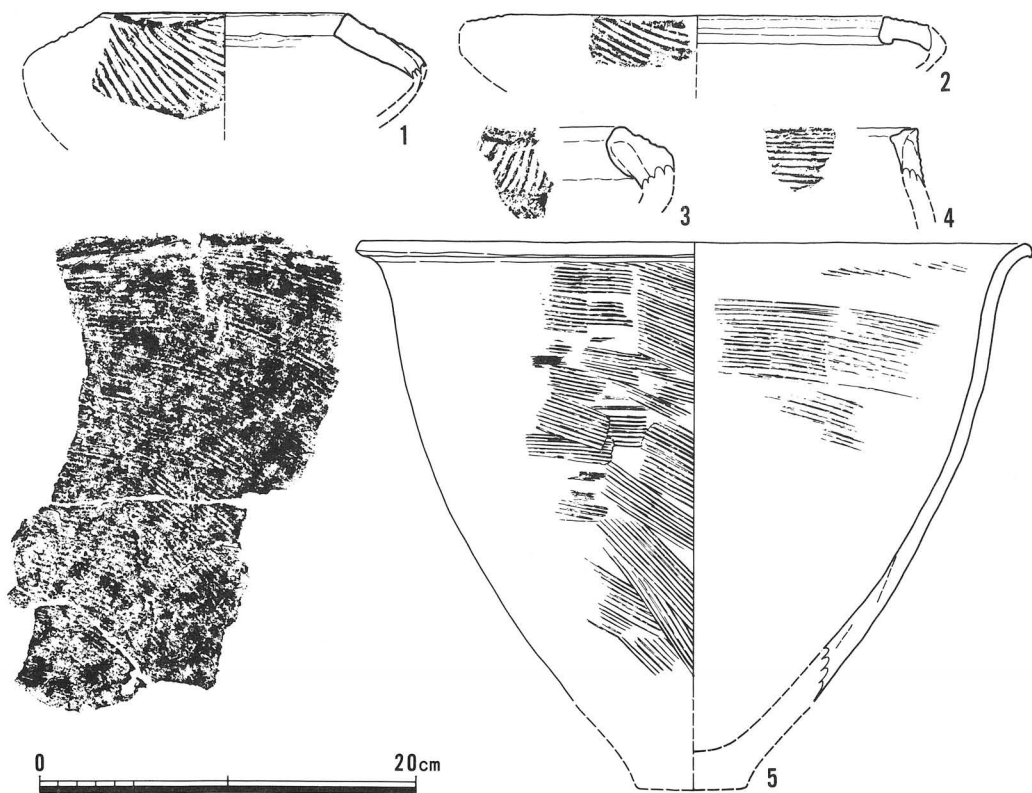
搬入土器（第38図、図版50-1～4）

搬入土器としては唐古・鍵遺跡内で製作された土器の胎土を有していないものを十数点確認しているが、生駒西麓産を除くと厳密な製作地をおさえていないのが現状である。しかし、土器の形態や手法等からある程度類推しえるものもあり、これらを中心に報告することとする。吉備地方のものとしては壺二点（第31図-4、第32図）、伊勢湾沿岸地方の土器として6点（第26図-1、第38図1～5）確認している。これらについては各遺構出土土器の項において説明しているのでここでは第38図の伊勢湾沿岸地方の土器を説明する。

厚口鉢 第38図1～3は厚口鉢である。体部下半は欠損しているが、体部上半は鋭く内側に屈曲し、水平ないし、やや斜め上方にのびる口縁部を有している。口縁形態はそれぞれ異なっており、1が最も整った口縁端面を有している。2、3は下方へ粘土を巻きこんでいる。3の口縁は丸みもち、かなり厚みを有する口縁部になっている。外面には斜め方向の条痕文がみられる。内面及び体部下半の外面はナデ調整である。

深鉢 4は口縁部の破片であるが、やや口が狭まる形態を有するものと考えられる。口縁端部は面を有するが、端部、内面ともに雑な仕上げである。外面には横位の条痕文がみられる。

甕 5は口径35.2cmを計る大形甕である。口縁部と体部は明瞭な屈曲部をもたず、ゆるやかに広がる。口縁部は面を有する。外面には斜位の条痕風の調整をおこなっているが、原体について



第38図 搬入土器拓影及び実測図 (S = ¼)

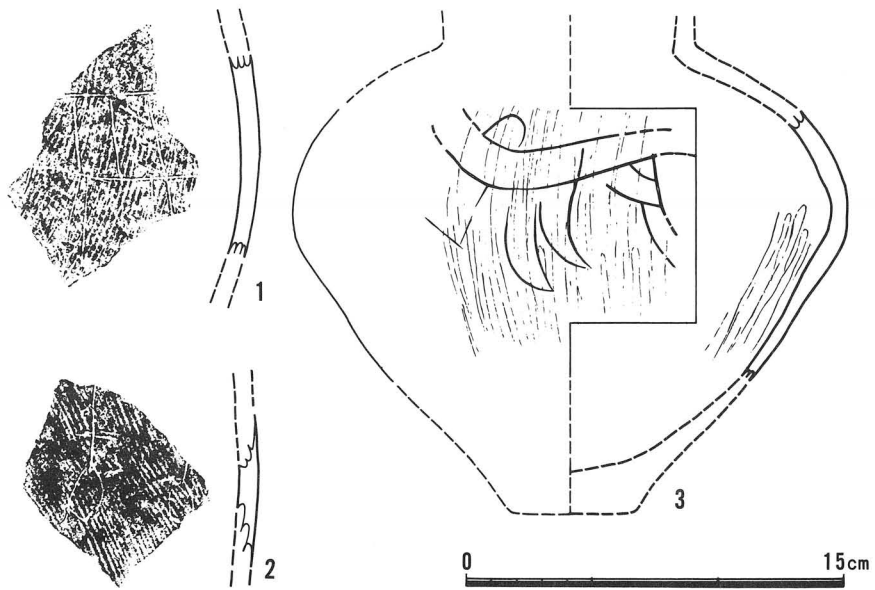
は明確にできない。最終的にナデ調整をおこなっていると思われる。内面にも同様の調整がみられる。

1はSD-203・中層、2はSD-204第14層出土であるが、全体に磨滅している為、混入品と考えられる。3はSD-203・上層出土である。4はSD-204第15層出土。5はSD-203の延長部分である第2トレンチで検出したSD-1203上層(第2層)出土である。

絵画土器(第39図-1~3)

1、2ともに短頸壺体部上半の破片と思われる。1はタタキの後、ハケ調整を、2はハケ調整をおこなっている。1には高床倉庫と思われる線刻がみられる。左端には棟持柱状の線刻が一部残っているが下端まで伸びていない。2は舟の櫂を表現していると思われるものである。棒状の先端に木ノ葉状のものを二つ描いている。1はSD-204第14層出土。2は中世大溝I出土である。

3は長頸壺の体部の破片である。内外面ともにミガキ調整を施している。線刻は体部上半部にみられ、かなり磨滅しているが龍と思われる絵画が描かれている。頭部及び尾部は欠落している。3は包含層出土である。



第39図 絵画土器 拓影及び実測図 (S = 1/3)



写真6 SK-102 中層出土
平鍬未成品 (S = 1/4)

(2). 木製品

木製品は溝や土坑から多く出土している。農耕具や生産・生活用具など多種にわたる木製品がある。これらの中で注目されるのは土坑から出土した農耕具の製品・未成品である。

平鍬 (図版46-1、47-1、第40図-1)

図版46-1は平鍬の未成品である。全長93cm、幅25.7cmを測る。両端に舟形隆起がつくり出されており、二個連結のものである。中央部には二つの並行する溝状の凹み(1つは明瞭な切断痕)があり平鍬の切断に備えているものと思われる。一側辺には未だ樹皮が残存している。SK-1103出土である。

第40図-1は全長39.2cm、幅20.1cmの平鍬の未成品である。土坑内で一度乾燥したと思われ、側面にヒビ割れがみられる。柄孔部は刃部より厚く、柄孔部と思

われる所には凹みが存在しているが意識的ものかどうか判断できない。調整はほとんどされていない。SK-102出土である。

図版47-1は全長33.4cm、幅21.8cm、身厚0.5～0.8cmの平鍬製品である。両側辺にくびれ部を有するもので、舟形隆起には柄孔が穿たれている。全体に丁寧に仕上げられているが、刃部は切断痕が残っている。しかしながら、身厚のことを考えれば使用可能な状態といえよう。SK-1102出土。

狭鍬（図版47-2）

全長34.7cm、幅10.9cmの狭鍬製品である。舟形隆起と反対側の面は全体にわたって焼かれている。焼成面側の方向にわずかなそりを有する。刃部、柄孔ともに使用の痕跡は明瞭でない。SK-1101出土である。

丸鍬（第40図-2、3、図版48-1、2）

第40図-2は全長26.9cm、幅31.1cmを測る丸鍬の未成品である。柄孔部と思われる所が一番厚くつくられており、2.2cmを測る。一側辺には切り離しによる切断痕がみられるが、仕上げ段階のものであろう。2と同様のものがもう1点、SK-102より重ねた状態で出土している。この丸鍬は土坑内で一度乾燥していたと思われる。

3も丸鍬の未成品で全長26.8cm、幅31.1cm、柄孔部の厚さ3.2cmを測る。これは1の前段階のものであろう。一側辺には切り離しの切断痕がみられる。また、身の両面ともに加工痕が明瞭に残っている。身自体はそりを有している。この未成品は前述1と同じ土坑であるSK-102より出土し、約10cm下で検出されたものである。同一個体である可能性を有している。

木庖丁（図版45-2、3）

2は全長16.5cm、3は12.9cmのもので、ともに平行四辺形に形どり、上部中央に2孔を穿っている。3は上部に細い溝状の切れ込みを入れ、二孔を穿っている。また、背部には若干の焼成面がみられる。2、3ともに刃部には使用によるものか、磨耗が所々に観察される。2はSK-1104、3はSD-204出土である。

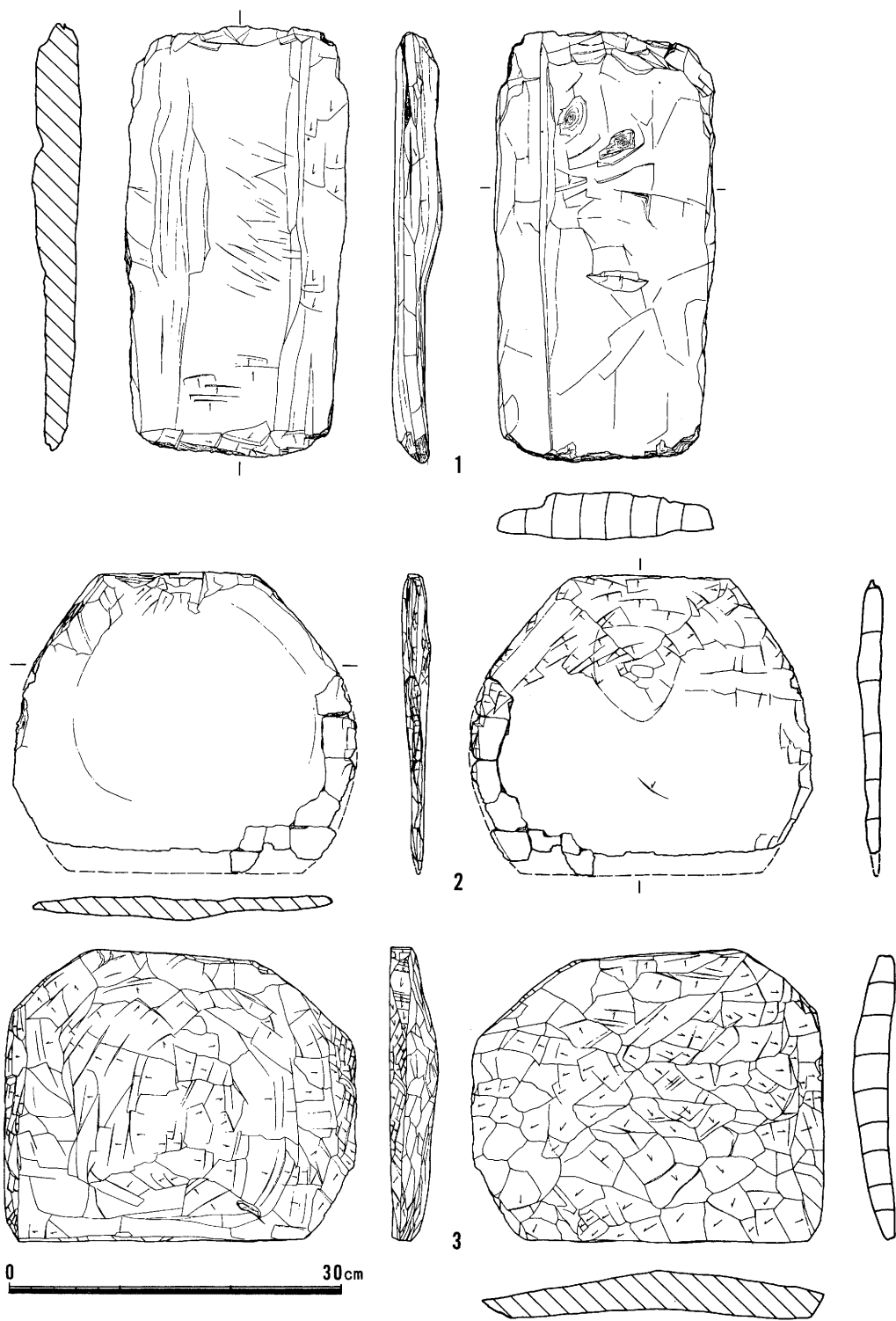
紡錘車（図版45-7）

長径6.8cm、厚さ1.1cmの木製円板に径1.0cmの円孔を穿ったものである。両面ともに木目が浮きでており、加工の痕跡は一部縁辺部にみられるのみである。SD-204第8層出土である。

(3). 石器

石庖丁（図版49-1～9）

1は外湾刃半月形の石庖丁の未成品である。全長12.15cm、幅6.6cm、厚さ1.1cmを測る。左側辺部は石の摂理方向に折損面がみられる。縁辺部には剝離調整が認められるが、まだ、研磨されていない。SD-203下層出土である。



第40図 SK-102 出土木製品 (S = 1/6)

2は直線刃半月形の石庖丁である。身幅は広いが、形態は整っている。刃部は片刃で、横方向の研磨痕がみられる。側辺部は縦方向の研磨痕が認められる。穿孔はドリルによるもので両面からおこなっている。SD-1203最上層より出土している。

3は外湾刃で杏仁形にちかい形態の未成品である。刃部及び一側辺部に欠損がみられる。ポジティブな面が一部残存しているが、刃部及び背部には小剥離痕がみられ、形態が整えられている。刃部には研磨が一面のみであるがおこなわれている。SD-204下層出土である。

9は大型石庖丁である。両刃で刃部は鋭い。背部には剥離面が残っている。A面は細かい研磨をおこなっているが、B面は粗い不定方向の研磨が認められる。SD-103最下層出土である。

扁平片刃石斧（図版49-10~13）

11はサヌカイト製である。刃部は丁寧な研磨で作りに出している。側辺部には剥離面がみられるが、全面にわたって研磨が施されている。12は石庖丁の転用、13は大型蛤刃石斧の転用と思われる。

柱状片刃石斧（図版49-14~16）

14は全長8cmの完存品である。刃部は鋭いが使用による擦痕が認められる。刃はやや斜め方向につけられている。SD-204の最下層より出土している。16は抉り部を有する柱状片刃石斧である。基部は石の摂理方向に一部欠損している。抉り部には欠損後の意味不明の敲打痕がみられる。

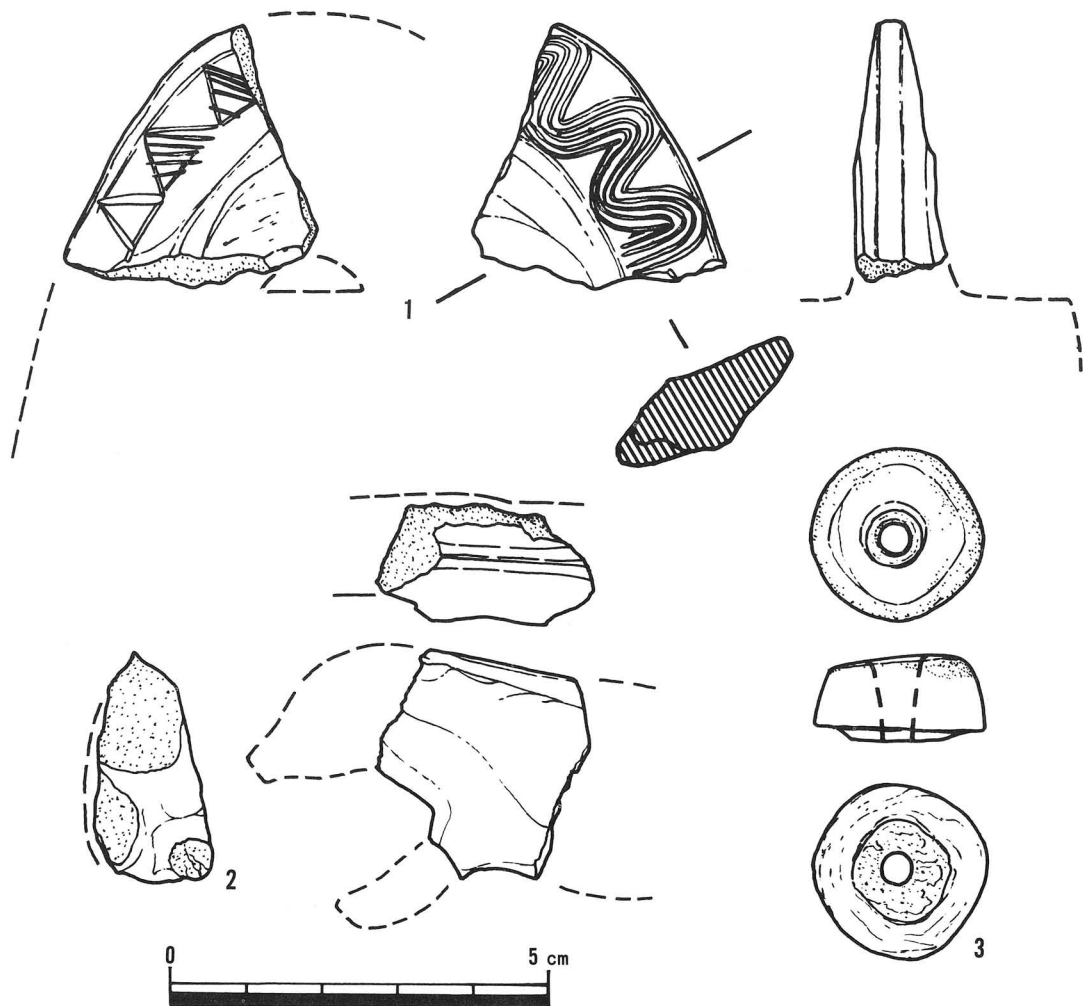
(4). 土製品・石製品

鐸形土製品（第41図-1）

本品はSD-204第14層・暗灰褐色粗砂層より多量の土器とともに出土したものである。これは鐸形土製品の鈕にあたる考えられる破片である。a、b両面ともに中央部にふくらみをもたせ、外縁部分を作り出していることや施文方法など銅鐸の鈕の形態的特徴をよく捉えている。a面では外縁部にヘラで並行する二線を引き、その間に鋸歯文を配している。鋸歯文は現在三つ残っているが、下端の一つは鋸歯の内部を充填せず、山形文となっている。b面は幅5.5cm（5条）の櫛による波状文を施している。鈕下端で波状文は終わっている。これらa、b両面の施文から本品は舞部から鈕に至る破片であろう。現高3.5cm、厚さ1.1cmを測る。外縁部にはミガキを施す丁寧な仕上げをおこなっており、鐸形土製品、としては大形品の部類に属するであろう。色調は暗褐色を呈す。

イノシシ形土製品（第41図-2）

本遺物も前述鐸形土製品同様、同一層位、同一地区より出土したものである。本土製品は残存している部分が少なく、どのようなものを表現しているのか類推するのが難しい。しかし、本品の下端に足状の突起が二つ（一つは欠損）あることや上端には粘土をつまみ出し、たて髪状にしていることなど動物の特徴を表現しているように思われる。このようなたて髪表現からイノ



第41図 SD-204 出土土製品・石製品実測図 (S=1/2)

シシを模した可能性が高い。現長 2.8cm、厚さ 1.6cmを測る、色調は淡褐色を呈す。

投弾 (図版50-20・21)

20は紡錘形を呈するもので長軸 4.5cm、短軸 3cm前後のものである。砂粒を混えない粘土でつくられており、表面は丁寧にナデている。表面半分ぐらいに黒斑がみられる。重さ34gを量る。SD-204の最下層より出土している。

21は径 3cm程の球形の土製品である。20に比べ、砂粒を混在している。表面はやや磨滅しているが、ナデ調整がみられる。やや粗雑品である。重さ27gを量る。用途は不明であるが、投弾の可能性はある。SD-204中層出土である。

硬玉製玉 (第41図-3)

SD-204第14層・暗灰褐色粗砂層より土器片とともに出土したものである。本品は径 2.3cm

の整っていない円形で中央に一孔を穿ち、断面は台形を呈するものである。下面には擦り切りと思われる擦痕が下面端部より5mmのところまで及んでいる。中央部付近は分割時の折れ面が観察できるが、その折れ面の上をさらに磨いて面を整えている。中央の孔は上面より穿っている。このようなことから本品は径2.5cm程の管玉状の玉を分割した一つである可能性が高い。この分割以前の類似の玉については硬玉製の管玉状のものとして森本六爾が報告している。

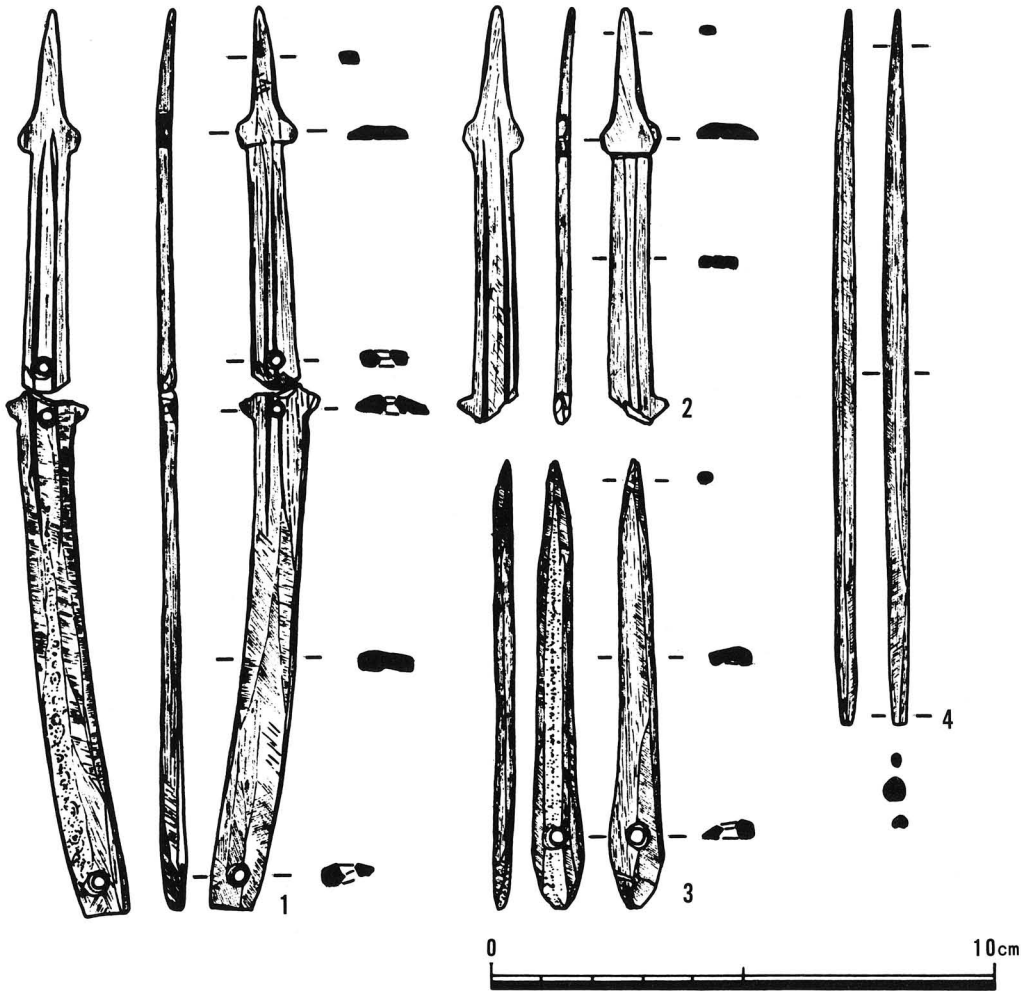
注③森本六爾「大和に於ける史前の遺跡(一)」

注③

『考古学雑誌』第14卷第11号 大正13年

(5). 骨製品・獣骨

骨製品は5点、他に骨、鹿角の一部に加工を施したもの、あるいは動物解体に伴う傷を有する獣骨などがある。獣骨については未鑑定品が多いが、カエル、ネズミ、タヌキ(図版51-5、7)、



第42図 骨製品実測図 (S = 2/3)

イヌ（同－6）などの小動物からイノシシ（同1～4、8・9）の大形動物におよんでいる。

用途不明骨製品（第42図－1、2・巻頭図版）

1は中央部で折損しているが、ゆるやかな湾曲を有する板状の製品である。両側辺には各々2ヵ所に山形状の突出部をつくり出している。先端は尖りぎみで、ややそりを有している。下端はややねじれているが、骨自身のそりである。二つの山形状の突出部の間には二条の刻線がみられ表と裏では線の太さや間隔が異なっている。現在3つの小孔がみられるが、下端部のもは本来のものと思われるが、他の二孔については折損後の孔と考えられる。折れ面は両方とも磨かれているが、表から裏面に力が加わって折れたものと考えられる。折れ面の二孔は補修孔、あるいは装身具としての転用も考えられるであろう。先端部の裏面には使用痕と考えられる磨耗が認められる。

2も1と同様の骨製品で形態、調整などすべて類似している。これは中央部で欠損しているが折れ面の観察からは1と同じ折れ方を呈している。このようなことから、本骨製品は先端を使用しながらも製品中央部に力が加わるような使用方法がとられたものと考えられる。1の全長18.1cm、最大幅1.1cm、厚さ0.4cmを測る。SD－203出土である。

骨針・ヤス状骨製品（第42図－3、4）

3は全長8.9cm、幅1.05cm、厚さ0.35cmを測る骨針である。骨を縦に裁断した後、縁辺部を加工、研磨したものである。下端には径3mmの小孔が穿たれている。先端部には刀子痕が残っている。この先端部には焼け焦げたような痕跡がみられる。SD－202出土。

4は全長14.25cm、最大幅0.5cmを測るヤス状の骨製品である。全体に丁寧な研磨がおこなわれている。断面は円形にちかい。SK－105出土。

ト骨（図版51－9）

イノシシの肩甲骨をト骨としてもちいたものである。肩甲骨外側面の肩甲棘を加工し、安定するようにしている。焼灼痕は棘上窩と棘下窩にみられるが、破損が大きく焼灼痕をすべておさえることはできない。SD－204下層出土。

穿孔を有するイノシシ下顎骨（図版51－3・4）

3、4ともにイノシシの下顎骨に二孔を穿ったものである。孔の大きさは3では径約3.5cm、4では約2～3cmのものである。3、4ともにM₃を萌出した段階のものである。3はSD－204下層、4はSD－203最下層出土である。

4. まとめ

第19次調査で検出した遺構、遺物はこれまでの調査より量的にも多く、これらを整理し、分析するには長期間を有する。したがって現段階での遺跡への理解や問題点、また、特に注目される遺構・遺物を中心にまとめておきたい。

(1). 遺構

1. 本調査地が南東から広がる微高地に立地しながらも端部近くであることが判明し、微高地を囲むように弥生時代の大溝（環濠）が掘削されていたようである。微高地状には土坑群が形成されることになる。

弥生前期の遺構は大溝と土坑であるが、SD-203 (1203) の大溝は第I様式～第II様式期の環濠になるとと思われる。この溝の検出によって前期段階の西地区（第8・11、14次調査地）の北限がおさえられ、第16次調査時に検出した前期の溝が南限であると思われることから前期段階の西地区は南北200mぐらいの範囲になると考えられる。この西地区内に存在する遺構は溝より古いものもあり、前期の当初より環濠がめぐらされていたとは考えられない。

前期の土坑は3基検出したが、各々木製農耕具の製品あるいは未成品を含んでおり、また、それらの土坑の立地から、土坑は相互に関係を有していたと考えられ、木製農耕具の管理を考える上で重要になろう。

2. 弥生中期においては第1トレンチ西端で検出したSD-204の大溝がムラを囲む一番内側の溝であることが判明した。さらにこの溝から分岐し、ムラ内部に向かう溝も検出できたことは大きな成果となった。これによってムラは環濠に囲まれながらも、さらにムラ内部を区画する溝も有していたことが判明した。区画された内部の差は調査範囲内では認識できていない。

今回の調査でもSD-204における第IV様式期の砂層堆積を確認しえたことは普遍的にこの時期の砂層堆積が存在することを物語っている。

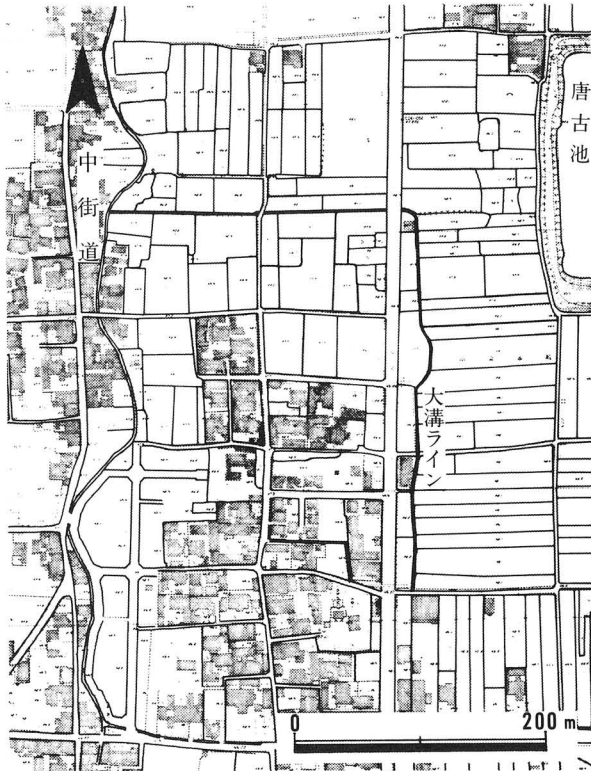
3. 弥生中期の土坑において注目されることは井戸と考えられるものが多いことである。SK-101では簡易な井戸枠状の施設がみられ、本遺跡ではこのような方法を用いたものは未検出であった。

さらに目をみはるものとしてSX-202の集水施設がある。これは土器を二段に重ね、井戸枠とし、自然河道内の湧水を集めようとしたものである。このようなものは第16次、第17次調査で弥生前期のものを検出しているが、これらは壺の下胴部のみを用いた簡易な施設である。それに比較して今回検出したものは集水施設としては工夫を凝らしたもので、類例のない資料となろう。

さらにこの資料で注意すべき点は壺と甕の所属時期である。これらはともに口径50cm前後にもなる大形品で、もともと完形であったものを転用して本土坑に設置したものである。下段の壺は第IV様式、上段の甕は従来第II様式に比定されていた典型的な大和型甕である。このような出土状況より、この甕が第IV様式まで残存することは明らかであろう。土器編年上、有効な一資料を

追加することとなった。

4. 古墳時代前期の壺棺墓を今回検出したが、本遺跡においては数少ない墓資料を一つ加えることとなった。古墳時代前期は唐古・鍵遺跡ではあまり明らかにされていなかったが、近年の調査からすると遺跡の西側に一つの偏りがあるようで、纏向二式は不明瞭な点があるが、纏向三～四式にかけては確実に集落を営んでいる。



第43図 中世館跡と水田の区画

この壺棺内にガラス小玉や管玉が副葬されていたことは大和において数少ない一例となろう。

5. 中世における大溝二条は館の環濠と内部の区画溝の二つになると思われるが、館内部の状況が徐々に明らかになってきた。また、区画溝は現在の畑地を囲むようにめぐっており、畑地が全く意味がないものでなく、建物跡が想定できるようになってきた。

現在の水田の地割ラインを見るならば、館の想定内部と外部では全く水田の区画のしかたが異なっておりこの地割ラインから館の復元にある程度せまることができるようになってきた。

(2). 遺物

1. 遺物では土器がその大半を占めているわけであるが、これらの中で特に注目されるのは土器編年と搬入土器の問題である。大溝や土坑から多くの完形土器群が検出され、遺構や堆積土層の形成、土器廃棄の状態から一括性の強いものが多い。

それらの中でSD-1203 第4層出土の土器群は注目されよう。この土器群は第I様式から第II様式の変遷をとらえる上で重要な資料になる。壺などに施された文様面から言えば、ヘラ描沈線文が消滅し、無文様化傾向を示す。これとともに若干の櫛描文様の土器が伴い始めている。この時期に東海地方の搬入土器が流入しているようである。

中期の資料においてはSK-105 上層出土土器が凹線文を伴う初期の資料である。また、SD-204 第8層・第14層出土土器は凹線文盛行期から消滅期の資料として重要な位置づけがなされるものである。また、このSD-204 第14層からは吉備地方の系統をひくと思われる土器も多

く検出しており、第Ⅳ様式頃からこの地方の土器が流入する傾向がみられることは注目されるであろう。

2. 木製品においては農耕具の未成品があげられる。前期の資料では平鍬の二連結の未成品、未使用と思われる平鍬製品がある。また、中期では丸鍬の未成品で、連結を切り離れたものからさらに加工を進めた未成品があり、平鍬、丸鍬ともに農耕具の製作過程を知る上で重要である。

3. 今回の調査で、類例の少ない遺物として鐸形土製品やイノシシを形どったと思われる土製品、硬玉製品、ト骨などがある。

鐸形土製品は本遺跡で三例目の資料である。所属時期は各々、異なっている為、一時期の保有個数は明らかにしえない。第13次調査・第19次調査出土の2例は文様も描き、丁寧なつくりのものである。

イノシシ形土製品と思われるものは、小片でその形態を明らかにしえないが、動物を表現していることは確実であろう。弥生時代に動物を表現しているものは鶏などがあるが類例が少なく、人間と動物の関係をj知る上で貴重な資料となろう。

硬玉製品は本遺跡で二例目、ト骨は初めての出土である。

以上、まとめてきたように第19次の発掘調査は従来の調査より遺構・遺物ともに豊富であり、新たな知見や認識が生まれたことは成果であった。しかし、唐古・鍵遺跡は調査毎に新しい知見が得られる反面、小規模開発によるなし崩し的な遺跡破壊に立たされている現状も認識せざるをえない。今後、遺跡全体を見すえた遺跡保護が望まれる。

Ⅳ．第16・18・19次調査出土石器石材について

石器の石材

石器に使用されている石材の岩石種と石材の採取推定地について述べる。

I．岩石種

石材の岩石種は斑斕岩、流紋岩、黒雲母流紋岩、輝石安山岩、玄武岩、石英閃緑岩質砂岩、流紋岩質溶結凝灰岩、玄武岩質凝灰岩、玄武岩質凝灰岩質片岩A、玄武岩質凝灰岩質片岩B、玄武岩質凝灰岩質片岩C、泥質片岩A、泥質片岩B、点紋片岩、泥質ホルンフェルスである。各岩石種について述べる。

斑斕岩：投弾（16次－SD－101、図版15－14）

色は緑灰色である。造岩鉱物は長石、角閃石、輝石である。長石は白色で、粒径が1.5mm～2.5mmである。量は多い。角閃石は暗緑色で、粒径が1mm～2mmである。量は僅かである。輝石は暗緑色～黒色で、粒径が1.5mm～3mmである。量は中程度である。

流紋岩：石庖丁石材（16次－SD－101、図版52－8）

割り石である。色は灰白色で、発泡孔がある。発泡孔は孔径が0.5mm～2mmである。造岩鉱物は実体鏡下（倍率30倍）で認められ、石英、長石である。石英は無色透明で、粒径が細粒である。量が僅かである。長石は無色透明で、自形である。粒径は中粒で、量が僅かである。石基は灰白色で、やや斑璃質で固い。

黒雲母流紋岩：石庖丁（16次－SD－106、図版16－1）

石庖丁石材（16次－SD－101黒粘、図版52－9）

色は灰色～灰白色である。造岩鉱物は実体鏡下（倍率30倍）で認められるものが多く、石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明で、粒径が細粒である。量はごく僅かである。長石は無色透明で、自形である。粒径は細粒で、量が中程度である。黒雲母は黒色で、六角形板状である。粒径は1mmに達するものもあり、量はごく僅かである。

玄武岩：太型蛤刃石斧（18次－1トレ盛土層、図版21－5）

石斧（16次－SX－102黒粘II、図版52－6）

色は暗緑色である。造岩鉱物は実体鏡下（倍率30倍）で認められ、長石、輝石である。長石は無色透明針状で、粒径が細粒である。量は非常に多い。輝石は黒色で自形である。粒径は細粒～中粒で、量が僅かである。火山ガラス片が固まったような部分が僅かに見られる。石基は暗緑色ややガラス質で固い。

石英閃緑岩質砂岩：棒状石製品（16次－SD－101、図版52－10）

色は灰色である。構成砂粒は石英、長石、黒雲母、角閃石である。石英は無色透明で、角礫状である。粒径は中粒で、量が多い。長石は白色で、角礫状である。粒径は中粒で、量が中程度である。黒雲母は黒色板状である。粒径は細粒は細粒で、量がごく僅かである。角閃石は黒色で、

角礫状である。粒径は細粒～中粒で、量が僅かである。

流紋岩質溶結凝灰岩：自然石（16次－SD－103、図版52－5）

色は灰色で、円礫の割れたものである。溶結構造が認められる。構成鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明で、自形である。粒径は1mm～3mmで、量が中程度である。長石は無色透明で、自形である。粒径は1mm～2mmで、量が中程度である。黒雲母は黒色板状である。粒径は1mm～3mmで、量が僅かである。基質は灰色、緻密で固い。

玄武岩質凝灰岩：石庖丁（第19次－中世大溝Ⅰ）

色は暗緑色で、濃緑色の粒状斑点が点在する。片状構造が僅かに見られる。造岩鉱物は実体鏡下（倍率30倍）で認められ、長石、輝石である。長石は白色透明で、自形である。粒径は粗粒で量が多い。輝石は黒色である場合、変質して白色化する場合がある。粒径は粗粒で、量が多い。基質は淡緑色、玻璃質で固い。

玄武岩質凝灰岩質片岩A：扁平片刃石斧（16次－SD－105、図版52－2）

色は灰緑色であるが、緑泥石が集合する部分は緑色である。片状構造がある。構成鉱物は実体鏡下（倍率30倍）で認められ、長石、輝石、黄鉄鉱である。長石は無色透明で、粒径が中粒である。量は中程度である。輝石は黒色で、粒径が中粒である。量は中程度である。周囲が灰白色化している場合が多い。黄鉄鉱は金銅色で、粒状である。粒径は細粒～中粒である。部分的に集合又は散在する。基質は淡緑色、玻璃質で固い。

玄武岩質凝灰岩質片岩B：石庖丁未成品（16次－SD－106、図版52－7）

色は暗緑色である。片状構造が僅かに認められ、ペラペラはがれる。構成鉱物は実体鏡下（倍率30倍）で認められ、長石、輝石である。長石は無色透明である。粒径は中粒で、量が中程度である。輝石は黒色粒状である。粒径は細粒で、量が僅かである。輝石の周囲は変質して白色化する場合がある。基質は淡緑色玻璃質で固い。

玄武岩質凝灰岩質片岩C：磨製石鎌（16次－SX－102 黒粘Ⅱ、図版52－3）

色は淡緑色である。片状構造が顕著で、薄くはがれる。構成鉱物は実体鏡下（倍率30倍）で認められ、長石である。長石は無色透明である。粒径は微粒で、量が僅かである。基質は淡緑色で緻密で固い。

泥質片岩A：大形石庖丁（16次－SD－101、図版15－24）

色は暗灰色である。片状構造が顕著である。石英粒が僅かに認められ、ややひき伸ばされたようなレンズ状をなす。

泥質片岩B：石庖丁（16次－SX－102 黒粘Ⅱ、図版52－4）

灰色部と黒色部があり、縞模様をなす、片状構造が顕著である。実体鏡下（倍率30倍）では、灰色部に石英粒が多く、黒色部に石墨の微粒が認められる。

点紋片岩：砥石（16次－SX－102 黒粘Ⅱ、図版52－1）

色は淡灰緑色である。片状構造がある。構成鉱物は長石、絹雲母である。長石は白色で、点在

する。粒径は 0.5mm～1mm で、量が非常に多い。絹雲母は無色透明板状である。粒径は細粒で、量は僅かである。基質は淡灰緑色、緻密で固い。

泥質ホルンフェルス：棒状石製品（19次一中世大溝Ⅰ、図版52-11）

石棒の先端部の窪みには淡赤褐色の辰砂粒が認められる。色は暗灰色である。構成鉱物は実体鏡下（倍率30倍）で認められ、石英である。石英粒は細粒が多い。

II. 石材の推定される採取地

各岩石の採取されたと推定される地域を岩石種毎に推定する。方法としては、石材の岩相と同質の岩石が分布する唐古から近距離の地点を採取地とする。

斑粨岩は加工品で石材の原形を推測しがたいが、岩質的には三輪山から初瀬一帯にかけて広く分布する斑粨岩の岩相の一部に類似することから、初瀬川の川原石を採取した可能性は大きい。

流紋岩・黒雲母流紋岩は黒雲母の有無による差であり、岩相的には大差がないと推定される。板状節理が顕著で、流理があり、造岩鉱物は細粒であることから、耳成山に分布する流紋岩の岩相の一部に相当する。原石の形が不明であるため、耳成山付近のいずれかで採取されたと推定される。

玄武岩・玄武岩質凝灰岩・玄武岩質凝灰岩質片岩・泥質片岩は紀ノ川流域の橋本市付近から吉野郡吉野町付近にかけての川原石に酷似する岩石が見られる。

点紋片岩は紀ノ川流域の三波川帯北部に分布する点紋帯の岩相の一部に相当する。分布は和歌山市に広く、五条から上市にかけてごく僅かに分布する。川原石を採取したと推定されることから、和歌山市付近が採取地と推定される。

以上のように、石材の採取は初瀬川、耳成山付近、紀ノ川と道具の用途を考慮して、岩石の性質を石材に生かして、各地で採取したと推定される。

唐古・鍵遺跡
図 版



a. 遺跡空中写真（南西から）



b. 調査区全景（南から）



a. 中世素掘溝（北から）



b. 中世大溝（北から）



a. SD-101 (西から)



b. SD-101 木製品出土状況



a. S D-102 (東から)



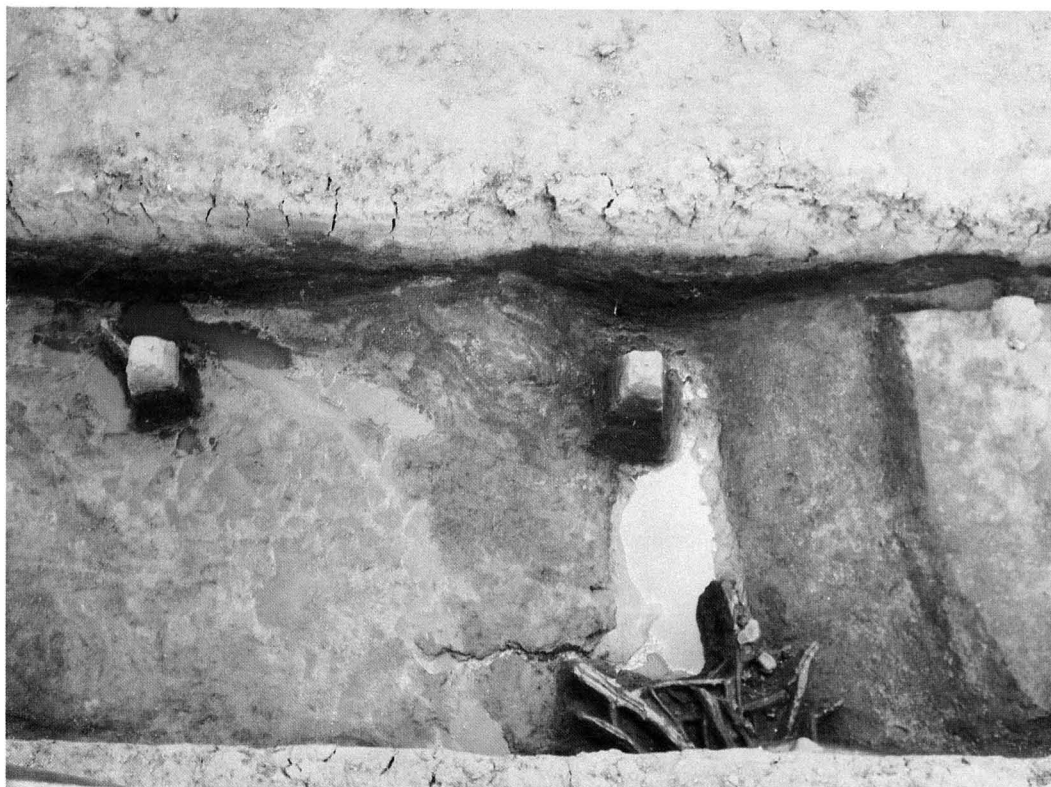
b. S D-102 手斧出土状況



a. S D-103 (西から)



b. S D-103 木製品出土状況



a. S D-104、105 (西から)



b. S D-105 流紋岩石材出土状況



a. S D-106、S X-102 (北から)



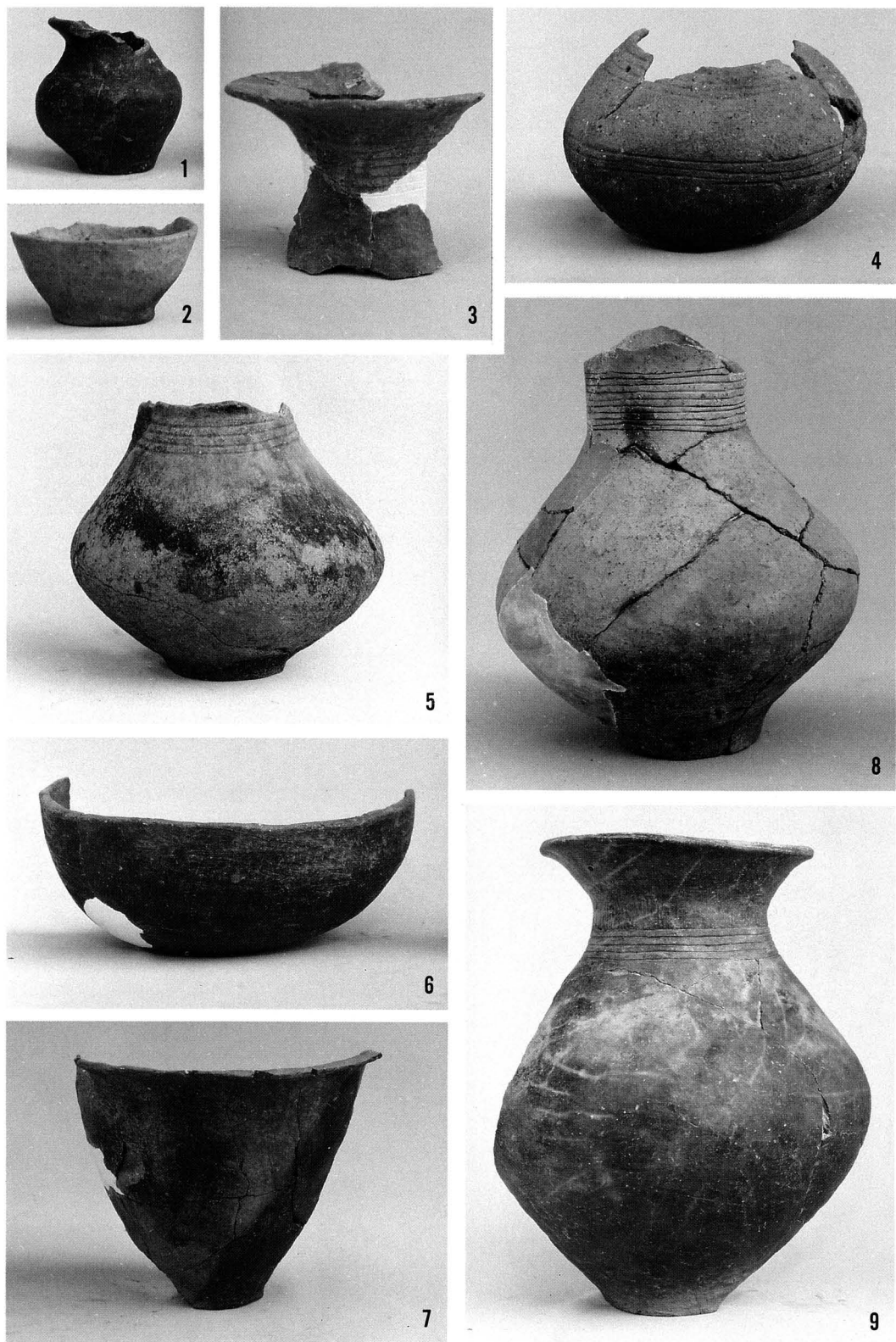
b. S X-102 遺物出土状況



a. SX-103 検出状況

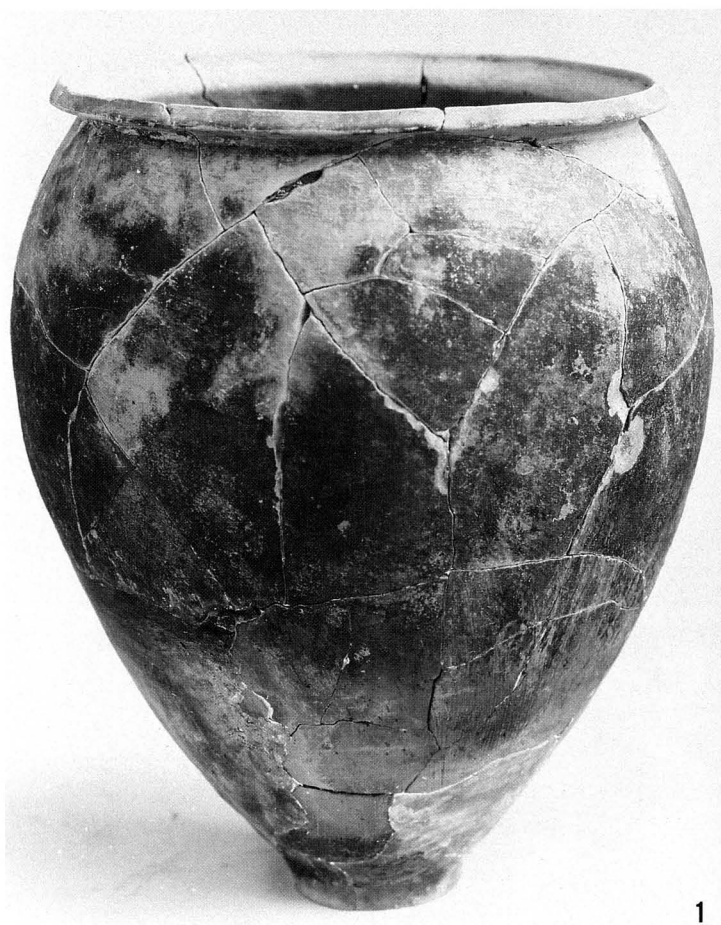


b. SX-101 遺物出土状況



SX-102 出土土器 (1/2)

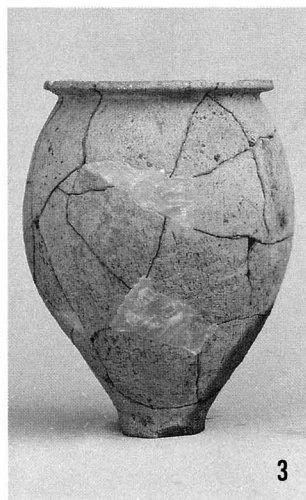
1, 4~7, 9 - 黒粘Ⅲ、2, 3, 8 - 黒粘Ⅱ



1



2

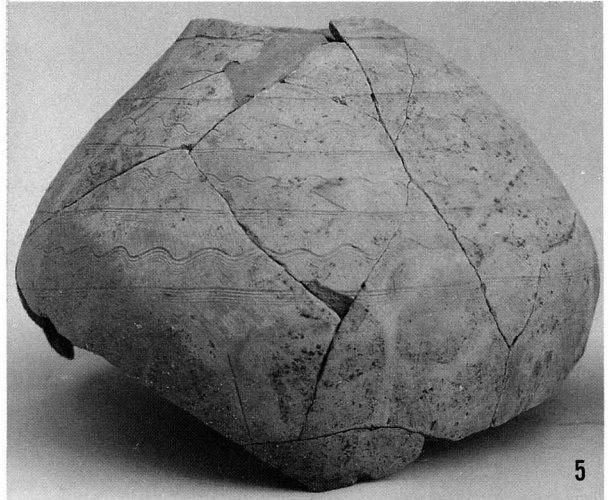
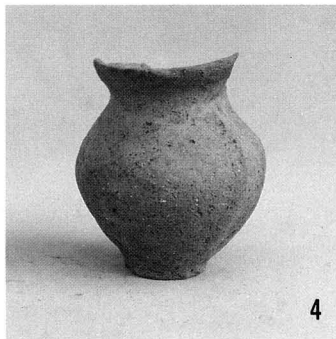


3



4

1 ~ 3 - S D - 101 出土土器 (1/3) 4 - S X - 103 出土土器



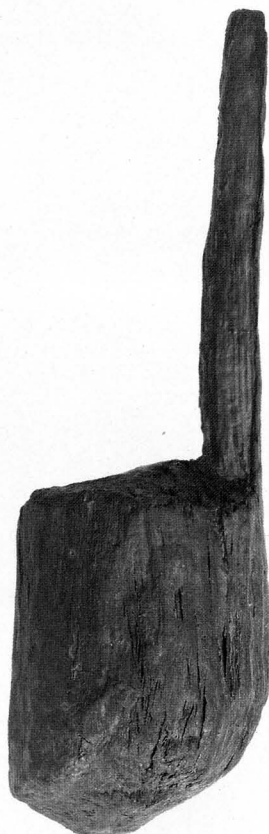
S D - 101 出土土器 (1/3)



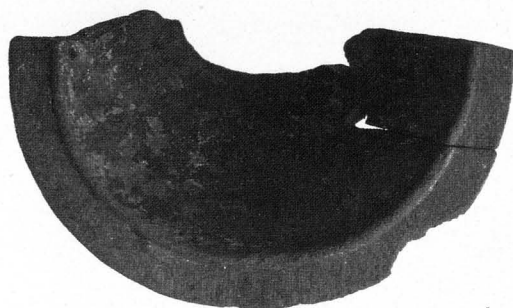
1



2



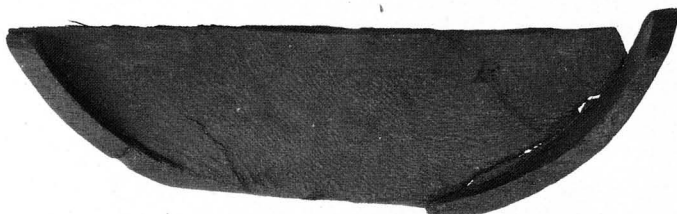
3



4 - a



4 - b



5



6

1 ~ 3 - 杓子、4 - 高杯、5 - 容器、6 - 横槌 (1/3)

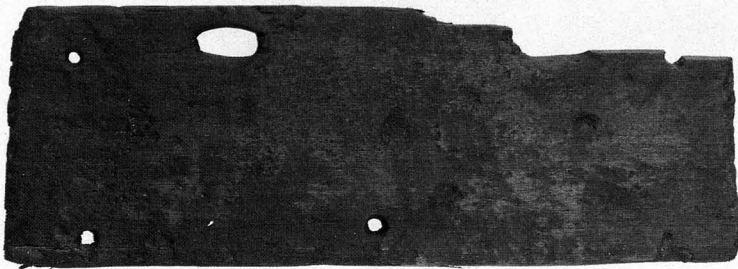
1 ~ 4 - SX-102出土、5 - SD-105出土、6 - SD-101出土



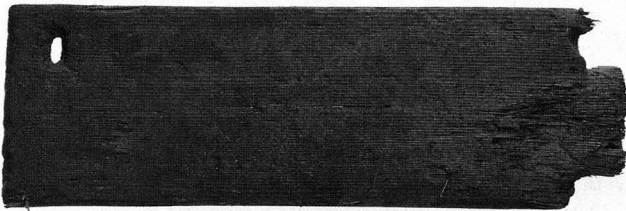
1



2



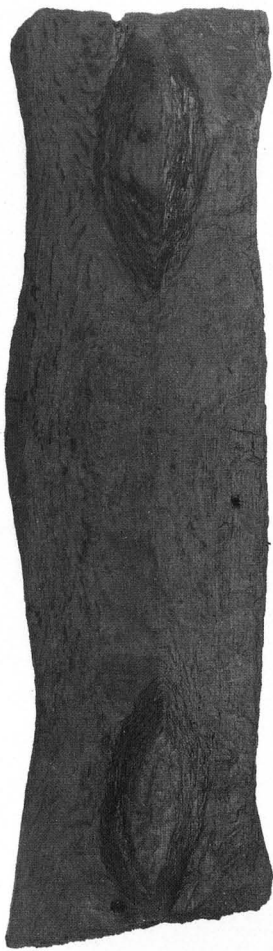
3



4

1 - 手斧柄、2 - 柄把部、3, 4 - 建築材 ($\frac{1}{3}$)

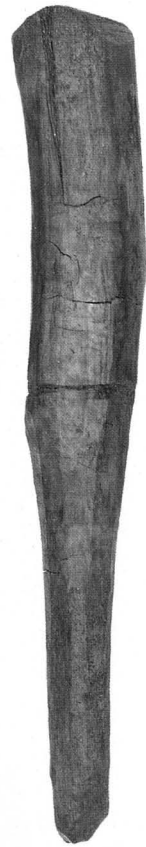
1 - S D - 101出土、2 - S D - 102出土、3, 4 - S D - 103出土



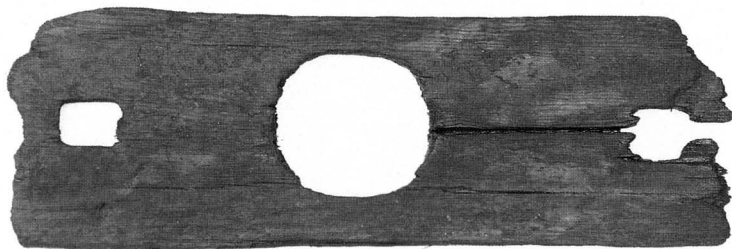
1



2

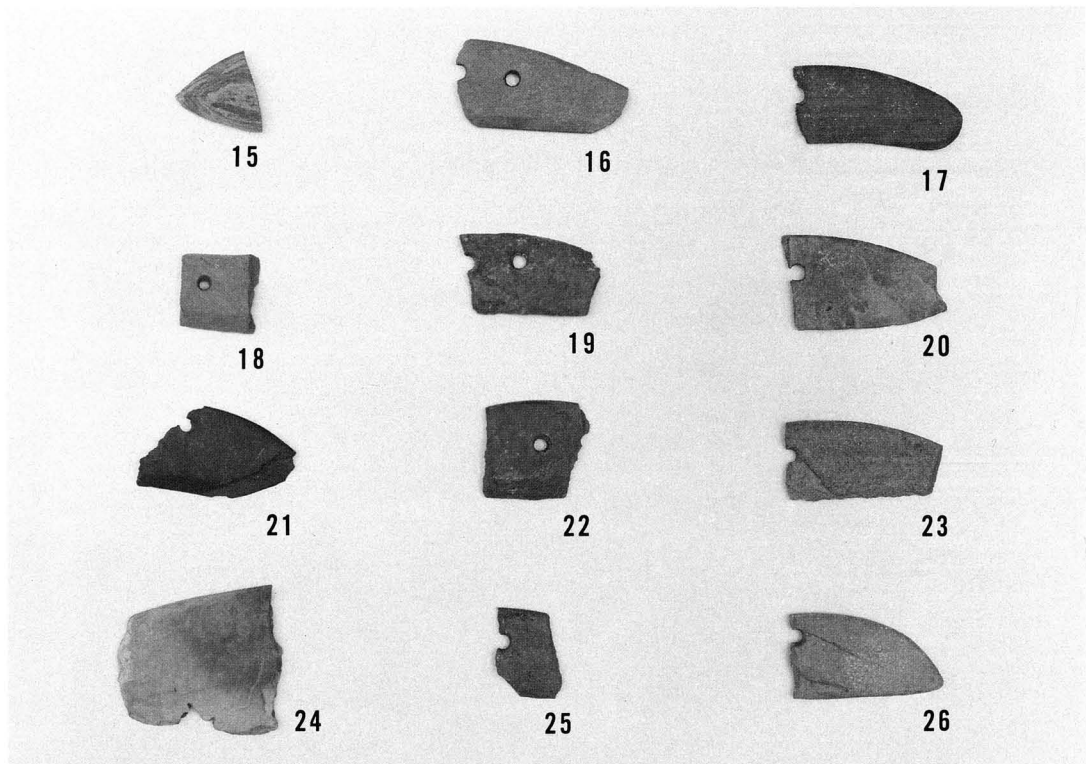
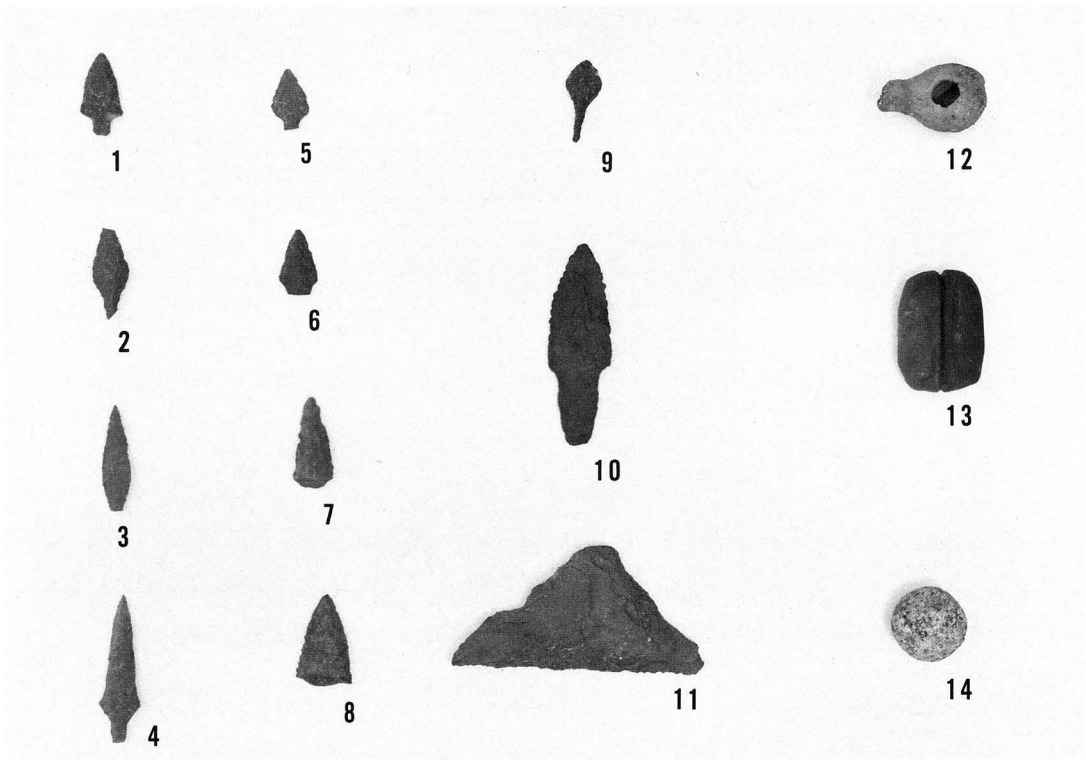


3

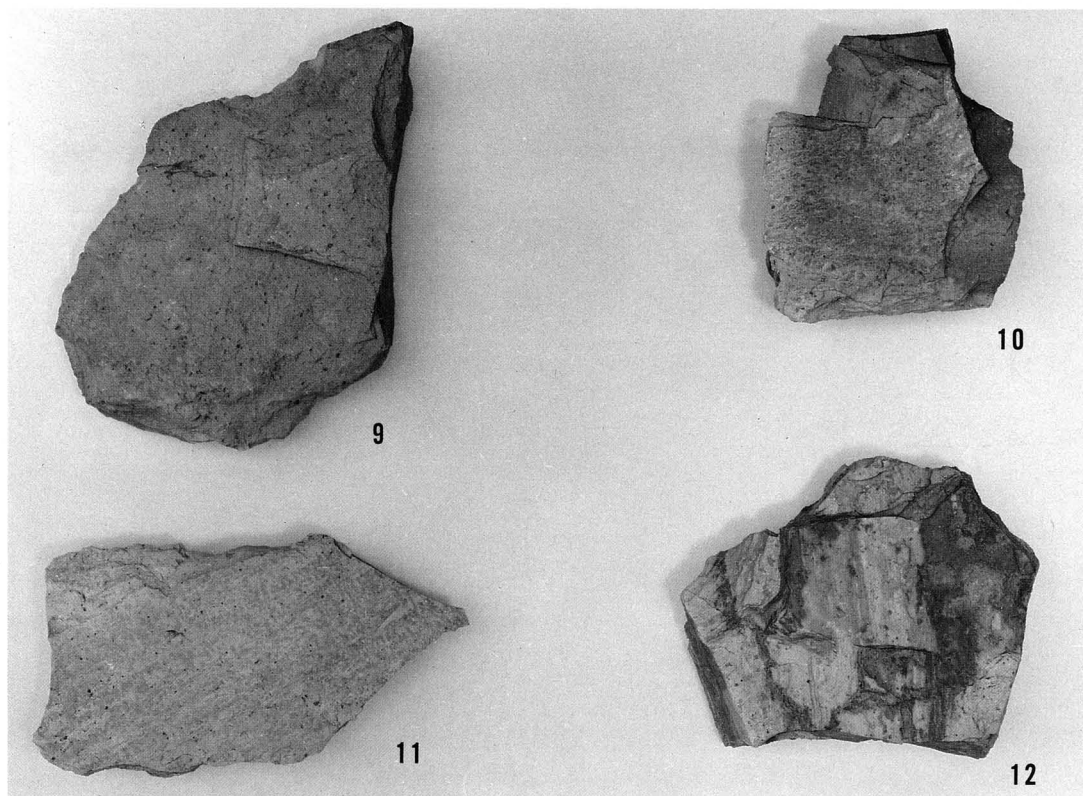
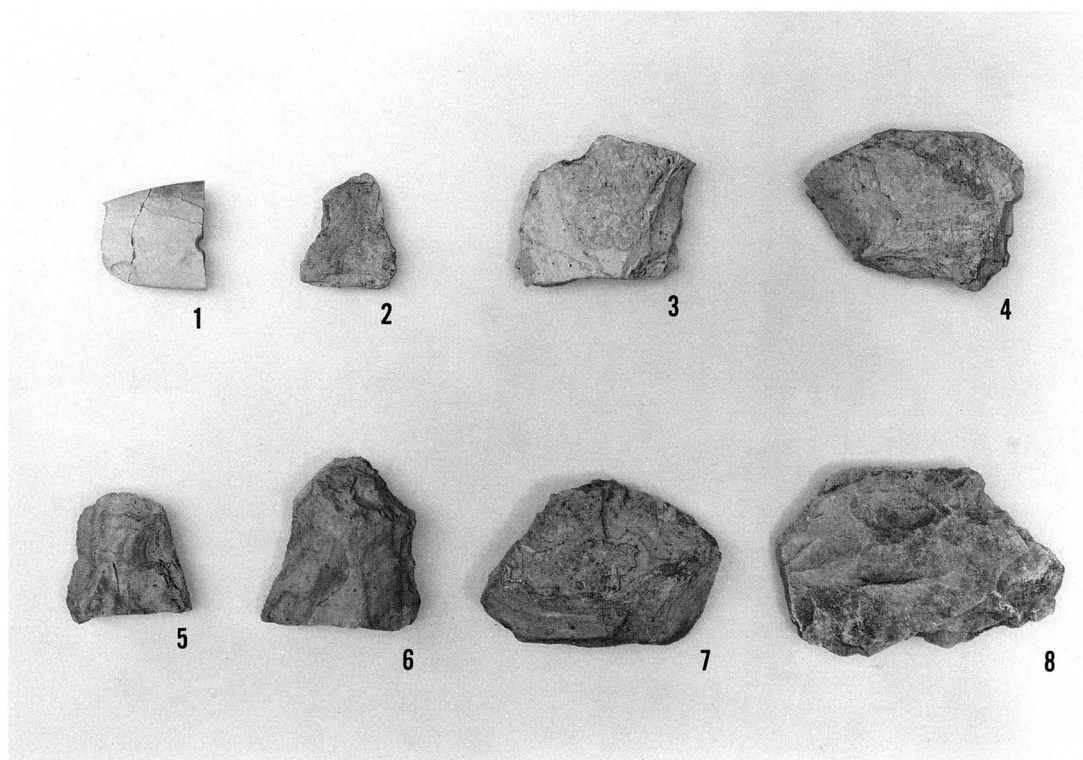


4

1 - 平鍬未成成品、2 - 竖杵、3 - 用途不明未成品、4 - 建築材 (1/6)
1, 2 - SX-102出土、3 - SD-103出土、4 - SD-106出土



1～7・10-石鏃、8-石槍、9-石鏃、11-スクレイパー、12-杓子形土製品
13-土錘、14-投弾、15～26-石庖丁 (1/3)



1 - 石庖丁、2 ~ 12 - 石庖丁未成品



a. 調査前風景（北から）



b. 第1トレンチ全景（西から）



a. 第2トレンチ全景



b. 第2トレンチ SD-01



a. 第3トレンチ全景



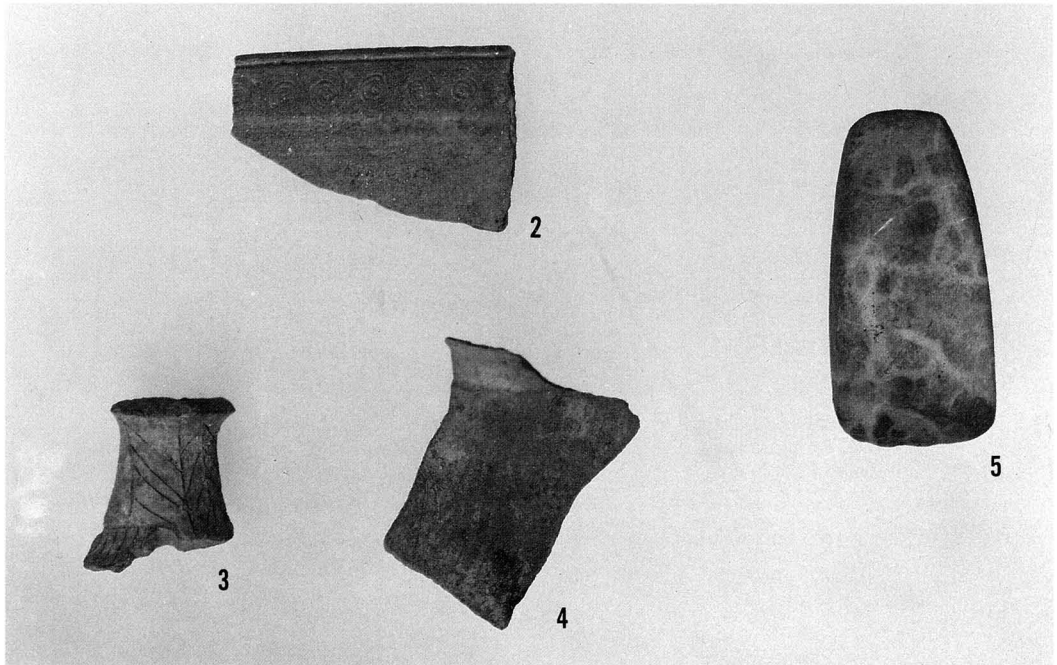
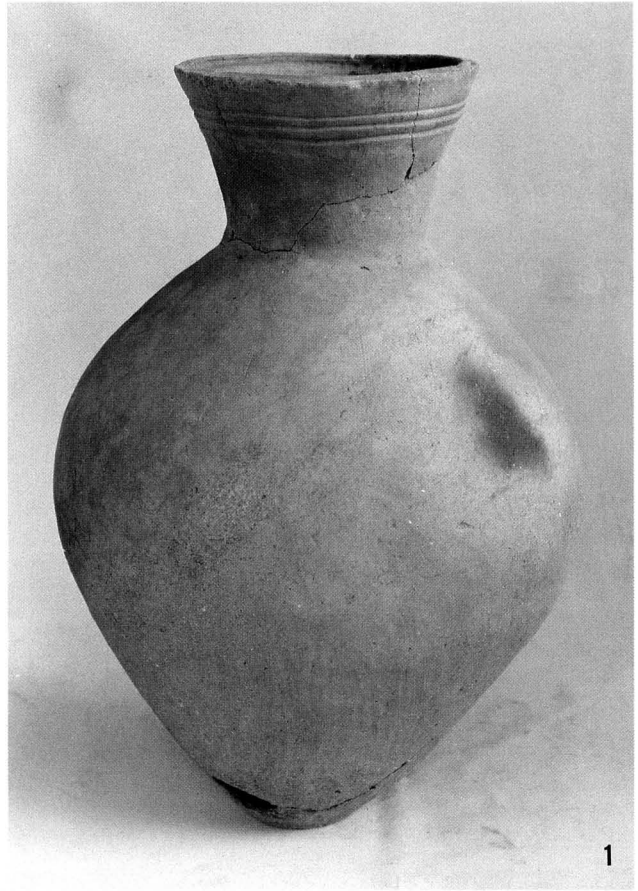
b. 第3トレンチ 土層堆積状況



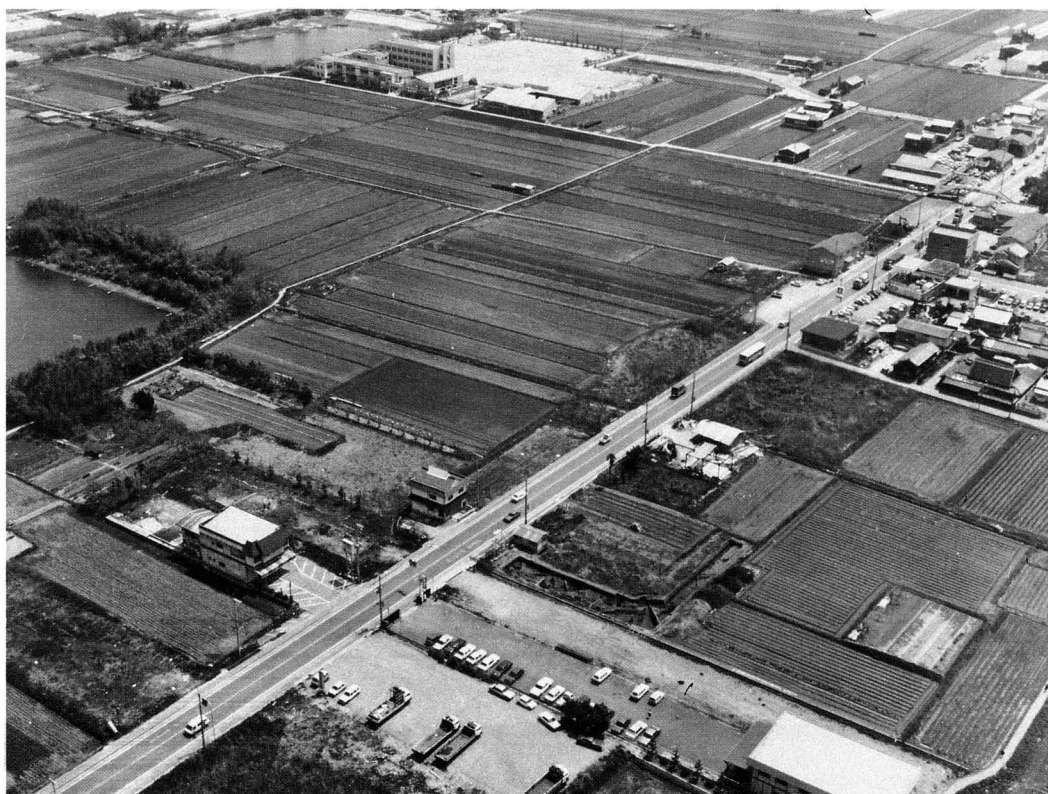
a. 第3トレンチ
短頸壺出土状況



第3トレンチ SK-01



1, 2, 4 - 北方砂層出土土器、5 - 大型蛤刃石斧



a. 遺跡空中写真（北西から）



b. 調査地空中写真（上が南）